

ISSN 1883-9924

甲南英文学

No. 36・37 合併号



2022

甲南英文学会

編集委員

(五十音順、*印は編集委員長)

杉浦裕子 福島彰利 *岩井学

目 次

—— 特別寄稿 ——

Henry James と Modern American Poets:

Donald Justice と Cid Corman を中心に :

もし、ジェイムズが詩を書いたとしたら 。。。・・・ 別府 恵子 1

—— 研究論文 ——

喪失を型から起こす

—Great House に見るホロコースト三世の表現・・・ 秋元孝文 33

狂気のレッテルを免れたヴァージニア・ウルフ

——主治医サヴェッジ医師の矛盾, そして

『ダロウェイ夫人』のレディ・ブルトンと

ウルフの共通点 ・・・・・・・・・・・・ 梅田 杏奈 59

イギリス小説における乳母の表象・・・・・・・・・・・・ 市川亜矢子 85

An experimental study of the role of quantificational

information in resolving ambiguity

in co-ordination

Izumoto Kenta 111

—— 書評 ——

川野靖子著『壁塗り代換をはじめとする格体制の

交替現象の研究』東京：ひつじ書房

青木 奈律乃 139

特別寄稿

Henry James と Modern American Poets:

Donald Justice と Cid Corman を中心に：

もし、ジェイムズが詩を書いたとしたら。。。*1

別府恵子

1.はじめに：ジェイムズと口述筆記

すでに、数年前になりますが、ジェイムズ没後百年記念国際学会の開催(2016)は、文学表現におけるジャンルの「横断現象」をあらためて考える契機となりました。小説作家が小説以外のジャンル、詩、戯曲、評論や書評を手掛けることは、珍しい現象ではありません。メルヴィル (Herman Melville) には *Moby Dick* と同等に研究対象に取り上げられる *Battle Pieces* や *Clarel* などの重要な詩作品がありますし、フォークナー(William Faulker)が、最初に出版したのは「詩集」『大理石の牧神』*The Marble Faun* でした。J.C.オーツ(Joyce Carol Oates)、マーガレット・アトウッド(Margaret Atwood)など現代作家も「詩集」を出版しています。コミュニケーションのツールである言語、「ことば」は、意味=センスだけでなく音=サウンドがそれぞれ独自の機能、効果=インパクトを持っています。読者は目で活字をおいながら、その背後に音を耳にしながら作品を鑑賞します。

近代小説の「巨匠」として知られるジェイムズ (Henry James) は小説、旅行記、戯曲のみならず広く文芸評論、ひいては全 26 巻によぶであろう書簡を遺しています。ところが、詩は一篇も書いてい

ません。今回、以前から意識の片隅にあった、何故「どうしてだろう」との疑問を取り上げ、ジェイムズと詩作とのかかわりを、考察する機会をいただき感謝しています。そこで、タイトル「もし、ジェイムズが詩を書いたとしたら」は、個人的思考、推察の話であることを最初にお断わりしておきたいと存じます。

周知のとおり、ジェイムズは、晩年、1890年代後半から、右手首に支障をきたし(俗にいう *writer's cramp*)、口述筆記に依存していました。不思議なことに、難渋とされるジェイムズ後期の小説も声を出して読む/聞くと、活字のみを追うより理解が容易なことを経験した読者は私ひとりではないと想像いたします。その秘密の一端を 1890年代に書かれた短篇、そして旅行記『アメリカの風景』を例証に、ジェイムズの文体に散見される「詩の要素」を見てみたいと思います。

伝記作家エデル氏 (Leon Edel) によりますと、手書きの原稿を直接、編集者、そして出版社に送っていたジェイムズは、1880年代にタイプライターが普及すると、いち早く、プロの速記者(タイピスト)に原稿を送るようになります。そして、1890年後半 1896-97年、*What Maisie Knew*執筆当時には、右手首の痙攣が慢性疾患になり、もっぱら、私設の速記者に頼ることになります。タイプライターのキーを打つ書記に直接語りかけることで、相手の存在を意識し、音声の魅力を演出できる、高価な機器だとタイプライターを礼賛しています。そして、読者は、口述筆記された作品の個所とそうでない箇所を明確に識別できるといいます (Edel 455-57)。小説家ジェイムズが、作品の中にタイプライターの音＝自分の声を聞く、そして、音のリズムを意識して創作に関わったとの指摘は、ジェイムズの小

説に「音を聞く」効果が加味され、その「文体」、ひいては総体としての表現者ジェイムズに繋がっていきます。

2. 『アメリカの風景』 *The American Scene* (1907) の「スタイル」

1904-05年、20有余年の時を経てジェイムズは祖国再訪を実現し、文字通り精力的に、10ヶ月余に及んで、ニューヨーク、ニューイングランド東部の都市、南北戦争の傷跡を残す南部の都市（チャールストン）、さらに、西部カリフォルニア、そしてフロリダまで、精力的に移動した旅の「印象記」を記録したのが『アメリカの風景』です。すでに、『アメリカ印象記』（青木次生訳、大橋健三郎監修）として1976年に抄訳が出版されています。半世紀後のいま、その新訳が、ジェイムズ自伝『ある少年の思い出』（1994）、『ある青年の覚え書・道半ば』（2009）の訳者たちによって進行中と聞いています。

近代小説の「巨匠」の名を自他ともに任じてきたジェイムズですが、今世紀、二十一世紀に入って、彼の小説以外の作品、旅行記、自伝などノンフィクションの研究——スタイルの考察に関心が向けられています。出版当時、『アメリカの風景』は一般には注目されませんでした。今日は、その *The American Scene* (1907) 出版後、いち早く、エズラ・パウンド (Ezra Pound) が、『一新せよ』 (*Make It New*, 1918) で、フランスの詩人レミ・ド・グールモンと並列して論じている評論“Henry James and Remy de Gourmont”を入り口に、「もし、ジェイムズが詩を書いたとしたら」の話を進めたいと思います。

旧大陸と新大陸、二つの世界を移動すること、また十九世紀と二十世紀二つの時代の大きな過渡期を体験し記録することを生涯の仕事としたジェイムズは、巡礼者、「哲学的旅人」であり、比較文化論者でありました。ジェイムズ自身、*Portraits of Places* (1883)のなかで、「ある民族を他民族と比較し、隣接する諸国家の風習と習慣を比較・対照・考慮することの利点。。。を明確に述べるのはむづかしい。しかし、私たちが世界をめぐりながら、こうした精神活動をたえず、行っているのは確かであって、コスモポリタンのなおぞましい気質——多くの国々を経験しながらも、何処にいても『くつろげない不安感』(restlessness)に染まっている場合にはとりわけそうなのである」(PP 115)と述懐しています。

前出の『アメリカの風景』論で、パウンドは「二つの大陸双方をたがいに理解させることにその生涯を捧げたジェイムズ、その努力がどのようなものだったか、思慮ある読者だけが理解できる。それを考慮すれば、彼の文体(スタイル)について、人がとやかく言うのを聞くのにうんざりする」と述べ、つづけて「彼の芸術は、彼が対峙しその解明に費やした葛藤と克服の努力ゆえに、精錬されすぎ、あるいは懲りすぎたとの評価に対し『偉大、見事だ』というしかない」と結論します。“...After a life time spent in trying to make two continents understand each other, ... I am tired of hearing pettiness talked about Henry James’s style ...His art was great as opposed to over-elaborate or over-refined art by virtue of the major conflicts which he portrays...(Pound,“Herny James and Remy de Gourmont,”*Make It New* 252, 255)。

さらに続けて、ジェイムズが「目標としたのは、『ストーリー』でなく、その作品の構築には、重厚に積み上げ、絵画でいうキアロスクーロ(明暗法)、そして長文が必要だった。逡巡し、戸惑い、不透明(曖昧)さを加味することが必至だった。その限度を超えすぎた結果、蜘蛛の巣のような小説になり、自己弁護としての『メイジーの知ったこと』が誕生する。。。『アメリカの風景』そして、『ファイナー・グレイン』所収の5つの短篇、死後出版された未完の自叙伝『道半ば』において、とくに『スタイリスト』＝名文家として成功する」 “... The ‘story’ not being really what he was after, he starts to build up his medium: a thickening ‘chiaroscuro’ is needed, the long sentence; he wanders, seeks to add a needed opacity, he overdoes it, produces the cobwebby novel, emerges out or justifies himself in *Maisie* and ... He comes out the triumphant stylist in *The American Scene*... “(263 強調筆者) と、ジェイムズの生涯をかけた旅行記の集大成を絶賛します。執筆での葛藤を理解した上での、『アメリカの風景』など、後期作品に寄せるパウンド評価です。

ジェイムズが、祖国再訪で目に、耳にした、二十世紀初頭の「アメリカの風景」の顕著な変容とは、第一に、多種多様な移民たちが、リラックス＝“at rest”して生活しているあり様です。それは、ニューヨークの electric cars (高架鉄道) を利用する大勢の「エイリアンズ」＝移民者たちを目にした印象です。「ひとり一人例外なく、見間違えることのない異民族性を明らかに証明する顔、顔、顔、の列、堂々と主張する彼らの異民族性『エイリアニズム』——二十世紀初頭、多数の移民たちで占拠された祖国アメリカの変容ぶりに対する

驚きの反応です」 “... a row of faces, up and down, testifying without exception,... to alienism unmistakable, alienism undisguised and unabashed”(The American Scene 125 強調筆者)。その「エイリアニズム」は、顔の特徴もさることながら、彼らが話す「ことば」、アクセントの異なる彼らの発話の響き、^{ネイティヴ}帰国者の耳にとどく音楽に、ジェイムズは進化する未来のアングロ・サクソン語、「おそらく、世界で最も美しいことば」の予感を察知するのです。

本論は、ジェイムズと「人種差別」を論議する場ではありませんが、『アメリカの風景』で吐露される帰国者の諸言は、人種差別というより、彼らの多様性に対する純粋な驚きの表現で、いま、メディアを賑わせている BLM、LGBT、まして、トランプ元大統領の「アメリカ・ファースト」は、ジェイムズのナイーヴな「レイシズム」とは一線を画す認識です。繰り返し使用される“alienism”と三種三様のそれらの装飾語—“unmistakable,”“undisguised,”“unabashed”の“^{アリタレーション}un”の頭韻は、その驚きの表現です。興味深いことに、ジェイムズがニューヨークで目にした“a row of faces”につづく1行は、大西洋を挟んだもう一つの大都市、人々で混雑するパリの光景を詠んだパウンドの“In a Station of the Metro”と題した短詩：“The apparition of faces in the crowd./ Petals on a wet black bough”(1913,1916)を想起させます。と同時に、二つの表現の歴然とした相違を示しています。すなわち、ドキュメンタリー性を重視するリアリスト・ジェイムズに対するイマジズムを主張するパウンドとの差異を浮き彫りにする事例となっています。

つぎに^{リターニ}帰国者の関心を引いたのは、十九世紀から二十世紀への新しい時代、テクノロジー文明社会です。大陸横断鉄道の発展とプル

マンカーの出現です。アメリカの発展が西部開拓の歴史とするとアメリカ再訪の旅でジェイムズは、幌馬車で移動した移民たちの足跡を辿ることになります。先述のように、彼は、はじめて西南部に旅程を拡大しています。大陸横断鉄道は 1869 年に完成しましたが、それ以後テクノロジーの進化でプルマンカーという快適な列車での横断旅行が可能になりました。といっても、ジェイムズはプルマンカー=技術革新の利器が、必ずしも良い変化ばかりをもたらしたとは考えませんでした。

その初めての西部旅行を義姉アリス・ジェイムズへの書簡（1905 年 3 月 24 日付）に、プルマンカーでの旅の不自由さ、苦情を縷々書き送っています。“Here I am, at last, after a weary run, or crawl, from Chicago, beginning Monday night last, & ending late last Thursday, evening—the trains being many hours late... inspite of the Pullman civilization, & its human products, that clattered & chattered along with me. I almost broke down from tension, sickness & weariness...” 「先週月曜の夜シカゴを出発して、こういう遅い列車でさらに何時間も遅れて、木曜日の夕刻やっと目的地に到着。。。文明の利器プルマンカーの人間的な生産品にもかかわらず、ほとんど丸一日、。。。ガタガタ騒音の伴奏で揺られたため、緊張で気分が悪くそして疲労困憊の状態です。。。。」（*Dear Munificent Friends: Henry James's Letters to Four Women* 53 強調筆者）と苦情を吐露します。

さらに、西部への列車旅行に関して、『アメリカの風景』には見落とせない次のような記述——プルマンカーのエンジンの騒音と、かつて自然の豊かなウィルダネスを土地開発という名のもとに、原住民たちを平原から追放することになったことへの批判的言及です。

すこし長くなりますが、引用しますと：“.... Where was the charm of boundless immensity as over-looked from a car-window? the great monotonous rumble of[the Pullman]which forever seems to say to you ‘ See what I’m making of all this—see what I’m making, of what I’m making’ （中略） ...

“ ‘I see what you are not making, oh, what you are ever so vividly not; ... If I were one of the painted savages you have dispossessed, ... what you are making would doubtless impress me more than what you are leaving unmade; ... Beauty and charm would be for me in the solitude you have ravaged, and I should ever owe you my grudge for every disfigurement and every violence, for every wound with which you have caused the face of the land to bleed”

「車窓から眺める、果てしなくつづくウィルダネスの魅力は何処にあるのだろうか？」 と旅行者は問いかけます。彼を着実に目的地に運ぶ列車の単調な「ごうごう」という響は——「この広大な土地を開拓し、役立てていることをご覧あれ、私のしたことをご覧あれ、私が推進していることを。。。。」と、とどまることなく永遠に叫んでいるようにジェイムズの耳に響きます。乗客の彼は「君がしていないこと、手を抜いていることは見、見えですよ。君が、歴然としていないことがね。。。。 もし、私が、君が追放した顔に派手な化粧をした原住民のひとりなら、手つけず放置していることでなく、それ以上にしていることを目撃すること間違いなしですよ。なぜなら、豊かで美しい大地の魅力は、君が破壊した静寂のなかにこそあるのだから、君の暴力によるあらゆる形の自然破壊で、血を流した大地の痛み、傷を私は恨んでいるのだから」（AS 463 強調筆者）

と、土地開発、環境破壊への苦言として、走る列車の轟音に応答しています。

初期に発表した数篇の旅行記で、 ニューヨーク州北部、サラトガ、またニューポートにおける観光開発、豪壮なホテル建設、土地開発の負の面を、すでに指摘した「不安な分析者」the restless analyst＝ジェイムズならではの反応です。早くから、自然破壊、環境破壊への批判を論述してきた、アメリカ文明批評家ジェイムズは健在です。いまは、『アメリカの風景』の魅力を十分に考察するのが目的ではありません。前出『アメリカの風景』論で、パウンドがジェイムズを「小説家」と特定せず、また、その『旅行記』をあえて「散文詩」と称せず、ジェイムズを「スタイリスト＝名文家」としている点を強調しておきます。すなわち、ジェイムズが拘り続けた主題「アメリカ」へのオマージュ、独特の文体様式で書/描かれた「アメリカン・トリックタイク」と再評価しておくに留めておきます。

すでに触れたように、旅行記のプロ作家として出発したジェイムズは、その作家人生、移動の先々で、旅のスケッチを手掛け、その都度、色々な雑誌に寄稿しました。というのも、十九世紀後半、急速に普及した月刊雑誌への旅行記、旅のスケッチなどの寄稿は、即現金収入の約束を意味します。現金収入を常に必要とした現実派のジェイムズです。

興味深いことに、現金収入の目的以上に、旅先から、アメリカの家族、あるいは友人、知人に宛てに、じつに筆まめに手紙を書き送っています。晩年、「自叙伝」執筆に備えて、とくに第二巻『ある青年の覚え書き』では、兄ウィリアムとの往復書簡が主要な資料となっていますが、ここでは、兄ウィリアムでなく、二人の弟たち

(ウィルキーとロバートソン)に触れた書簡を取り上げたいと思います。

若い頃、背中にうけた不可解な傷 (obscure hurt) のため、南北戦争に参加できなかったジェイムズが生涯そのトラウマを抱えることになったのは、周知のところだ。『ある青年の覚え書』では、それが大きな部分を占めています。それぞれ、異なる個性的才能に恵まれたジェイムズ四兄弟、そして妹アリスですが、ここでは、ボブこと一番下の弟ロバートの稀有な才能とそれが開花されずに消失したこと、それに対するジェイムズの後ろめたさに関する箇所を紹介して、「もし、ジェイムズが詩を書いたとしたら」の話を続けます。ボブ天性の生命力や知覚やユーモアに満ちた話しぶりをジェイムズは次のように述懐しています。

“... There were times when Bob’s spoken overflow struck me as the equivalent , for fine animation, of William’s epistolary. The note of the ingenious in him spent itself as he went, but I find an echo of one of its many incidents in the passage of verse that I am here moved to rescue from undue obscurity. It is too ‘amateurish’ and has many irregular lines, but images admirably the play of spirit in him...” 「ボブの『話の氾濫』が、見事に生き生きとしているという点では、ウィリアムの書簡に匹敵すると私には思われた時がありました。ボブの利発さの発揮はその場その場のもの即興的 (spontaneous overflow) であって、その利発さは様々な表れ方をしたのですが、そのうちのこだま echo=影響 (ジェイムズ好みのことば) の一つを、『不当な忘却』から私がここに救い出そうという気になったボブの詩行のなかに見いだせるのです。この詩はあまりに『素人くさく』、不規則な行が多いのですが、彼の

中の精神の戯れを見事に反映してもいるといえます」と、記述しています。

『ある青年の覚え書』の 11 章——1863-65 年：戦場の弟たちを扱った章に引用されているボブの詩は、韻を踏んだカブレットで書かれた長詩で、キリストの十字架上の死と南北戦争の戦場での体験が書かれています。そして、ボブの精神は多くの災難をさまよった後に落ち着いて、じつに幸運にも、神への信仰をほとんど確実につかんだと、詩の解説が添えられています。参考までに長詩の一部を紹介します。

Although I lie so low and still
 Here Came I by the Master's will;
 He smote me at last to make me free,
 As He was smitten on the tree.
 ...
 Once was I wakened by Thy light,
 But years have passed, and now the night
 Takes me to Thee. I am innocent;
 So be it in Thy perfect plan
 A mansion is where I am sent
 To dwell among the innocent.

こうして低くしずかに横たわれど
 われ、ここに主の御心により、きたれり。
 われを解き放たんと、主打ちたもう
 主が木に打ちつけられ、

釘にて磔られしごと。。。。

。。。。

わがかつて汝が光で目覚めしが。

長の歳月を経る間、今夜のとばりが

われを汝のみもとに連れゆかん。われ満ち足れり。

汝が全き計らいにて、

われ、み館に送られて、無垢なる者と住まわんことを。

(*Notes of a Son and Brother* 459-460 note 1. 詩の訳は『ある青年の覚え書』(328-329)の日本語訳を参照。)

さらに、ジェイムズの母宛て書簡(1877年1月31日付)に、次のような文章があります。“I have got a note from Bob, enclosing several copies of verses. They have great and real beauty, in spite of their queerness and irregularity of form, and I shall be curious to see whether this form will grow more perfect. They are as soft as moonbeams in a room at night—so strangely pure in feeling.” 「ボブからの手紙を受け取ったところですが、その中に何篇かの詩が入っていました。それらの詩の形式は奇妙で不ぞろいですが、真の素晴らしい美しさを持っています。現在の形式がこれから、磨きをかけられ、完全なものになるのを見守りたい気持ちです。夜部屋に差し込んでくる月光のように柔らかで、何か純粋は気持ちにさせられます」と、兄らしい素直なコメントを母親に書き送っています。

1877年、南北戦争が終結して10年あまりの歳月がたっていることを考慮すると、ボブは兵役を終えた後も詩作を続けていたと推測できます。しかし、ジェイムズ家での父親の教育方針で、上の二人と

下の二人の兄弟の扱い方に差別があり、下の二人には、ウィリアム、ヘンリーのように才能をさらに助成するための、大学教育を受けさせることなく、ボブの文才を伸ばすような援助はありませんでした。ジェイムズ兄弟のなかで、ボブは詩を書いた唯一のメンバーです。そのことを、『ある青年の覚書』（1914）執筆の際、ジェイムズの贖罪の気持ちを込めて書かれたのが、「彼の詩を『不当な忘却』から救おうとした」の一文だと、推測の域を超えませんが、個人的見解です。

ふたたび、本題にもどりますと、ジェイムズは母親宛て書簡で、詩を“poetry”と指示せず、“verse”韻文としていることです。つまり、彼にとって「詩」は韻律をもった、ある形式のもとで書かれる「韻文」であったのです。この点はまた後で触れます。

しかしながら、アングロ・サクソン語に特有のリズム（韻律）から逃れることは不可能で、それが口述筆記をすることで、彼の小説など散文の文体に影響をもたらしたと推察されます。最近、二十一世紀になってから、ジェイムズ研究者の中に、彼の散文のなかに、「詩を聞くという」試みが少なからず見られます。Daniel Hannah の論文“Hearing Henry James’s Poetry”(2021)は、ジェイムズ作品のなかに、「詩的要素」を探る考察の一例で、巻末の「引用/参考文献」にあげた最新の *Henry James Review* には、そうした視点から書かれた二点の論考が掲載されています。“Hearing Henry James’s Poetry”で、ハンナー氏は、パウンドが、ジェイムズの成功したスタイルと推奨する短篇のひとつ“The Middle Years”(1893)の冒頭を、詩のスタンザ「連」に書き換え＝translate して、分析を行っています。“... this game of versification,...can be illuminating”と、彼自身も認めるように、「韻文

化の試み、そのものは啓発的なゲーム」であっても、ジェイムズすべての作品に適応されるわけではありません。また本短篇全体の「韻文」転換は不可能でなくとも無意味です。したがって、遊び心のゲームでも、それを詩作品と読むわけにはいきません（Hannah 1-4）。

The April day was soft and bright,
and poor Dencome,
happy in the conceit of reasserted strength,
stood in the garden of the hotel, comparing,
with a deliberation in which, however,
there was still something of languor,
the attractions of easy strolls.

...

（“The Middle Years”*NYE* Vol.16, pp.77-104）

なぜなら、周知のように、パラグラフをラインに分割したり、“assonance,” “consonance,” “alliteration” の多用だけでは、「詩作品」とはいえないからです。英語固有のリズム——弱強、強弱が発話に表出しただけなのですから。頭韻アリタレーションに関しても同様のことが言えます。（『アメリカの風景』からの引用、本稿 3-4 参照。）

最初に、モダニスト・パウンドの *The American Scene* 評に触れましたが、本稿のタイトルの二人のアメリカ詩人——ドナルド・ジャスティスとシド・コールマン——とジェイムズの関りを述べても、「もし、ジェイムズが詩を書いたとしたら」の話を続けます。

まず、ドナルド・ジャスティス（Donald Justice）の“Henry James at the Pacific”と題したソネットですが、旅行記、スケッチの雑誌掲

載で作家人生を始め、新旧二つの大陸を往復し、それらの異なる文化、風習の融合、相互理解を生涯の仕事としたジェイムズに相応しい“life writing”の見事な 14 行詩となっています。

“Henry James at the Pacific”—Coronado Beach, California, March 1905—

In a hotel room by the sea, the Master
 Sits brooding on the continent he has crossed.
 Not that he foresees immediate disaster,
 Only a sort of freshness being lost—
 Or should he go on calling it Innocence?
 The sad-faced monsters of the plains are gone;
 Wall Street controls the wilderness. There's an immense
 Novel in all the waiting to be done.
 But not, not—sadly enough—by him. His talents
 Such as they may be, want a different theme,
 Rather more civilized than this, on balance.
 For him now always the recurring dream
 Is just the mild, dear light of Lamb House falling
 Beautifully down the pages of his calling.

——Donald Justice——

「太平洋を望む ヘンリー・ジェイムズ」

——カリフォルニア、コロナード海岸、1905 年 3 月——

海に面したホテルの一室で、マスターは

腰を掛け、いま、横断してきた大陸を想って、物思いにふける
逼迫する災難を予知しているわけでない。

ただ、広大な大地が色あせて見える　それとも――

いや、失われた「イノセンス」と言い張るべきか？

大平原の悲しげな面をした怪物たちは　どこかに　消え去り――

始原^{ウイld'ネス}の荒野はウォール・ストリートの意のまま。　これらの状況の
もと、

偉大な小説が書かれるべしと、期待が控えている。

しかし、残念ながら、それは、マスターの仕事ではない――決して
彼独特の才能には、別の相応しい主題が必要

もう少し、洗練された主題――

いま、彼の脳裏を、繰り返しよぎる夢は

彼の仕事を待つ紙幅の上を照らす

ライのラム・ハウスの穏やかで懐かしい明かり。

――ドナルド・ジャスティス――

『アトランティック誌』の創刊百年記念に寄せたジャスティスの
十四行詩（雑誌掲載は 1986 年 1 月号）は、ジェイムズの、フィクシ
ョン、ノンフィクションを多数掲載した『アトランティック誌』の
創刊（1857）百周年特集号を飾るに相応しいジェイムズへのオマー
ジュとなっています。

次節で、もう一人の詩人シド・コールマンとジェイムズのコラボ
レーションを考察します。

3. James's letters: ジェイムズの書簡文学とシド・コールマン

前節で、ジェイムズの母親宛て書簡のなかで、ボブの未完成の詩作執筆への言及がありました。十九世紀後半から二十世紀にかけて普及した機械文明の利器をいち早く採用して、活用したジェイムズです。しかしながら、インターネット IT 文明の恩恵に浴するには生まれた時代が早すぎたといえます。通信手段としての電報 (*The Portrait of a Lady* で、電報愛用者 Mrs.Touchett を皮肉る表現がある) の効用は熟知していたジェイムズですが、手紙を書くことは、彼の日課の大きな部分を占め、単に返信の域をこえ、趣味として楽しんでいた嫌いがあります。

アメリカ再訪(1904-5)からイギリスへ戻ったジェイムズは、多様な日課——知人との会食、友人への訪問を終え、夜半十二時過ぎに帰宅した後も、書斎で手紙を書くのを日課としました。午前 1 時を過ぎるころには、三通の手紙を手書きしたといえます。ジャスティスのソネットにある、マスターに相応しい主題は、二十世紀の変容した祖国の風景(株式市場や利潤追求)でなく、彼自身の家族の風景、その人間模様だったと想像できます。家族のメンバーに飽きることなく、筆まめに旅先から、あるいは、サッセクス・ライに構えた、生涯唯一の彼の住まい Lamb House=「ラム・ハウス」での日常茶飯事、使用人の飲酒癖、訪問客のことなど、事細かに報告しています。というのも、ジェイムズは、書簡を、独立した「書き物」と考えていましたから、メールや SNS をビジネスだけでなく私的なコミュニケーションに使用する現在でも、おそらく、手書きの書簡を認めたと想像できます。

親しい友人の一人、チャールズ・ノートン (Charles Norton 1899 年 11 月 24 日付) 宛てに次のような書簡文学の魅力の記述があり、

エデルは『書簡集』第一巻のエピグラフに引用している周知の文面です。

“...The best letters seem to me the most delightful of all written things.If a correspondence has not *the real charm*, I wouldn't have it published even privately; if it has, on the other hand, I would give it all the glory of greatest literature.” 「優れた最高の書簡は、あらゆる文章のなかで読んで最もうれしいものです。。。一方、魅力のない書簡なら、個人的にでも、公表する気はありません。もし、魅力のあるものなら、それには最も偉大な文学としての栄誉を与えたい」と、書き送っています。

先述のように、ジェイムズは生涯、多岐にわたる作家仲間、知人、家族のメンバー宛に、残存するものだけでも、二万通を超す手紙を書き送っています。エデルの四巻『書簡集』をめぐっては、ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー所蔵のジェイムズ書簡の閲覧を、編纂作業を名目に長年、エデルが独占したと、研究者の間で不評を買った芳しくない歴史がありました。1984 年閲覧解禁と同時に、本格的、書簡編纂企画が開始され、生誕百五十周年（1993 年）を記念に『ヘンリー・ジェイムズ全書簡集』が、ネブラスカ大学出版局で進行中のことは、すでに触れました。したがって、「全集」完成時には、ジェイムズ自身、あるいは家族のメンバーの新しい事実が判明される可能性も予測されます。

ジェイムズは、魅力ある書簡は、読み手だけでなく、第三者が読んでも、書き物として評価されるべきだと述べましたが、その一例が、偶然、ウェブサイトで見にした——グレイス・ノートン(Grace Norton、1883 年 7 月 28 日付)に送られたジェイムズの手紙の一部が

一篇の詩として、紹介されていたのです。それが、今日のテーマ「もし、ジェイムズが詩を書いたとしたら」、というジェイムズとアメリカのモダニスト詩人—コールマンとの関わりを考察するきっかけとなったのです。六年前、2015年のことです。

シド・コールマン (Sydney=Cid Corman、1924-2004) は、ボストン生まれ。タフト大学を卒業後、1940年代終わりには、早くも、「ポエトリー・リーディング」を主催し、「これが詩」=“This is Poetry”という、ラジオ番組の企画も行っています。このような文筆活動から、同世代のリチャード・ウィルバー(Richard Wilbur)、アーチボルド・マックリーシュ(Archibald MacLeish)、マリアン・ムーア(Marianne Moore)と、多様な詩人たちと交流する機会に恵まれました。さらに、エール大学若手詩人シリーズ賞を受賞(アドリエヌ・リッチも受賞)し、有望視された詩人です。また、1950年には詩誌、*Origin*の創始者として、チャールズ・オールソン(Charles Olson)、ゲリー・スナイダー(Gary Snyder)、デニース・レヴァトフ(Denise Levertov)、ジョン・クリーリー(John Creeley)などの詩を最初に紹介しています。1958年から60年、スナイダーの口利きで日本で教職につき、アメリカと往復を繰り返し、翻訳、詩作、評論執筆と、多方面で活躍しますが、結局アメリカでの仕事がかまくらで、1980年以降は、日本に生活の場を求めることになります。したがって、アメリカでの知名度は低く、研究の対象に取り上げられることもありませんでした。

日本に移住して、四十年以上居住、多くの詩集(和紙を使用し贅沢な私家版)を出版しています。当然のことながら、日本文化に精通し、俳句を英語で発表。芭蕉の翻訳家としても高い評価を得てい

ます。彼の得意とする、短詩形は俳句の影響でしょう。京都にC C's café を開き、そこでポエトリー・リーディングを常時開催して、関西のアメリカ文学研究者には馴染みのモダニスト詩人です。

No Consolation

平静に！

I don't know

わたしには わからない

Why we live—

なぜ

but believe

生きるのか ただ

we can go

確かなことは

on living

生き続けるのは

because life's

生が

finally

結局

all we know

わたしたちが知る

anything

唯一の

about. In

ものだから。

other words—

いいかえれば——

consciousness

意識

is power——

認知する、

though it may

それは ^{パワー} 力—

seem at times

ときには

to be pure
misery.
Yet the way

まったくの苦痛だけ
としか
思えないけれど。

it propa
gates itself
from wave to

それが、一つの波から
波へと
増殖するので

wave so that
we never
cease to feel—

決して
意識が
なくなりはない。

though sometimes
we appear
to—try to—

ときには、
忘れようと
努力もし——

pray to—there
is something
holding one

祈るけれど——
何かが、わたしたちを
引きとめ

in one's place—
makes it a
standpoint in

ある場所に、
留めようとする
この宇宙の

the cosmos

拠点として

probably

だから、

wise not to

その場を放棄するのは

forsake. We

賢明でない。

are—yes—all

わたしたちは

echoes of

みんな、—そう——

the *same*. But

「同じもの」のこだま——

don't—please—too

だからと言って

much gener-

そうした気持ちを

alise these

押しつけてはいけない

feelings—each

すべて、生は、

life is its

それぞれ

own special

独自の

problem—so

特別の問題、

be content

だから

with your own

あなただけの

terrible

恐ろしくむごい

algebra.

アルジュブラ
難題で満足すること。

Don't melt in—

けっして、世間に

to the u-
niverse——

迎合しては
いけない

but be as
solid and
dense and fixed

できるだけ——堅固に
ずぶとく、
自らの居場所を

as you can.
Sorrow comes
in great crests

確保していなさい。
悲しみは大きな波で
襲ってくる——

and it rolls
over us
and almost

わたしたちを巻き込み
窒息させる勢いで、
でも、

smothers us—
yet leaves us
on the spot

わたしたちを、
その場に置いていく
それは強力、でも

and we know
that if it
is strong we

わたしたちは、
それ以上に
強いと

are stronger:
it passes—

知っている。いずれ
波は引いていく、

we remain

わたしたちは残る。

It wears us—

わたしたちを消耗し

uses us—

疲弊させる

but we wear

でも、その仕返しに

it—use it

わたしたちはそれを利用し

in return

消耗する

and it is

それは、盲目——でも

blind whereas

わたしたちは、ある点

we—after

知覚し、学習する——

a manner—

あわてることはない。

see. But wait.

みんな、

We will help

支えあうのだから

each other.

お互いに。

You have my

わたしの最高の

tenderest

愛情と

affection

そして、全幅の

and all my

信頼を

confidence.

約束しよう。

Henry James

ヘンリー・ジェイムズ

(Cid Corman/James's letter to Grace Norton)— (シド・コールマン/ジェイムズのグレイス・ノートン宛て手紙)

以上が、コールマンの“*No Consolation*”=「慰めではない」と題された詩です。——悩みを抱える相手には、はなはだ皮肉なタイトルです。コールマンが、“*translate*”=「借用」したジェイムズの書簡のおよそ三分の二です。悩みの原因は不明ですが、悲しみ、苦痛を訴える相手に、「ことば」がない。これは、克己、自制の薦めだと、断わりのあと、一連三行の三十連構成の詩に転換されています。韻律は、*trochee* (強弱格)、*iamb* (弱強格)、たまに *spondee* (強強格) が混同した不規則な二歩格の詩です。もっとも、モダニストのコールマン自身、俳句の影響もあって、好んで短詩形を多用、韻律は不規則です。先述したダニエル・ハンナーの言う“*the game of versification*”= (散文) の韻文化の遊びでなく、一篇の詩に完成しています。

最初の一語 強調イタリックの“*I*”は手紙では、強調されていません。その母音韻[ai]が詩全体に繰り返し使用されているのも、詩人の意図するところ。訳を介する必要もない平明なことばで書かれた「教条的」な詩というのが、大方の反応でしょう。

しかし、繰り返し音読すると、書き手の“*stoicism*”(克己精神)の薦めが詩に上手く展開(転化)されています。1883 年といえば、ジェイムズ四十歳。その前年、相次いで、母親、父親の死を経験し、イギリスに戻っています。相談役だった母親を亡くしたジェイムズは、年上のグレイス・ノートンを、母親に代わる相談相手として手紙のやり取りを生涯続けています。この書簡は、多くのジェイムズ研究

者が、言及する書簡の一つですが、コールマンが敢えて、詩として「トランスレイト」＝利用、盗用（appropriate）したのか説明がありません。*2

書き手「わたし」が、詩で強調されているのは、主体が詩の語り手と理解できますし、最終行の強弱二歩格は、“Henry James”と明記され、主体と手紙の書き手の同一性は明白です。特定の相手への手紙でなく、詩とされたことによって、独立した作品となり、読み手に広く開かれています。したがって、詩の中核になっている思想は、ジェイムズの美的信条であると同時に生の信条、品格（スタイル）とも重なります。『使者たち』（1902）の冒頭、グロニアニの庭園における、「いきること、できるかぎり生きること！それをしないのは大きな過ちだ」と、声を大にした助言は、ジェイムズ自身への激励のことばでもあります。それは、「克己心」、悲しみ、苦悩のさなかにおける「平静さの維持」と矛盾しません。

冒頭の四連——“*I don’t know/Why we live—but believe/ we can go/ on living /because life’s /finally/ all we know/ anything/ about. In /other words— /Consciousness/ is power—...*”が詩のエッセンス、すなわち、「生」とは、「意識、知覚がすべて」との思想はジェイムズの信条で、苦悩する、と訳される “*suffer/ suffering*”は、生すべてを受け入れることでもあるからです。（King Lear の＝“fullness of life”や Hamlet の “readiness is all”など、ひろく人口に膾炙する思想と通底。）

コールマンがマリアン・ムアーの推薦でフランス、イタリアに留学していますか、ムアーはジェイムズを尊敬していた詩人たちのひとりで、彼女の“An Octopus”やエッセイ“Homage to Henry James”で、ジェイムズの「アメリカ気質」を、作家の「スタイル」、すなわち、

抑制、謙譲、「放棄の美德」だと賛美しています。コールマンは、ジェイムズの手紙にその精神を読み取り、コールマン流の短詩形で作品として発表したのです。最終行の強弱「ヘンリー・ジェイムズ」は、送り手の単純な署名でなく、書き手の品格＝スタイル＝あり様で詩が閉じられるのです。魅力のある手紙は「最高の文学」だとしたジェイムズです。それがコールマンが意図したこともであり、話のテーマを「ジェイムズが、もし、詩を書いたとしたら」、とした理由です。

4. おわりに：ヘンリー・ジェイムズ――

“the great stylist”, “unrealized poet”

= 「優れた名文家」、「書かなかった詩人」

本稿で触れた Modern American Poets (アメリカのモダニストたち) ーエズラ・パウンド、マリアン・ムアー、ドナルド・ジャスティス、シド・コールマンは、ジェイムズと直接に関りを持った詩人たちではありません。しかし、詩人としてではなく、芸術家として、「スタイリスト＝名文家」ジェイムズの影響を受けた詩人たちです。その「こだま」＝“— we are echoes of the same”のひとかけの反響にしか、触れられませんでした。ジェイムズの小説、短篇作品にかぎらず、旅行記、手紙、自伝と、広くジャンルを超えて彼の「スタイル」の考察をする意義はあります。

話のはじめに、パウンドの『一新せよ』 (*Make It New*, 1918) に所収の「ヘンリー・ジェイムズとレミ・ド・グールモン」から、ジェイムズの文体——とくに晩年の佳作『アメリカの風景』に関する

所見を引用しましたが、省略した箇所―“... by ‘Poetry’ he possibly meant ‘high-falutin’ and he eschewed it in certain forms; himself... taking still higher falutes in a to-be-developed mode of his own.”「ジェイムズは詩を特別のもの、誇張した、気取ったもの、一種特別の様式が要求されると理解していたようで、彼は、それを避けて、彼独自の様式に進化させようとしたのだ」（266強調筆者）と、続きます。『アメリカの風景』で、移民たちで混雑するニューヨークの光景とパウンドの「地下鉄の駅で」の描写にもその違いは歴然です。パウンドが、『アメリカの風景』で、ジェイムズが完成した、詩とは異なる様式が“a mode of his own”なのです。

最後に、「もし、ジェイムズが詩を書いたとしたら」への、回答は「小説至上主義者」ジェイムズは、コールマンの詩を抱合したということ——いい換えれば、ジェイムズの書簡がコールマンの詩を抱合していることになります。

NYE 版の『使者たち』の「序文」を、ジェイムズは、“Novel remains still, under right persuasion, the most independent, most elastic, most prodigious of literary forms”―「適切な説得のもとで、小説は依然として、もつとも自由で、もつとも融通のきく(伸縮性のある)、並外れて最も幅広い文学様式」（NYE, Vol. 21.xxii）という一文で閉じ

ています。パウンドの指摘にあるように、^{スーパー・ラティグ・デ・イタリイ}最大級の表現が、繰り返され、(同義語)の選択に迷い、そのうちに、蜘蛛の巣のように、中心から、四方八方に広がる、ジェイムズ特有のスタイルに発展(進化?)するのです。

- *1 本稿は 2021 年 7 月 3 日オンラインで開催の甲南英文学会での講演に加筆、修正を加えたもので、文体は「語り口調」のままです。拙文を『学会誌』に公表する機会を与您にいただき感謝いたします。
- *2 当日、コールマンの詩は、ジェイムズの書簡のパロディといえるのではないかと、秋元孝文氏のコメントがあり、記して感謝いたします。

Appendix

James's letter to Grace Norton, July 28, 1883 (*Letters*. Vol.II, 423-425)

.... I don't know *why* we live—... but I believe we can go on living for the reason that (always of course up to a certain point) life is the most valuable thing we know anything about and it is therefore presumably a great mistake to surrender it while there is any yet left in the cup. In other words consciousness is an illimitable power, and though at times it may seem to be all consciousness of misery, yet in the way it propagates itself from wave to wave, so that we never cease to feel, though sometimes we appear to, try to, pray to, there is something that holds one in one's place, makes it a standingpoint in the universe which it is good probably not to forsake. You are right in your consciousness that we are all echoes and reverberations of the *same*, and you are noble when your interest and pity as to everything that surrounds you, appears to have as sustaining and harmonizing power. Only don't, I beseech you, generalize too much in these sympathies and tenderesses—remember that every life is a special problem which is not yours and another's and content yourself with the terrible algebra of your own. Don't melt into the universe, but be as solid and dense and fixed as you can.

We all live together, and those of us who love and know, live so most. We help each other—even unconsciously, each in our own efforts, we lighten the efforts of others, we contribute to the sum of success, make it possible for others to live.

Sorrow comes in great waves—no one can know that better than you—but it rolls over us, and though it may almost smother us it leaves us on the spot and we know that if it is strong we are stronger, inasmuch as it passes and we remain. It wears us, but we wear it and use it in return: and it is blind, whereas we after a manner see. ... Don't think, don't feel any more than you can help, don't conclude or decide—don't do anything but *wait*.... You have my tenderest affection and all my confidence. Henry James.

注 手紙の冒頭、また、中略された箇所、倒置された箇所などは下線で表示。
ご参考までに 20-25 頁に引用のコールマンの詩と比較してください。

引用/参考文献

James, Henry. *The American Scene*. intro. Leon Edel. Bloomington: Indiana UP, 1968.

_____. *Autobiography, A Small Boy and Others, Notes of a Son and Brother, Middle Years*. ed. F.W. Duppee. London: W.H. Allen, 1956.

_____. 『ヘンリー・ジェイムス自伝——ある青年の覚え書・道半ば』、市川美香子・水野尚之・船坂洋子訳。大阪教育図書、2009。

_____. *Dear Munificent Friends: Henry James's Letters to Four Women*. ed. Susan Gunter. Ann Arbor: U of M P. 1999.

『心ひろき友人たちへ：四人の女性に宛てたヘンリー・ジェイムズの手紙』 別府恵子・難波江仁美訳。大阪教育図書、2014。

_____. *Letters*, Vols.II.III ed. Leon Edel. Cambridge: Harvard UP, 1975.

_____. “The Middle Years,” *NYE*. Vol.16. New York: Charles Scribners, 1909.

_____. *Portraits of Places*. London: MacMillan 1883.

_____. “The Preface,” to *The Ambassadors*, *NYE*. Vol.21. New York: Charles Scribners’, 1971.

Blair, Sara. *Henry James, and the Writing of Race and Nation*. New York: Cambridge UP, 1996.

Bosanquet, Theodora. *Henry James at Work*. ed. Lyall H. Powers. Ann Arbor: U of M P, 2006.

Corman, Cid. *Living Dying: Poems of Cid Corman*. New York: New Directions, 1970.

_____. <http://www.hhimwich.com/hughlinengs/2011/06/henry-james-and-cid-corman>.

Edel, Leon. *Henry James: A Life*. New York: Harper & Row, 1985.

Hannah, Deniel. “Hearing Henry James’s Poetry,” *The Henry James Review*. Vol.42. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2021.

Justice, Donald. “Henry James at the Pacific”.

<http://www.theatlantic.com/past/docs/unbound/fkasbks/james/jjust.htm>

Kees, Weldon. “Henry James at Newport,” *The Collected Poems of Weldon Kees*. ed.

Donald Justice. U of Nebraska P, 2003.

Moore, Marianne. “An Octopus,” *The Complete Poems of Marianne Moore*. New York: MacMillan, 1981.

_____. *Homage to Henry James: Essays by Marianne Moore, Edmund Wilson and Stephen Spender*. R.P. Blackmur et al. New York: Paul P. Appel. 1971.

_____. “Picking and Choosing,” *The Complete Poems*.

Pound, Ezra. “Henry James and Remy de Gourmont,” *Make It New: Essays by Ezra Pound*, 1918; New Haven: Yale UP, 1935.

Rowe, John Carols. *The Other James*. Durham: Duke UP, 1998.

Seltzer, Mark. *Henry James and the Art of Power*. Ithaca: Cornell UP, 1984.

別府恵子 「20 世紀初頭の多文化/多民族社会——ジェイムズの『アメリカの風景』再読」
『英語圏文学：国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』竹谷悦子・長岡慎吾・中田元子・山口恵理子編。人文書院、2002 年。

_____ 「ヘンリー・ジェイムズ、<空間/時間の移動>、<リタラリー・ナショナルリティ>」、『ヘンリージェイムズ、いま——没後百年記念論集——』里見繁美・中村善雄・難波江仁美 編著。英宝社、2016 年。

口頭発表

新関芳生 「F.S. Fitzgerald as “Poet/Playwright”(初期作品における詩的・演劇的要素について)、日本アメリカ文学会関西支部「フィッツジェラルド・アフタヌーン、大阪市立大学、2019 年 7 月 13 日」。

研究論文

喪失を型から起こす

—*Great House*に見るホロコースト三世の表現

秋元孝文

0. Introduction: ホロコーストを書くことの困難

これまでの研究が明らかにしてきように、ホロコーストの経験を書くことには多重の困難が伴う。具体的には、言語の限界、共感の不可能性、フィクションとして書くことの妥当性への疑問、そして当事者でない場合はその体験への時間的・空間的距離などが挙げられる。それぞれ簡単に要約する。

まず言語の限界については、多くのサバイバーの手記や、“To write poetry after Auschwitz is barbaric” というアドルノのよく知られたテーゼに明白である。ホロコーストという絶対的な暴力は、ことばの通常の用法をはるかに超えてしまう事態を出来させた。アウシュヴィッツのサバイバーである女性 Charlotte Delbo の手記において “thirst(渇き)” という語がいかにも通常の意味を超えてしまっているか Jessica Lang が指摘しているように、「われわれの理解する渇きとは彼女のいう渇きとはかけ離れたもの」であり、彼女が体験したアウシュヴィッツでの極限的な喉の渇きは、われわれが通常使用している言語で表現できる閾値を超えてしまっている(39)。Elie Wiesel や Primo Levi といった代表的なサバイバーの手記にも、その手記での言葉を読者には「decipher(解読すること)ができない」「code(暗号)」に喩えたり(Wiesel 7)、そこで起こった事態を表現する言葉が「私たちの言葉にはない」という表現が出てくる(レーヴィ 26)。こうした通常の言語の限界が、

まずはホロコーストを書くことの困難として立ち現れる。

次に共感の不可能性がある。これは Robert Eaglestone が指摘している。われわれはホロコーストについて理解するためにサバイバーの証言を読むが、それは同一化できないものに同一化しようとする、いわば失敗を運命づけられた行為である。手記はそれを経験していないものには決して理解しえないものを描いており、しかし読むという行為は本来的にそこに同化しようという試みであり、ゆえにホロコーストの手記を読むという行為は必然的に失敗することとなる。こうして読者がホロコーストに「接続」するためには言語の壁と共感の壁が立ち上がる。

以上の二つは手記 (testimony) を読むことにかかわる困難だが、これが文学作品になるとさらに別の問題が加わる。ホロコーストを小説で書きうるのか、その権利が誰にあるのか？という問題である。これについては、Wiesel がトレブリンカ絶滅収容所について語った “A novel about Treblinka is either not a novel or not about Treblinka” との言葉に明らかであろうし (7)、あるいはサバイバーでハンガリー初のノーベル文学賞受賞者であったケルテース・イムレが映画『シンドラーのリスト』を批判して、「サバイバーに残された最後の所有物である “authentic experience”」を奪っていると言ったことを思い返してもいいだろう (269)。しかし、こういったホロコーストをフィクションにすることへの強い疑義にもかかわらず、現実には、ホロコーストフィクションは常に存在する。比較的最近の例を挙げるなら、アウシュヴィッツ絶滅収容所でヨーゼフ・メンゲレの zoo と呼ばれる人体実験場で育てられた架空の双子姉妹の視点から彼女たちに交互に体験を語らせるという形式で書かれた、Affinity

Konar というアメリカ人作家の *Mischling*(2016) という小説がある。この作品では、メンゲレの実験のために少女たちが耳や目に液体を入れられ、失明したり聴覚を失ったり、腹を切られて内臓を取り出されたり、といった暴力が描かれる。史実を背景とした、あったかもしれない残酷な描写には思わず引き付けられるが、ホロコーストの体験者ではない作家が書いたこのような小説を読んだ時に覚える違和感は、ケルテースの指摘同様、犠牲者たちの authentic な経験が奪われ、利用、搾取されているのではないかという直感によるものであろう。

また、世代が離れた作家にとっては、ホロコーストは時間的にも空間的にも距離のある直接的な「接触」の叶わない題材であり、Aaarons と Berger は、フランスのサバイバー三世作家 Henri Raczymow を引きつつ、そのような世代の作家が強られる、ホロコーストを書くことへの強い要請とその不可能性のはざまのダブルバインドを指摘している(6)。上の世代が体験した惨劇を、書かなければならないという使命感と、しかし体験がないゆえに書くことができないという二つの命題の狭間で、のちの世代の作家は逡巡することとなる。

そんな中でサバイバーを祖父母に持つ 74 年生まれの Nicole Krauss が *Great House*(2010) でしたことは、こうした幾重もの困難を運命づけられたホロコースト・サバイバー三世の作家による、ホロコーストの描き方のひとつの誠実な例ではないだろうか。彼女はインタビューで、“I am the grandchild of people who survived that historical event. I’ m not writing their story—I couldn’ t write their story” と言い、“There are characters in my novels who have either survived the Holocaust or been affected by it. But I’ ve written very little about the Holocaust in terms of

the actual events”と語っている（“Nicole Krauss on Fame, Loss, and Writing about Holocaust Survivors”）。クラウスの父方の祖父母はドイツとウクライナ出身のユダヤ人、母方の祖父母はハンガリーとベラルーシ出身のユダヤ人で、とくに父方の祖母はポーランドでアウシュヴィッツへ送られるためのテレージエンシュタット（強制収容所とゲットーの両方の機能を持つ）に入れられ、そこで出会った医者からロンドンへのキンダートランスポート（1938年11月ボグロム[水晶の夜]を受けてイギリスが行ったナチス下のユダヤ人児童輸送受け入れ事業）の引率者としてビザを発行してもらい、ロンドンへと渡って生き残った経歴をもつサバイバーである。生き残った祖母の両親のゆくえはわかっておらず、この背景は本作でも登場人物の一人 Lotte の背景として再現されている。こうした祖父母世代の直接的ホロコースト体験を書けないという自覚を持つクラウスは、本人の言葉通り、実際の出来事としてのホロコーストは *Great House* においてもほとんど書いていない。しかし、そのホロコーストを書くことの不可能性を引き受けたうえで、本作はそれでもホロコーストを描くことに成功している。

直接的経験を持たない三世の作家は、いかにホロコーストを書きうるのか？記憶を個人のものから世代を超えた家族的な継承と、同時代の人々によって広く共有されるものとして拡張したマリアンヌ・ハーシュの「ポストメモリー」の概念がそのヒントを提供してくれる。

“Postmemory” describes the relationship that the “generation after” bears to the personal, collective, and cultural trauma of those who came before—to

experiences they “remember” only by means of the stories, images, and behaviors among which they grew up. But these experiences were transmitted to them so deeply and affectively as to *seem* to constitute memories in their own right. Postmemory’s connection to the past is thus actually mediated not by recall but by imaginative investment, projection and creation. (Hirsch 5)

上の世代が被ったトラウマ的な経験が、物語や画像、ふるまいを通して下の世代に伝えられ、それが想像力によって補強されてそれじたい記憶のようになること、これがポストメモリーである。こうしてあとの世代はポストメモリーを持ち、時にそれを作品にする。クラウドの場合はこのポストメモリーをどのように作品化しているのか？ということを考えるために、本論では物語の構造と「身体とモノ」を取り上げ、「接続」と「接触」という視点から考察し、作品が何に「接続」していくのかを論じ、最後に「触覚的身体」の問題に結びつけてみたい。

1. *Great House* とタイトルの意味

まずは作品プロットの紹介をしたい。この作品は非常に複雑で、語り手の異なる 8 つの断章から成り立っている。全体が第 1 部と第 2 部に分かれ、同一タイトルの章は同じ語り手によって語られ、計 5 人の語り手が登場する。それぞれの章はみな独立した物語だが、後半へ進むにつれて部分的に重なっていく。

ここで、結論をある程度先取りするが、作品タイトルの一つの解釈

を提示している部分を引用したい。最後から二つ目の章の終盤、George Weisz が、ユダヤ史学者だった父から聞かされた話としてひとつの逸話を披露する。紀元1世紀のラビ ben Zakkai は、エルサレムがローマ帝国に侵攻され、神殿が破壊された時、エルサレムなきユダヤ人はユダヤ人なのか？という問いに悩まされながらも、生徒たちに対して千年以上の法を集めるよう指示したという。

Day and night the scholars argued about the laws, and their arguments became the Talmud, Weisz continued. They became so absorbed in their work that sometimes they forgot the question their teacher had asked: What is a Jew without Jerusalem? Only later, after ben Zakkai died, did his answer slowly reveal itself, . . . ∴ Turn Jerusalem into an idea. Turn the temples into a book, a book as vast and holy and intricate as the city itself. Bend a people around the shape of what they lost, and let everything mirror its absent form. Later his school became known as the Great House, after the phrase in Books of Kings: *He burned the house of God, the king's house, and all the houses of Jerusalem; even every great house be burned with fire.* (279 下線部引用者、イタリック原文)

作品タイトルの“Great House”のひとつの答えがここでは提示されていて、国亡き後も物理的な home をなくしながらも聖書を home と

して移動の歴史を経てきたユダヤ人の思想の根幹が提示されている。ここで注目したいのは下線で強調した “Bend a people around the shape of what they lost, and let everything mirror its absent form” という表現である。喪失というのはいわば「ないもの」「無」であるが、人々、民族を bend してその型を取る、そしてその型に反射させれば失くしたものの形も再現できるというのである。この逸話を披露した後で George Weisz はかつて父親が語った話としてこう言う。

Two thousand years have passed, my father used to tell me, and now every Jewish soul is built around the house that burned in that fire, so vast that we can, each one of us, only recall the tiniest fragment. . . . But if every Jewish memory were put together, every last holy fragment joined up again as one, the House would be built again, said Weisz, or rather a memory of the House so perfect that it would be, in essence, the original itself. (279)

一人一人のユダヤ人の記憶がわずかなかけらであったとしても、それを持ち寄ればもともとあったものを復元できると Weisz の父は言う。Ben Zakkai が Bend a people around the shape of what they lost と言ったように、喪失でさえその型を取り、型から起こせば、「本質的に、元のものと同じ」ものを再現することが可能だ言っていて、前者の引用ではエルサレムに関して、後者の引用ではユダヤ人の

歴史に関して言及しており、この部分は国なき民であるユダヤ人のアイデンティティについて書かれたものと一義的には解釈すべきだが、*Great House* という作品では、この部分が、この作品自体がなしているホロコースト表象についての自己言及ともなっているのではないかとと思われる。ホロコーストもまた、「喪失、ないもの」あるいは「接触できないもの」だ。特に世代を隔てたクラウスのような作家にとっては。しかし、その記憶の欠片を集めて型を取ることで、クラウスはその再現不可能なものに不可能なりに「接続」し、再現しようとしているのではないだろうか。

2. ポストメモリーと「モノ」

先にホロコーストを描くことの困難さの要因として、言語が本質的に抱える限界があるのだということを指摘した。小説作品ゆえ、*Great House* もこの言語が抱える限界から逃れえないのだが、それでもホロコーストを描くために、ことばではなく「モノ」がこの作品の中心に置かれているのではないだろうか。ホロコースト表象における、言語に対する「モノ」の優位性は、たとえば Washington D.C. やイスラエルのヤド・バシェムのホロコースト記念館での展示を思い出してもいいだろう。これらの場所ではホロコーストの歴史や背景、犠牲者の生と死がときにテキスト、時に写真や映像によって展示される。中でももっとも訪問者に強い印象を与えるもののひとつが、収容所で殺された人々の何千足という靴の山だ。靴の本来的な用途とは、歩行の際に足を守り快適さを高めることだが、ここでの展示ではそれが大量に堆積されていることと、その「モノ」に対する主であるはずの身体がすべて消されてしまったという事実を見るものに突きつける。

こうした「モノ」がもつ喚起力はハーシュの *The Generation of Postmemory* でも触れられていて、その 8 章で「帰還の物語 (narrative of return)」において三つの作品を題材に「モノ」が持つ喚起力が論じられているが、この議論は同じく narrative of return である *Great House* にも当てはまるだろう。この作品には中心となる主人公はいない。しかし中心となる「モノ」はあり、それが机である。

最初の章で Nadia は 1972 年に友人のついでで Daniel Varsky というチリ人の詩人から大きな書き物机を借り受ける。天板の上下に 19 もの引き出しがある、部屋全体を占有してしまいかねないほどの大きな机である。Varsky は翌年チリで秘密警察によって逮捕され、おそらくは政府の弾圧を受けて拷問にかけられ死んでしまったのではないかと噂される。Nadia は 1999 年のある日 Varsky の娘を名乗る女性 Leah からの電話を受けて机の返却を余儀なくされる。ところが Nadia はこの机と離れてから作品が書けなくなる。そこで彼女は残されたメモを頼りに机を追って Israel を目指す。

第 1 部の 3 章目の “Swimming Holes” では、ロンドンに住む元 Oxford 大学の英文学教授の Arthur Bender が作家である妻 Lotte との生活を回想するが、1970 年に Daniel Varsky という見知らぬ青年がやってきて、交流を重ねるうちに Lotte がこの愛着のある机を自分の知らぬ間に Varsky にあげてしまっていたことをのちに知る。Arthur はかつて Lotte と最初にあったころ彼女の小さな部屋にあったこの机の不気味さを次のように表現する。

In that simple, small room it overshadowed everything
else like some sort of grotesque, threatening monster,

clinging to most of one wall and bullying the other pathetic bits of furniture to the far corner, where they seem to cling together, as if under some sinister magnetic force. It was made of dark wood and above the writing surface was a wall of drawers, drawers of totally impractical sizes, like the desk of a medieval sorcerer. (83)

過去についてほとんど語らない Lotte は、ドイツ出身で、ナチによって両親や兄弟を失っておりキンダートランスポート（イギリスが行ったナチ下のユダヤ人児童輸送受け入れ事業）の引率となることでなんとか死を免れた過去を持つ。第2部の同じ “Swimming Holes” の章では晩年の Lotte はアルツハイマーになり、彼女が徘徊の末保護された治安判事の手で語った話から Arthur は、実は自分と出会う前に Lotte は子供を出産して手放していたことを知り、Arthur はその相手の男こそがこの机を Lotte にあげた男に違いないと考える。

第1部4章目の “Lies Told by Children” ではかつて Oxford の学生であった Isabel が昔の恋人 Yoav Weisz の妹 Leah からの手紙を受け取り、二人の父 George Weisz が自殺したこと、家に引きこもった兄を助けるために Ein Karem、Ha’ Oren st. の家に来てほしいという連絡を受けたところから、彼女の回想が始まる。そのなかで明かされるのは Yoav と Leah の兄妹は母を亡くして以来、アンティーク家具商人であった父 George に連れられて、家具を探し売るために世界中を転々としてきたこと、そして父 George は 1944 年にハンガリーはブダペストで S S（ナチ親衛隊）によって両親が逮捕され、家や家具、

財産のすべてを奪われ、今彼がやっていることはかつてのブダペストの父の書斎にあったすべての家具を見つけ、それを Ha' Oren st. の屋敷に寸分たがわず再現することだということだ。その最後のピースがこの机なのである。これは今やエイン・カレムの家に兄とともに引きこもった Leah は、Isabel に送った手紙の中で、父親の狂気じみた計画について以下のように語る。

For forty years my father labored to reassemble that lost room, just as it looked until that fateful day in 1944. As if by putting all the pieces back together he might collapse time and ease regret. The only thing missing in the study on Ha' Oren Street was my grandfather's desk—where it should have stood, there was a gaping hole. (116 イタリアック原文)

ここまでの机の移動を歴史的時間軸に沿って並べ替えると、机はもとと George Weisz の父親が所有していたもので、それをナチが盗み、どこかからか明かされない経路を経てイギリスの Lotte の手に渡り、それが Daniel Varsky に渡り、NY の Nadia に渡り、最終的には Weisz がそれを見つけ出し、娘の Leah を使いにやって取り戻そうとする、という流れになる。ホロコーストの犠牲者としてナチに殺された父のブダペストの家の書斎をイスラエルの自宅に寸分たがわず再現しようという George Weisz の行為は、両親を殺されたサバイバーゆえの過去に囚われた異常なまでの執念によるもので、最終的には彼は書斎再現のための最後のピースであるこの机のありかを突き止め

る。

このように章ごとに時間軸を前後する構成において中心にあるのは継承される巨大な机であり、もともとはナチによって奪われ、それを息子が取り返し、不在であった空白を埋めようとするのがひとつの中心的なプロットなのだが、この Weisz 父子ばかりでなく、机にかかわった他の人々にもサバイバーが複数いる。自分の過去を夫にもあまり話さず、ドイツ語を捨てて生きた Lotte は、両親がナチによって殺され、キンダーTRANSPORTの引率となって一家で唯一の生き残りとなった人物である。第1部の2章目 “True Kindness” は、語り手 Aaron が小さいころからなかなか気持ちを通じ合わせることでできなかった息子の Dov に語りかけ、直接的に机とは関係しないが、語られている Dov は、実は第1部の最初の章 “All Rise” で机を手放しその行方を追って第2部の同章でイスラエルまでやってきた語り手 Nadia の運転する車に轢かれ、今や仮死状態にあることが終盤にほのめかされる。その Dov の父 Aaron も5歳の時にイスラエルにやってきたホロコースト・サバイバーであり、今や判事として成功している息子がドイツ車に乗っていることを、「ナチの子孫、死の収容所の門番」の車に乗っていると内心軽蔑している(59)。さらに加えるなら、73年のヨム・キプール戦争に従軍し、負傷した戦友を置き去りにせざるを得なかった Dov をなじるその戦友の父は、ビルケナウ収容所のサバイバーである。

こうしてこの作品ではホロコーストによって所有者の手を離れた机が流浪し、机じたいは何も語らないが、その周辺でサバイバーたちやその子孫が語る仕組みになっている。そしてその背景に間接的に浮かび上がるのは、ホロコーストやポグロムである。ただし、彼らにし

でも背景にホロコーストがあるだけで、決してその体験じたいは語らない。わかるのはそれぞれの語りの片隅でほのめかされるホロコーストの影と、彼らがみな妻や子供といった家族たちと円満な愛情関係を結べずにいる様子だけである。Berger and Milbauer の表現を借りるなら、そこにあるのは「親密さへの恐怖。ショアーにまつわる沈黙の中で育てられた故の、社会的場面での落ち着かなさ」なのだ(72)。

こうして *Great House* は、人を主人公にホロコーストの「体験」を直接的に描くということを周到に避けつつ、机という継承される「モノ」を中心に置くことで、その周辺でホロコーストを描くという手法を取っている。たとえば Arthur にとって、過去について話さないという暗黙の了解下にある妻の Lotte は常に謎である。

She struggled with her sadness, but tried to conceal it, to divide it into smaller and smaller parts and scatter these in places she thought no one would find them. But often I did—with time I learned where to look—and tried to fit them together. It pained me that she felt she couldn't come to me with it, but I knew it would hurt her more to know that I'd uncovered what she hadn't intended for me to find. In some fundamental way I think she objected to being known. (80)

ホロコーストの過去に由来する Lotte の悲しみは、存在しても隠され、彼女はそれを知られることを拒む。このように、サバイバーとその家族の間には常にどちらにとっても距離があり、それゆえに身体的

な接触が描かれることはほとんどない。まれに身体的な接触が描かれてもその様子は不自然さとして描かれる。

When you[Dov] came home at last you were neither the soldier I had watched disappear into the crowd, nor the boy I knew. You were a kind of shell, emptied out of both of those people. You sat mute in a chair in the corner of the living room, a cup of tea untouched on the side table, and winced when I went to touch you. From your wound, but also, I sensed, because you could not bear such contact. (186)

Great House で描かれる身体同士には距離があり、その距離は Lotte や Dov がそうであるように、接触やそれを通して内面を探ることを禁じるがための距離なのだ。

3. 石

作品がホロコーストを直接的に描くのではなく、机という「モノ」を中心にその周辺を描くことでホロコーストを描いていることを指摘したうえで、作品内でもうひとつ注目すべき「モノ」について触れたい。そしてこの「モノ」が作品とホロコーストを外に「接続」していくことを指摘したい。そのモノとは石である。最終章の Weisz の語りは以下のような謎かけで始まる。

A RIDDLE: A stone is thrown in Budapest on a winter

night in 1944. It sails through the air toward the illuminated window of a house where a father is writing a letter at his desk, a mother is reading, and a boy is daydreaming about an ice-skating race on the frozen Danube. The glass shatters, the boy covers his head, the mother screams. At that moment the life they know ceases to exist. *Where does the stone land?*(イタリック 原文 283)

この謎かけは Weisz 自身が経験した、終戦間近のブダペストで両親が逮捕されナチによって家や財産を奪われた経験に基づいているのだが、この内容は読者にとってはある程度予期されたもので、ナチによるホロコーストが 1938 年 11 月 9 日のクリスタル・ナハト(水晶の夜、英語では the night of broken glass)に始まり、そこではナチによって扇動された民衆が石を投げユダヤ人の家のガラスを割り、襲い、シナゴークに火をつけたことを多くの読者は作品テキスト外の知識としてあらかじめ知っている。多くのサバイバーが登場するなか、読者はいつかホロコーストにまつわる事件が描かれる予感を持ちながらテキストを読み進める。ところが *Great House* は水晶の夜には触れず、あえて別のふたつの場所で石を投げつける。

ひとつめは第 2 部の “True Kindness” の章で目の不調を訴えた Aaron が息子の Uri に運転してもらって眼科医を訪れた帰りの場面である。

We were driving when out of nowhere a rock hit the

windshield. The bang was tremendous. Both of us flew out of our skin, and Uri slammed on the brakes. We sat in silence, barely breathing. The road was empty, there was no one around. By some miracle it took us a moment to fully grasp, the glass had not broken. . . . Had it gone through the glass it might have killed me. . . . Here is the first, I thought. The first stone to mark my grave. The first stone placed like a period at the end of my life. . . . And then, my child, I thought of you. . . . The stone can mean so many things to a Jew, but in your hand could mean only one. (196)

ここで突然車のフロントガラスに石が飛んでくる。フロントガラスが割れなかったからよかったものの、割れていたら Aaron たちの命は危なかった。しかしこの石がどこから来たものかはわからず、その正体はその後明かされることはない。

もう1か所は第2部の “Swimming Holes” の章である。Arthur が亡き妻 Lotte の秘密を探求して帰ってきてみると、自宅の窓が割られていて、こぶし大の岩が落ちている。これまた誰の手によるものかは明らかにされることがない。

That evening I returned to Highgate to find that the front window of the house had been smashed. From the large hole a magnificent, delicate web of cracks radiated outwards. . . . On the floor inside, lying

among the broken glass, I found a rock the size of a fist. . . . The next day, when the glazier arrived, he shook his head and said something about rowdy kids, hoodlums, the third window they' d broken that week, and I felt a sudden pang and realized I had wanted the rock to be meant for me, the work of someone who wished to throw a rock through *my* window, and mine alone, not just any window. (271)

これら二つの場面でわれわれ読者は、ホロコーストでのユダヤ人を迫害するために窓に投げつけられる石をすでに予感することになる。だから、さきほど引用で見た、最終章で Weisz が語るブダペストの話は、すでに読者が準備していた予測の答え合わせにすぎない。しかし、44 年ブダペストでのユダヤ人への暴力に加えこれら二つの場面で時間と空間を隔てた場所で窓に投げつけられた石を知ったとき、石はテクストの外へも飛んでくる。この作品に「接続」しているわれわれ読者は、その石がいつ自分たちの窓に投げつけられるやもしれないということを感じる。こうしてここにきてホロコーストの暴力性は現在の世界へも「接続」され開かれる。*Great House* はホロコーストの絶対性を相対化によって軽視するのではなく、過去にも現在にもある atrocity (残虐行為) へと繋げるのだ。

ホロコーストが開かれるのはこの部分ばかりではない。第一章で Daniel Varsky はチリの専制に反対して拷問を受けて亡くなったと噂されていた。これはもうひとつの atrocity の例である。そして、最終章で George Weisz が、父の書斎を再現しようとしているイスラエ

ルの家についてさりげない逸話を披露するとき、*Great House* はホロコーストをまたもうひとつ別の atrocity へと「接続」してみせる。若かりし日にその家を買ったときのことを Weisz は次の引用のように語る。

One day I went back to the house, knocked on the door, and offered the man who lived there a sum he couldn't refuse. He invited me in. We shook hands in his kitchen. When I came here, he said, the floor was still littered with pistachio shells the Arab had eaten before he fled with his wife and children. (285)

前の住人がこの家に来た時に床にピスタチオの殻があったのはなぜか？なぜアラブ人が妻と子供を連れて逃げたのか？決して個人的な事情によるものではない。1948 年にイスラエルが独立を宣言し、ユダヤ人はアラブ人を襲う。彼らの家を奪う。パレスチナ人が「ナクバ」と呼ぶ今も続くパレスチナ難民の悲劇の始まりである。ホロコーストという atrocity の犠牲者であったユダヤ人が、新たな加害者となった瞬間だ。たとえばそのナクバの様子はパレスチナの作家ガッサン・カナファーニーの「ハイファに戻って」という短編小説にも描かれている（そしてこの作品はハーシュも言及している）のだが、Weisz 一家のエルサレムの家 Ein Karem の Ha' Oren st. という住所は、その家の呼び名として、繰り返して些か記憶に残る形で作品に登場する。そしてこの Ein Karem という今やエルサレムでも高級な住宅地となっている場所も、その地名からたどればわかるように、かつてはアラ

ブ人の土地だった。1948 年 4 月にデイル・ヤシーンという村でユダヤ人によるパレスチナ人の虐殺事件が起こり、この事件をきっかけに、危険を感じた数十万のアラブ人が現在のイスラエル領を脱出し、ヨルダンやエジプトに逃れて難民となったのだが、このエイン・カレムはその虐殺の舞台となったデイル・ヤシーンからほんの 2 キロの距離にある町なのだ。だから Weisz はホロコーストで失われた親の書斎を、つまりは犠牲者としてのユダヤ人の過去を、ユダヤ人が新たな加害者となった場所に再現することとなり、ここにユダヤ人の過去であるホロコーストと、現在であるイスラエル、そしてパレスチナ人のナクバが繋がることになる。

こういったほかの歴史的暴力行為と並置するやり方は、Michael Rothberg が Multidirectional Memory という概念で、犠牲者競争のゼロサムゲームに陥らずに、ホロコーストを起点として植民地主義や奴隷制との「差異」ではなく「類似」を見ることで共感と連帯を築こうとする姿勢とも重なる。こうして *Great House* はホロコーストを外部へと「接続」していくことになり、ホロコーストをユダヤ人の犠牲の物語だけでは終わらせず、今も続く複数の atrocity と並置してみせるのだ。そしてこれは、現代を生き、ホロコーストの犠牲者の子孫でありながら、ユダヤ人国家によって引き起こされた悲劇をも意識せざるを得ない三世ならではの視点だと言えよう。

4. 触覚的身体

書斎の再現を通して失われた両親の過去を再現しようとした George Weisz の計画は最後の段階でとん挫する。机の奪還を命じられた Leah は、父の計画をくじくために、Nadia から取り返した机を

エルサレムに送るのではなくニューヨークの貸倉庫に預けてしまう。それでも Weisz は倉庫の場所を突き止め、管理人を買収して机の前に座らせてもらう。ライフワークだった、ブダペストの父の書斎の再現が不可能となったのに、それでも Weisz が机に会いに行くのはなぜか？この最後の一節で彼が机に触れていること、触覚をもって机と対峙していることに注目したい。

I opened the door. The room was cold, and had no window. For an instant I almost believed I would find my father stooped over the desk, his pen moving across the page. But the tremendous desk stood alone, mute and uncomprehending. Three or four drawers hung open, all of them empty. But the one I locked as a child, sixty-six years later was locked still. I reached out my hand and ran my fingers across the dark surface of the desk. There were a few scratches, but otherwise those who had sat at it had left no mark. I knew the moment well. How often I had witnessed it in others, and yet now it almost surprised me: the disappointment, then the relief of something at last sinking away. (289)

モノが喚起する記憶についてはマリアンヌ・ハーシュもアレイダ・アスマンを引きつつ、I-memory というより me-memory と呼ぶべきより受動的、非自発的な記憶であり、言語や理性よりも身体や感覚によりアピールするものだと論じている(211)。かつてモノにわれわれが

投げかけたなにかは時を経てもそのモノに埋め込まれて残ったままなのだ。これがモノが喚起する記憶である。

さて、ここで擬人化された机は「物言わず(mute)」で「何も理解しようとしなない(uncomprehending)」と描写される。逆に言うなら、Weiszが求めていたのは机が何かを言うてくれることであり、何かを理解してくれることだったのであろう。

美学者の伊藤亜紗は西洋哲学において視覚より劣位に置かれてきた触覚の特徴を以下のようにまとめている。

触覚は、視覚とは違って、対象と物理的に接触する「距離ゼロ」の感覚である。かつ、認識に時間を要する「持続的な」感覚であり、それゆえ視覚よりも劣っている。一方で触る主体が触られる客体にもなりうるその「対称性」において、視覚とは異なる独自の特性を認められてもいた。(64)

ここで注目したいのは彼女が触覚の独自の特性だと言っているその「対称性」である。視覚は主体から一方的に投げかけられる感覚であるのに対し、触覚は触ったほうも触られる客体となる。触り方によって感じられる触覚が変化するように、触覚というのは「対話的」な感覚だと言ってもよいだろう。そして「対話的」であることの重要性は、この作品が5人の語り手による独白という、対話のない一方的な語りで構成されていることに注目する時、さらに高まる。

また、高村峰生は『触れることのモダニティ』でプルーストの『失われた時を求めて』について、無意識的記憶が触覚によって呼び起こされることを指摘している。

ブルーストの小説においても、触覚は記憶の非知的な側面と関連付けられている。無意識的記憶が形成されるのは、触覚が重要な役割を果たしている場合においてである——タオルの感覚、マドレーヌの味、敷石の硬さ、スプーンが皿に触れる音。これらの出来事や現象はすべて、マルセルが意図せずにして過去と出会うような機会をもたらす接触の瞬間を捉えている。モノに触れることで、知的精神からは抜け落ちてしまっている身体に保管されていた物事が一時的に呼び戻されるのだ。こうしたエピファニー的瞬間にあっては、過去と現在の区別は消失する。(232)

エピファニー的瞬間は意図して迎えることができるものではないだろうが、40年の時をかけて机に触れることを夢見た Weisz が夢想したもの、こうした「過去と未来の区別が消失する」エピファニー的瞬間だったのではないだろうか。彼は触覚を通して机からなにがしかの反応、返答を得たかった。だからこそ触覚を伴う接触が必要であった。しかし彼が味わうのは失望である。触覚に対する返答がなかったからだろうか。

机の前に座って、これまでもサバイバーのためのアンティーク家具商人として多くの顧客のためにかつて奪われた家具を見つけ出し、しかしながら家具を手に入れても多くの客が失望を禁じ得ないのを目の当たりにしてきた Weisz は、自分は違うはずと信じながら、結局は自身も失望を感じ、同時に何らかの解放の感情を。机をめぐる探求譚は円環を閉じることができない。そして、書斎を再現した時に起こ

るかもしれない何かを Weisz もわれわれ読者も見ることにはできない。

ここで 40 年にわたって探し続けてきた机に接触することで、Weisz はいったい何につながろうとしたのか。亡き両親の記憶だろうか。それをも含んだホロコーストの記憶だろうか。娘の Leah は父が机を取り戻すことで「時間を崩壊させ、後悔を消し去ろうと」していたのだと言い、机の欠けた部屋はぼっかりと穴が開いていると言う (116)。しかしその穴は埋められることがないのだ。こうして机は最後まで答えとならずに謎であり続ける。ホロコーストが、三世にとって、あるいはわれわれ読者にとって、永遠に全容を解明し十全に理解することが不可能な謎であり続けることを運命づけられているのと同じように。

そしてこの机は自身にも謎を抱えている。この机には 19 の引き出しがあるがその中にひとつだけ鍵のかかった引き出しがあり、そこには物語の秘密を解くなんらかの鍵があると読者は期待する。しかし、物語最終盤で Weisz が明らかにするように、子供の頃この引き出しに何かを入れていいと父親に許された Weisz はさんざん迷った挙句、何も入れないまま鍵を閉めたのだ (284)。鍵を開けた先には秘密があると思いきや、実は何もなく、何もないことが秘密だったという事態にわれわれは直面することとなる。

しかし、その「空(から)」の状態について Budick はこの引き出しが空にされたのではなくはじめから空であった、その状態が 40 年ののちにも保たれていることに注目し、“Therefore, it has maintained its emptiness over time, which is to say it has resisted the destructive forces of the material world” と積極的な意味を見出す(178)。ここにおいて、本論が注目してきた「喪失

の型を取る」、無いものに積極的な意味を見出し、その無のまわりを有にすることによって無を再現するという主題がまさしく繰り返されることとなる。中身がないことは、逆に言えば不在が「ある」、ということであり、それを必死に再現する。不在そのものを再現するのではなくそのまわりを再現することによって。だから再現されても何かの謎が解明されることはない。喪失は喪失のまま、謎は謎のままだ。三世にとってのホロコーストが、喪失であり謎であるしかないように、つまりは直接的な「接触」が叶わないものであるように。そしてそれにもかかわらず、その喪失や謎を再現しようとせずにはいられないこと、つまりは「接続」を求めずにはいられないこと、に自己言及するように、引き出しは空の状態を保ったままなのである。

Aarons, Victoria and Alan L. Berger. *Third-Generation Holocaust Representation: Trauma, History, and Memory*. Northwestern UP, 2017.

Berger, Alan L. and Asher Z. Milbauer. “The Burden of Inheritance,” *SHOFAR* 31.3(2013): 64-85.

Budick, Emily Miller. *The Subject of Holocaust Fiction*. Indiana UP, 2015.

Dickow, Sonja. “Architectures of Absence: Nicole Krauss’ s Novel *Great House*.” *Passages of Belonging: Interpreting Jewish Literatures*, edited by Carola Hilfrich et al., De Gruyter, 2020, pp.194-207.

Hirsh, Marianne. *The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After the Holocaust*. Columbia UP, 2012.

Kertész, Imre. “Who Owns Auschwitz?” *Yale Journal of Criticism*, vol.14, no.1, 2001, pp. 267-272.

Konar, Affinity. *Mischling*. Atlantic, 2016.

Krauss, Nicole. *Great House*. Norton, 2010.

Lang, Jessica. *Textual Silence: Unreadability and the Holocaust*.

Rutgers UP, 2017.

Marsh, Ann. “The Emergence of Nicole Krauss.” *Stanford Magazine*. September–October 2005. Web. 23 Aug. 2021.

<https://stanfordmag.org/contents/the-emergence-of-Nicole-krauss>
 “Nicole Krauss on Fame, Loss, and Writing about Holocaust Survivors.”
 Interview with Jennie Rothenberg Gritz in *The Atlantic*, October 21, 2010.

<https://www.theatlantic.com/entertainment/archive/2010/10/nicole-krauss-on-fame-loss-and-writing-about-holocaust-survivors/64869/>

Rothberg Michael. *Multidirectional Memory: Remembering the Holocaust in the Age of Decolonization*. Stanford UP, 2009.

Wiesel, Elie. “The Holocaust as Literary Inspiration,” *The Dimensions of the Holocaust*, annotated by Elliot Lefkowitz, Northwestern UP, 1977, pp. 5–19.

アライダ・アスマン 『想起の文化－忘却から対話へ』（2016）安川晴基訳、岩波書店、2019年。

ロバート・イーグルストン『ホロコーストとポストモダン』（2004）田尻芳樹・太田晋訳、みすず書房、2013年。

ガッサン・カナファーニー「ハイファに戻って」（1970）『ハイファに戻って / 太陽の男たち』黒田寿郎訳、河出文庫、2017年。

プリーモ・レーヴィ『これが人間か』（1958）竹山博英訳、朝日新聞出版、2017年。

伊藤亜紗『手の倫理』講談社選書メチエ、2020年。

木畑和子『ユダヤ人児童の亡命と東ドイツへの帰還』ミネルヴァ書房、2015年。

高村峰生『触れることのモダニティ』以文社、2017年。

※本論文は2021年12月4日に開催された日本アメリカ文学会関西支部第65回大会におけるシンポジウム「アメリカ文学における触覚的身体の変容－「接触」と「接続」をめぐる－」での口頭発表に加筆改稿したものである。

狂気のレッテルを免れたヴァージニア・ウルフ
——主治医サヴェッジ医師の矛盾，そして
『ダロウェイ夫人』のレディ・ブルトンとウルフの共通点
梅田 杏奈

Synopsis

Was Virginia Woolf “insane,” or not? This question is still controversial. Some critics argue that she had seriously gotten in trouble with some mental illness; others argue that her madness must have been an intrigue by doctors against her. In fact, her mental illness was diagnosed as “neurasthenia,” and she almost killed herself twice in 1904 and 1913. However, it is also true that there is no indication of her madness or frailty in any of her texts, from her maiden to her posthumous work; rather, the description of the psychiatrist, for example Sir William Bradshaw in *Mrs Dalloway* (1925), evidently proves her toughness and shrewdness. This character is now notorious for their oppressive behaviour toward his patients. From this point of view, she is successful in criticizing the doctor severely. This essay is aimed at making these aspects of her as a strategist clearer by analysing the facts behind her “neurasthenia,” and the relationship between Virginia Woolf and Dr. Savage, one of her family doctors and one of the models of Sir William. We will also find the inconsistency between his medical opinion and his treatment of her because of his concern for her social position. This offers the possibility of a resemblance between Woolf and Mrs Bruton, a character in *Mrs Dalloway*, who escapes from the label of madness because of her power and social status.

序論

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) と狂気といえ、どうしても自殺という行為自体に注目してしまいがちである。しかし、彼女の小説どれをとっても、自殺前まで執筆していた『幕間』(*Between the Acts*, 1941) においてすら、作者が自殺するかもしれないなどといった考えを読者に抱かせるような張り詰めた精神状態や、読者の精神状態をも憂鬱にしかねないほどの狂気の影響などは見当たらない。もっと若い頃についていえば、神経衰弱と診断され、自殺未遂を繰り返していたのも事実だが、処女作『船出』(*Voyage Out*, 1915) にも『夜と昼』(*Night and Day*, 1919) にもそのような兆候は見出せない。むしろ、『ダロウェイ夫人』(*Mrs Dalloway*, 1925) では、医師に対する怒りのはけ口としてサー・ウィリアム・ブラッドショー (Sir William Bradshaw) のような人物を仕立て上げ、批判するなどといった強かさや大胆さすら感じられる。本論ではウルフに同情して医師を批判する立場をとるのではなく¹、主治医であるジョージ・ヘンリー・サヴェッジ医師 (George Henry Savage) の論文や著書を中心に分析を行うことで、彼の医学的見解とウルフへの対応に見られる矛盾を暴き、狂気とは医師の匙加減で決められたことを明らかにする。また、その矛盾には権力の影が潜んでいると考えられる。これまで『ダロウェイ夫人』に描かれる権威といえ、ブラッドショーが代表的な人物とされてきたが、ここではウルフの狂気と権力の関係を明らかにするため、社会的地位によって狂気のレッテルを免れたレディ・ブルトン (Millicent Bruton) について分析を行う。

1 ジョージ・ヘンリー・サヴェッジ医師がウルフに施した治療

1895 年、13 歳で母を失くした年からウルフ（当時は旧姓スティーヴン）の精神病遍歴は始まる。以降、1941 年に入水自殺を図るまでの約 60 年の生涯の間にたびたび神経衰弱を引き起こし、自殺未遂も繰り返していた。クウェンティン・ベル（Quentin Bell）やリンダル・ゴードン（Lyndall Gordon）の伝記によると、ウルフは自殺を 3 度図っており、1904 年には窓から身を投げ、1913 年には睡眠薬を過剰に摂取し、そして最期となる 1941 年には入水自殺を遂げた。そんな彼女を担当した医師はスティーヴン一家のかかりつけ医であるシートン医師（Dr Seton）をはじめ、ジョージ・ヘンリー・サヴェッジ医師、モーリス・クレグ（Maurice Craig）、T・B・ヒスロップ（T. B. Hyslop）、ヘンリー・ヘッド（Henry Head）などであり、『ダロウェイ夫人』に登場する悪徳医師ブラッドショーのモデルになったと言われている²。

そのなかでも、1904 年から 1913 年の 2 度の自殺未遂に挟まれた 9 年もの間、ウルフの主治医を担当したのがサヴェッジ医師であり、このブラッドショーのモデルとして中核を占める人物とされている。しかし、もはやサヴェッジ医師本人以上に作中の悪名高い医師ブラッドショーの方が有名になってしまった今、ウルフによって彼にはられた権威主義的な医師というレッテルを剥がすのは困難である。確かに類似点は散見されるものの、必ずしもブラッドショーがサヴェッジ医師の生き写しといったわけではない。こういった点に留意しつつ、彼の著書や論文を読み進めると、彼の医学的見解とウルフへの対応にはいくつかの興味深い矛盾も見られる。まずはサヴェッジ医師本人について、そして彼がウルフに施した処置について分析していく。

ヴィクトリア朝からエドワード朝時代の著名人の風刺画を掲載することでも知られるイギリスの週刊誌「虚栄の市」(*Vanity Fair*, 1868-1914)では、1912年“Mens Sana”と題してサヴェッジ医師の風刺絵が描かれている(図1)。これは、ちょうど彼がナイトの称号を授与された年にあたり、「時の人」という称賛の意味を込めて、風刺画家レイ(Ray)によって描かれたものである(Tian and Bause 65-66)。この事



図1 Ray, “Mens Sana”(1912)

実からも明らかなように、ヴィクトリア朝時代において彼は確かに権威ある医師であり、まだ発達段階にあった精神科の分野において高い地位にある人物であった。彼の経歴は華々しく、ガイズ病院(Guy's Hospital)やベスレム王立病院(Bethlem Royal Hospital)、ロンドン大学(the London University)で指導的な立場を歴任し、1878年からは『精神科学ジャーナル』(*Journal of Mental Science*)の共同編集者、また1886年に精神科医師協会(the Medico-Psychological Association)、1897年には神経学協会(the Neurological Society)の会長に選任されている³。加えて、1886年に出版された著書『狂気と神経症に関連する

病—実践・臨床の手引き』(*Insanity and Allied Neuroses: A Practical and Clinical Manual*)は1893年から1905年にかけて数回にわたり再版され、教科書や指導書として使用された。

ウルフがこの社会的な権威あるサヴェッジ医師の診察を受けたのは、1904年のことであり、父レズリー・スティーヴン (Leslie Stephen) の死後に起きた体調不良がきっかけであった⁴。サヴェッジ医師はもともレズリー・スティーヴン本人の主治医であり、1892年に自殺した親戚ジェームズ・K・スティーヴン (James Kenneth Stephen) も診ていたことから、彼が一家のおかかえ医師として信頼を得ていたことは明らかである。権威ある医師の抑圧に苦しんだ女性患者としてウルフは捉えられがちだが、彼女の主治医をしていた1904年から13年の狂気に関するサヴェッジ医師の主張に注目すると、女性教育と狂気の関係や精神病患者の増加といった問題を訴えている反面、ウルフについては「狂人」としてアサイラムのような病院に収容せず、「神経衰弱」という病名で自宅療養や私設の療養所へと送るのみであった。「狂気」と「神経衰弱」は同類であるかのような印象を受けるが、このふたつの間には狂気か否かという大きな違いがある。

では、狂気とはいかなるものなのか。狂気の症状には、自殺願望やうつ症状、精神錯乱、幻聴、幻覚などがあるが、このような症状があるからと言って一概に狂気と決めつけることはできない。ウルフに関しても、実際は正気を保っていたとしても、そのように仕立て上げられたのかもしれないし、もしくはそう演じていたのかもしれない。事実は本人にしかわからないというのが狂気という問題の複雑な部分である。

しかし、その曖昧な狂気と正気を区別するのが、精神科医たちの役割になる。つまり、彼らには目に見えない他人の精神を判断するという特権があり、患者が抵抗しようが否定しようが関係なく、狂人を生産することができるのである。では何を基準に狂気と正気を分けるか。ひとつの指標とされたのは自殺企図であった。医師たちは患者に自殺の兆候を見て取り、自殺する恐れがあると判断した場合、アサイラムへ強制送還することが可能となる。したがって、既に自殺未遂を図ったという経験を持つウルフは、この考えに従えば、精神異常という判定が下されても不思議はない。しかし、主治医であるサヴェッジ医師が実際に彼女に下したのは「神経衰弱」だった。

これは狂気と正気との間、狂気の軽症の状態といった微妙な状態を指す言葉として使われ、はっきりせず微妙だからこそ、患者の精神という目に見えない曖昧な症状を表現するには適しており、明確な病名をつけることが憚られる場合には特に有効な手段となった⁵。これは凶暴さや不品行な印象が伴うヒステリーとは区別され、知的な人間の疲労といった一面を持っており、ある種の安心感を患者やその家族に与えることができた。こういった事実を踏まえて考えても、明らかに自殺企図があるにもかかわらず、ウルフを「神経衰弱」と診断し、その治療法としてウルフに「安静療法」を施したサヴェッジ医師の判断には疑問が残る。

まず、サヴェッジ医師がウルフに行った処置として最も問題視されているのがこの「安静療法」である。これは、1875年にアメリカ人医師であるサイラス・ウェア・ミッチェル（Silas Weir Mitchell）が、神経衰弱を治療することを目的として考案した治療法であり、それを1881年、婦人科開業医のウィリアム・プレイフェア（Dr. William Smoult

Playfair) がイギリスに持ち込んだ。1 日数回カップ一杯のミルクが用意され、家族や友人との接触は一切禁止、読書も筆を執ることも許されず、頭を使うことを禁じられて患者はただただ過ぎる日々をベッドで安静に過ごすよう強いられる。回復の目安は患者の体重の増加で判断され、時には電気刺激を用いたショック療法が施されることもあった。サヴェッジ医師は「安静療法」との言葉は使っていないものの、「神経衰弱」の患者の治療法として休息が重要だと、著書『狂気と神経症に関連する病』の中で述べている。

Removal of the patient absolutely from all friends, and the personal supervision, in all but solitary confinement, of the patient by a skilled nurse. Rest is essential, in general in bed, and in pronounced cases for weeks. [...] Milk in half-pint quantities must be given every hour or two hours, and strong beef-tea in similar quantities in the morning and afternoon. (*Insanity and Allied Neuroses* 97)

患者を親しい友人たちから切り離して隔離すること、熟練した看護師だけが求められること、数週間にも及ぶ休息、1, 2 時間ごとのミルクの摂取といった必要性を訴えていることから、「安静療法」という言葉こそ使われてはいなくとも、明らかにミッチェルの「安静療法」に基づいた考えであり、社会的権威のある精神科医サヴェッジ医師もこの療法を推奨していたことがうかがえる⁶。

ゴードンやハーマイオニー・リー (Hermione Lee) といったウルフに同情的な批評家たちは、医師による抑圧として安静療法とサヴェッ

ジ医師を批判するが、この療法から読み取れるのは狂気に対する医師たちの恐怖心である。その鍵となるのが、安静療法の特徴のひとつである飲料用ミルクの積極的な摂取といえる。今では一般的だが、ミルクが飲料用として広く認識され、消費されたのは 20 世紀に入ってからみられる動きであるとマリア・ロリングー (Maria Rollinger) は指摘する⁷。それまではチーズなどの加工品を製造するものだったミルクが、鉄道での運搬と殺菌処理が可能になったことで飲料用として提供されるようになり、加工品を製造していた農家も飲料用として出荷するようになったというのである。これは、イギリスではちょうど国民の脆弱さが顕著になり、国民の強化を国が訴えはじめる時期と重なっている⁸。サミュエル・ハインズ (Samuel Hynes) によると、国民の衰退と国家の滅亡をローマ帝国の滅亡と結びつけた『大英帝国衰亡史』 (*The Decline and Fall of the British Empire*) というパンフレットが 1905 年に出版され、それに触発されたパウエル将軍 (General Baden-Powell) が Boy Scout を 1908 年に結成して次世代の育成に力を注ぐなど、国民衰亡に対する危機感が国内では高まっていったという。そして、この危機感は国民の身体的な脆弱さに対してだけでなく、精神的な弱体化としての精神病も例外ではない。サヴェッジ医師をはじめ、医師たちは国家存続の危機を狂気の増加へと結びつけていくことになる。

2 サヴェッジ医師の矛盾—狂気の増加と遺伝—

1907 年、サヴェッジ医師はまさに「狂気の増加」 (“The Increase of Insanity”) という論文を執筆している。これは、同年に行われた王立内科医協会 (the Royal College of Physicians) での講演をまとめたものであり、その中で彼は文明の発展によって狂気 (insanity) が増加して

いると述べている。女性教育の問題についてもその論文の中で論じているうえ、ちょうどウルフの主治医を担当していた時期と重なることは興味深く、ウルフと全く関係がないとは言い切れない。特に女性が男性と同じ権利を得たことによって、狂気の蔓延に繋がっていると主張している。

The insanity associated with premature decay, with toxic brain infection, is best represented by general paralysis of the insane. Here again, without doubt, there is considerable increase. [. . .] In England the progress is steady, and it is interesting to note that this disease is now more prevalent among women than it used to be. This is markedly observable in Scotland. Women will have men's rights and with them they incur further risks. ("The Increase of Insanity" 17)

女性が男性のように権利を獲得することで狂気が増加するだろう、事実イングランドとスコットランドにおいて、かつてに比べて女性の間で増加していると主張する。その原因は女性の地位向上だという。この根底にあるのは男性に比べ女性は劣っているため、男性と同等の負担には耐えられないだろうという視点である。1907年の講演であることを考えれば、女性にはまだ参政権もないが、これからデモやハンガーストライキへと過激化していく直前の時期ともいえる。1903年にはエミリ・パンクハースト (Emmeline Pankhurst) による女性社会政治同盟 (Women's Social and Political Union (WSPU)) も既に発足して活動していたことから、こういった婦人参政権獲得運動の過激派のこ

とも念頭に置いた発言であるとも考えられる。優しくか弱いと信じていた女性が、制止する警官に唾を吐くなどの行為をして逮捕されるなど、行動を起こして声を上げることで権利を主張する。このこと自体が論外であり、そのような女性は「普通」の女性ではなく「狂気」なのだと言われ、レッテルを貼り付け片づけてしまうのである。つまり、狂気が増加したという事実は、視点を変えれば正気の間も狂気に分類したために引き起こされたとも考えられるのである。

また、狂気の増加に対する危機感のなかには、遺伝が原因だとする考えもあった。サヴェッジ医師が上記の講演を行った前年、精神薄弱者の救済と統制に関する英国審議会（the Royal Commission on Care and Control of the Feeble-Minded）と題した精神病者への治療や対応に関する委員会が立ち上げられ、政府による調査結果が出版されている。その調査によると、精神を病んだ人が増加しているという危機感を抱いたのはサヴェッジ医師をはじめとした医師たちだけではなく、つまり危機感が国民にも浸透していたことが明らかとなる。なかでも精神病の原因は何にあるかという質問に対して、事件や患者自身の環境などといった回答に加え、遺伝という答えがあったことにサミュエル・ハインズは注目している⁹。つまり、狂気が親から子へと継承されるものだと考えられていたというのである。したがって、遺伝による狂気がそれ以上社会に増えることを阻止するため、男女を隔離するなどの措置が推奨された。

しかし、一方でサヴェッジ医師自身は、狂気と判定された患者が結婚することについて部分的ではあるが肯定的であり、1911年の論文「狂気と結婚について」（“On Insanity and Marriage”）の中で “The lay public as a whole, and the majority of medical men, would at once reply to

the question as to the insane ever being allowed to marry in the negative, but I shall contend that a dogmatic statement of this kind is unscientific and unpractical. Such a declaration is taking it for granted that all insanity is alike and is to be treated as of equal value” (97)と、一概にすべての患者の結婚を否定する意見を非科学的で無分別なものだと批判している。続いて、精神の不調に悩まされながらも回復して結婚した患者の例を挙げながら、結婚が必ずしも悪い結果を生むわけではないと述べる。しかし、神経性の妄想癖などが患者の症状にある場合、“Neurotic heredity certainly must influence your advice when you have to decide when the patient has symptoms of some form of insanity, such as delusional insanity, which is generally met with in members of insane families” (98-99)とあるように、家系で遺伝する病である可能性があるため注意が必要だと述べている。このことから、「狂気」を一括りに捉えることは否定しているものの、神経性の病が家系で遺伝するという点については認めていることが分かる。

また、狂気の遺伝に対する危機感のなかでも興味深いのは、「狂気と結婚について」の末尾（Joint Discussion）において展開される平凡重視の議論である。ここではサヴェッジ医師の「狂気と結婚について」だけでなく、イワート医師（Dr. Charles Ewart）による「優生学と退化」（“Eugenics and Degeneracy”）という論文についても言及しており、平均的な人間を残すことの重要性を強く主張している。

If a race is healthy, vigorous, and successful, the best citizens are those who approach the average. They would have well-balanced nervous organisations, and they would hand on the same characteristics to their

offspring, for if physical strength is transmitted, so must mental strength. These men would be more useful than geniuses who are individuals with a disproportionate development of some particular faculty, leading to a disturbance of mental equilibrium, psychopathic phenomena, and emotional spasm. Can such be designated as Nature's finest handiwork? And whoever has heard of a genius being produced from an idiot or imbecile? These remarks are made because it is evidently the belief of some that by segregating the feeble-minded you will produce nothing but mediocrities. I am not touching the question of the "insane." Another important point to remember is the "transmutation of disease," which means that diseased organisms are apt to breed disease, but not always, though sometimes, their own disease. (112)

精神病をはじめとするマイナスな面だけでなく、知性や才能といった一般的には良いもとされている要素も、ともに狂気の一部として排除の対象とされている。いや、むしろ天才であるがゆえに病的な症状を持っているという主張にも思われる。したがって、過度に天才的でもなく、かといって劣っているのでもない者こそが後世に残るべき存在として選ばれるのである。ここに、天才と狂気とを兼ね備えたウルフの患者像が浮かび上がる。これが 1910 年の議論であることを考えれば、自殺未遂や体調不良をはじめ精神疾患を抱えた 1910 年頃のウルフはもちろん排除の対象であり、国の発展に不要な存在とされたのは明らかである。のちに小説家として大成し、実験的な手法を用いた小説を書いていくということを考えても、平凡や平均を理想とする医師にとってはどちらも大差なく、ウルフは後世に残すべき遺伝子要素と

は全くかけ離れた存在であることが証明されるだけである。

サヴェッジ医師はこのように、狂気の遺伝を危惧し、とくに神経衰弱は遺伝である可能性が高いとしている。そのため、神経症患者の結婚については否定的な主張が見られる。例えば、「狂気と結婚について」においても “Marriage should never be recommended as a means of cure. In so-called hysterical cases the prospect even of relief is small, and the risk of permanent alienation is great. [. . .] I would speak equally strongly against marriage as relief for so-called neurasthenia or hypochondriasis, and I have already said that for sexual disorder it is dangerous” (100)と、ヒステリーの症状や心気症、性的倒錯と並んで神経衰弱の患者にとっても結婚が良い方向には働かない、むしろ悪影響となる危険が高いと述べている。ところが、ベルの伝記によると、この論文が出版されたすぐ翌年に、ウルフはレナード (Leonard Woolf) との結婚に同意している (341)。結婚についてウルフがサヴェッジ医師に指示を仰いだとは考えにくい、完全にその結婚を否定し阻止しきれていないからこそ、この結婚が実現していると考えられる。また、ウルフが子どもを持ちたいと願った際も、結局は夫レナードと他の医師による反対で叶わなかったが、サヴェッジ医師はウルフに賛成している¹⁰。

サヴェッジ医師をブラッドショーのモデルになった医師のひとりとして悪徳医師のように扱い批判することは多い¹¹が、こういった女子教育や遺伝に関する彼自身の見解とウルフへの対応についての矛盾に注目した論はほとんどみられない。彼はレズリーやジェームズズの治療医も担当しており、彼らの病状や狂気的な兆候にも詳しいはずである。したがって、家系から遺伝したとして狂気のレッテルをウルフ

に貼ることは他の医師が行うよりも説得力もあり簡単にはずなのである。つまり、レズリーやジェイムズの狂気を知りつつ、遺伝的狂気の危険を唱えるサヴェッジ医師が、自殺企図のある女性患者ウルフの病気をあえて「神経衰弱」にしたことから考えられるのは、狂気か否かを判断するのは医師の匙加減であるという事実である。そして、そこにはヴァージニア・ウルフという地位ある女性に対する配慮が見られる¹²。ウルフが矯正入院へと至らず自宅療養や私設療養所での生活にとどまれたのは、名の知れたレズリー・ステイーヴンを父に持ち、決して労働の苦勞を負う必要のない裕福な家系に生まれた彼女自身の社会的地位によるものなのではないか。医師に批判的な論では、ウルフが医学という権威の犠牲者であり非凡であるがゆえに排除された女性とみなされるが、彼女は権威や医師を批判しつつも、安定した社会的地位を保持していたのであり、その恩恵も十分に得ていたとも考えられるのである。

3 『ダロウェイ夫人』におけるレディ・ブルトン—狂気と権力—

『ダロウェイ夫人』についてウルフは “In this book I have almost too many ideas. I want to give life and death, sanity and insanity; I want to criticise the social system, and to show it at work, at its most intense.” (*A Writer's Diary* 57)と 1923 年 6 月 19 日の日記に記しており、「生と死、正気と狂気」といった要素がこの小説の主要なテーマのひとつになっていることが読み取れる。そして、『ダロウェイ夫人』において権力を象徴する存在と言え、医師のサー・ウィリアム・ブラッドショーや、クラリッサ・ダロウェイ (Clarissa Dalloway) のパーティーに列席する英国首相が挙げられるが、狂気との関連という観点から考えた時、

もうひとりの存在レディ・ブルトンという人物が浮かび上がる。これまでレディ・ブルトンに関しては、ヒロインのクラリッサと敵対関係にある存在として取り上げられ、ミス・キルマン (Doris Kilman) やブラッドショーといった人物たちとともに論じられることが多く、ともに批判の対象とされてきた¹³。しかし、本論ではウルフの狂気と権力の関係を明らかにするため、ウルフ自身とレディ・ブルトンとの類似について分析したい。

レディ・ブルトンの権力について言えば、“Power was hers, position, income. She had lived in the forefront of her time. She had had good friends; known the ablest men of her day” (95)とあるように、時の権力を牛耳る人間の輪の中心人物であったとして明確に描かれている。また、他にもパーティーの場面では首相と対等に会話し、未だに高い地位や権力を持つ女性であることがわかる。

レディ・ブルトンは昼食会を開き、クラリッサの夫リチャード・ダロウェイ (Richard Dalloway) と国会議員のヒュー・ウィットブレッド (Hugh Whitbread) だけを招待する。クラリッサは自分が無視され、夫だけが昼食会に招待されたことにショックを受けるが、自分には以前のような華やかさがなく、時間とともに失う若さを実感するなか、“But she feared time itself, and read on Lady Bruton’s face, as if it had been a dial cut in impassive stone [. . .]” (26)と、時計つまり時間とレディ・ブルトンとを重ね合わせる。時間とは人間の意思に関係なく進み続けるものであり、時計は否応なく過ぎゆく時刻を告げる。クラリッサは自身の老いを突きつける存在として、レディ・ブルトンを連想するのである。『ダロウェイ夫人』において、時間と深い関りを持つ人

物といえば、精神科医のブラッドショーが挙げられる。批評家マイケル・ウィットワース (Michael H. Whitworth) も「ウルフはこの権威主義の医者 の 苗 字 に、時 間 管 理 と 同 じ 意 味 を も つ 言 葉 を 与 え て い る」(183) と 指 摘 し て い る 通 り、こ の ブ ラ ッ ド シ ョ ー (“Bradshaw”) と い う 名 字 に は 時 間 と の 関 係 が 見 ら れ、当 時 の 読 者 で あ れ ば『ブ ラ ッ ド シ ョ ー の 鉄 道 ガ イ ド』¹⁴ を 想 起 し た と 考 え ら れ る。ま た、“Shredding and slicing, dividing and subdividing, the clocks of Harley Street nibbled at the June day, counselled submission, upheld authority, and pointed out in chorus the supreme advantages of a sense of proportion [...]” (87) と る よ う に、時 間 は ブ ラ ッ ド シ ョ ー が 掲 げ る 患 者 の 支 配、つ ま り「均 衡 の 感 覚」(sense of proportion) を 擁 護 し、患 者 が 医 師 に 屈 す る こ と を 勧 め る 存 在 と し て 描 か れ て い る。こ の よ う に、時 間 と の 結 び つ き に よ っ て、ブ ラ ッ ド シ ョ ー は 支 配 的 な 形 相 を 帯 び る。一 見 す る と、レ デ ィ ・ ブ ル ト ン の 場 合 は ブ ラ ッ ド シ ョ ー ほ ど 規 則 的 で は な く 支 配 的 で も な い よ う に 感 じ る が、あ え て 同 じ よ う に 時 を 連 想 さ せ る も の に 重 ね ら れ る こ と で、レ デ ィ ・ ブ ル ト ン も ま た 支 配 者 側 に 属 し て い る こ と が 示 さ れ て い る と 考 え ら れ る。そ し て、ブ ラ ッ ド シ ョ ー が セ プ テ ィ マ ス を 診 断 す る 場 面 の 直 後 に、こ の 時 計 の 描 写 を 通 じ て レ デ ィ ・ ブ ル ト ン の 昼 食 会 の 場 面 へ と 繋 が っ て い く と い う 点 か ら も、時 間 が ブ ラ ッ ド シ ョ ー と レ デ ィ ・ ブ ル ト ン を 結 び 付 け る も の で あ り、ふ た り に も 共 通 す る 要 素 と し て 使 わ れ て い る こ と が 考 え ら れ る。

ま た、こ の ブ ラ ッ ド シ ョ ー か ら の 場 面 展 開 に は 大 き な 意 味 が 潜 ん で い る。そ れ は、ブ ラ ッ ド シ ョ ー の 信 仰 す る「均 衡 の 感 覚」と い う 言 葉 が、こ の 昼 食 会 で も 使 わ れ て い る か ら で あ る。

She was getting impatient, the whole of her being was setting positively, undeniably, domineeringly brushing aside all this unnecessary trifling (Peter Walsh and his affairs) upon that subject which engaged her attention, and not merely her attention, but that fibre which was the ramrod of her soul, that essential part of her without which Millicent Bruton would not have been Millicent Bruton; that project for emigrating young people of both sexes born of respectable parents and setting them up with a fair prospect of doing well in Canada. She exaggerated. *She had perhaps lost her sense of proportion.* Emigration was not to others the obvious remedy, the sublime conception. (92, 強調引用者)

レディ・ブルトンは良家の若者をカナダへ移住させる計画を立てており、その計画を公表するため『タイムズ』への投書を考えている。今回の昼食会の目的は、そういったことを得意とするヒューに彼女の移民案を文章にしてもらったことであつた。ここでは、移民案そのものがレディ・ブルトンの本質を成すものと化しており、その異様なほどの執着心の強さが描写されている。しかし、この計画が良策だとは誰も信じていない。それによって、彼女の狂気じみた雰囲気が表現されており、他人とのズレが浮き彫りになっている。なかでも「均衡の感覚」が欠落しているのだろうという一言によって、ブラッドショーのような精神科医に掛かれば狂気とされかねない危険性を孕んでいることが明らかになる。レディ・ブルトンはこの場面の他、クラリッサが開くパーティーで首相と対等に会話するという場面やピーター・ウォル

シュたちとインドについて話すといった場面でしか登場せず、この「均衡の感覚が欠落している」という表現も、単に彼女のアイデアが突拍子のないものであることを揶揄しているだけのようにも見える。しかし、ここであえて意図的にブラッドショーが用いる「均衡の感覚」という言葉が使われることで、読み手は必然的に彼の患者セプティマス进行を思い出すこととなる。作中では全く出会うことのないレディ・ブルトンとセプティマスのふたりが、この言葉によって結びつけられているのである。とはいえ、レディ・ブルトンはセプティマスとは異なり、狂人というレッテルを貼られることはない。

精神科に掛かり自殺するセプティマスと、そういった圧力を一切受けないレディ・ブルトン。このふたりの差は何か。「生と死、正気と狂気について書きたい」という作者の言葉通り、『ダロウェイ夫人』においてそれらは鮮明に描かれているものの、狂気的な一面を持ちつつ「異常者」のレッテルを免れるレディ・ブルトンによって正気／狂気の二項対立は崩壊していくとも読み取れる。それらを左右するのは既にサヴェッジ医師の矛盾として分析し明らかにしたように、医師による配慮の対象になるかどうか、つまり患者の社会的な立場や支配的な権力の有無である。それはまるで、権力があれば均衡の感覚が欠けていても問題ないとされ得る社会への批判であり、結局は狂気というものゝが医師の主観的な判断にすぎないという皮肉が効いた描写であるようにも思われる。しかし、この権力と狂気との関係こそ、レディ・ブルトンとウルフとが類似する部分にもなっているのである。

結論

狂気と正気の境は実に曖昧なものであり、サヴェッジ医師の矛盾に

もみられる通り、「科学」という名のもとに、そのいずれであるかについて主観的な判断が下されがちである。客観的な事実やデータに基づいて判断されるはずの医学において、その判断は医師の匙加減と配慮で左右されるのである。ウルフには「神経衰弱」や病弱といったイメージが付きまとう一方で、強かさや逞しい女性といった印象を受けることも多くある。フェミニストとして家父長制を批判し、権力に対抗したことを賛美される一面もあるが、社会的に守られた安全な立場にいたことは否定できない。これまでレディ・ブルトンは権威の象徴のひとつであり、作者ウルフが批判する対象として描いたというような解釈がされてきたが、ウルフと重なる部分があるようにも読み取れる。権力とは言えないまでも、確固たる社会的地位がウルフにはあったために「狂気」のレッテルを免れ、あくまでも「精神衰弱」患者として自宅療養や私設療養所での生活が許されたという点では、レディ・ブルトンにも通じる狂気と権力の関係が見出されるのではないか。

注

¹ 例えばハーマイオニー・リーはウルフの伝記の中で、“All her doctors recommended rest cures, milk and meat diets for weight gain, fresh air, avoidance of excitement and early nights. All prescribed sedatives like bromides” (183)と、医師は口をそろえて安静療法を指示したと述べる。どの医師もこれといった大差なく“All”とひとくくりにし、体重の増加を目的とした食事や新鮮な空気を奨励し、興奮を避けるよう勧め、鎮静剤を与えたのである。また、リンダル・ゴードンは「一九一五年にヴァージニア・ウルフの体重が平常より一九キロも増えたのは辛抱強く一匙ずつ食べたからではなく、むりやり食物を口に押し込まれたとまではゆかなくとも、サヴィジ医師がごく普通の治療法と言った、看護婦が四人がかりで強制したからである」

(100) と、安静療法の強制的な側面を指摘している。

- 2 ゴードンは複数の医師の名を列挙し、「ファergusン医師、ジョージ・サヴィジ卿、ヘンリー・ヘッド医師、T・B・ヒスロップ医師、モーリス・ライト医師、モーリス・グレイグ医師など、どうしようもないお節介やきのコンサルト連中は一流医師が開業するロンドン・ハーリー街の精神科医、ウィリアム・ブラッドショー卿という人物に集約されて描写されている」と指摘している (100-1)。
- 3 サヴェッジ医師に関してはジョナサン・アンドリュース (Jonathan Andrews) らによる *The History of Bethlem* やニコール・ワード・ジューブ (Nicole Ward Jouve) による “Virginia Woolf and psychoanalysis” を主に参照した。サヴェッジ医師についてはアンドルー・スカム “A Victorian Alienist: John Conolly, FRCP, DCL (1794-1866)” の中で触れており, “Sir George Savage (1842-1921) [. . .] was one of the most fashionable consultants on mental disease in late nineteenth-century London” (145-46) と 19 世紀末のロンドンで、彼が精神科医の名医のひとりであったと認めている。また、*Oxford Dictionary of National Biography* には 1 日で約 20 マイルの距離を診察に赴くといったサヴェッジ医師の様子などの記述 (68) もあり、灰色の車で妻と共に往診に向かうブラッドショーを彷彿とさせる部分もみられる。
- 4 ヴィクトリア・グレンディニング (Victoria Glendinning) は “He [Savage] had known Virginia since she was a child, and had looked after her since the breakdown following the death of her father”(131) というように、幼い頃から知っている人物ではあっても、患者としてウルフがサヴェッジ医師の診察を受けたのは父親の死がきっかけであると述べている。
- 5 目に見える原因がない病は、神経の疲労に問題があるのだろうと 1869 年にジョージ・ベアード (George M. Beard) は発表した。そして、エドワード・ショーターによると「第一次大戦までは、ベアードの神経衰弱は、一方では重篤なうつ病と、他方ではなお女性の場合に好んで用いられるヒステリーの間の、あらゆる機能性の神経疾患の標準的な診断になっていた。神経衰弱は、医者が必要とする濁し言葉になった」(164-65) とある。
- 6 「安静療法」という言葉はないが、サヴェッジ医師は『狂気と神経症に関する病』においても “I cannot close this subject without referring to the Weir-Mitchell treatment of the so-called neurasthenic cases which Dr. Playfair so fully introduced into England”(96) と、神経症の治療を開発し、それをイングランドに持ち込んだ各人物としてミッチェルやブレイフェアについての言及があることから、影響を受けていることは認められる。
- 7 ロリングは飲料用のミルクの歴史について “Up to the 19th century in German as well as Latin language there was no expression like ‘drinking milk’.

When the subject in literature in milk, one used the words: ‘eating milk’. That shows also that liquid milk was not a usual food” (5) と、ミルクを飲むという表現自体が 19 世紀までなく、ミルクは「食べる」ものであったことを指摘する。また、ピーター・アトキンス (Peter Atkins) は “In 1900 drinking-milk was more readily available and more widely consumed than ever before” (xviii) と、20 世紀に入ってから飲料用ミルクの消費拡大について述べている。

- ⁸ 帝国内の危機感についてはハインズの *Edwardian Turn of Mind* の第 2 章 ‘The Decline and Fall of Tory England’ を参照。
- ⁹ *Edwardian Turn of Mind*, p. 32 参照。精神病患者は道徳心が欠落しているとして、世間から排除されることが正当化された。また子孫の増加を阻止するために男女別に隔離された。
- ¹⁰ ロジャー・ブールは、レナードによるウルフの伝記 *Beginning Again* を引用しながら、“Leonard lost confidence in Sir George Savage when Savage insisted that having children would do Virginia ‘a world of good’.” (121) と述べ、サヴェッジ医師はウルフが子どもを持つことに対して、健康上も良い方向に作用するだろうと診断したとことを指摘する。また、この *Beginning Again* の引用部分からは、レナード自身が妻の希望より健康を優先していることがうかがえ、ブールの指摘からはレナードが自分と反対意見を述べるサヴェッジ医師を信用せず、ウルフの健康に悪影響だとする都合の良い意見に従ったことへの批判がみられる。
- ¹¹ 例えばリーはウルフの伝記の中で、“All her doctors recommended rest cures, milk and meat diets for wight gain, fresh air, avoidance of excitement and early nights. All prescribed sedatives like bromides.” (183) と、医師は口をそろえて安静療法を指示したと述べる。リーはどの医師もこれといった大差なく “All” とひとくくりにしており、彼らが体重の増加を目的とした食事や新鮮な空気を奨励し、興奮を避けるよう勧め、鎮静剤を与えたと批判する。また、本論文注 2 に挙げたゴードンの指摘においても、医師は全員ひとくくりにされ、批判の対象となっていることが明らかである (100-1)。
- ¹² 加藤めぐみも「医者が一定以上の階級に属する人々の狂気の法的な認定を避けたのは、狂気の診断が及ぼす彼らの社会的地位、信用への影響を恐れてのことだった。……自殺をたびたび図ったにもかかわらず、結局ヴァージニアの場合は、社会的な地位とレナードの特別な配慮、医者への働きかけのために、狂気の法的な認定を免れることができたのである」(19) と、ウルフの社会的地位の優位性について示唆している。彼女の階級や地位に対する医師の付度や配慮があったことで、ウルフは狂気のレッテルを免れたと指摘し、この狂気という病が医師の主観的判断によるものだとな

子教育や優生学の観点から論じている。

- ¹³ ドナルド・チャイルズ (Donald J. Childs) はウルフが否定している存在として, “Woolf is no more an admirer of Lady Bruton than she is an admirer of Bradshaw or Kilman” (41) というように, レディ・ブルトンの名前をブラッドショーやミス・キルマンと並列して挙げている。続いて, “Yet the object of Woolf’s disdain is not the eugenical project itself, but rather the ineffectualness of Lady Bruton’s enthusiasm—an enthusiasm fueled by the same egoism that drives Bradshaw and Kilman”(41)と, 効果を上げることのないレディ・ブルトンの自己中心的な熱意がブラッドショーやミス・キルマンにも共通しており, それがウルフの軽蔑の対象となっていると指摘している。また, ハロルド・ブルーム (Harold Bloom) も“Peter Walsh prepares the way for an assemblage of enemies that is to include Miss Kilman, Lady Bruton, Dr. Holmes, and Sir William Bradshaw” (92)と述べており, クラリッサの敵としてミス・キルマンや医師たちとともにレディ・ブルトンについても言及している。
- ¹⁴ *The Oxford English Dictionary* によると, “Colloquial designation of ‘Bradshaw’s Railway Guide’, a time-table of all railway trains running in Great Britain, the earliest form of which was first issued at Manchester in 1839 by George Bradshaw (1801-53), printer and engraver” (*OED*, 475) とある。

参考文献

- Atkins, Peter. *Liquid Materials: A History of Milk, Science and the Law*, Routledge, 2016.
- Andrews, Jonathan. Asa Briggs, Roy Porter, Penny Tucker, and Keir Waddington, *The History of Bethlem*, Routledge, 2013.
- Brotherson, R. P. *The Book of the Carnation*, Applewood Books, 1904.
- Bloom, Harold. *Clarissa Dalloway*, Chelsea House, 1990.
- Childs, Donald J. *Modernism and Eugenics: Woolf, Eliot, Yeats, and the Culture of Degeneration*, Cambridge UP, 2001.
- Froula, Christine. *Virginia Woolf and the Bloomsbury Avant-garde: War, Civilization,*

Modernity, Columbia UP, 2006.

Glover-Thomas, Nicola. *Reconstructing Mental Health Law and Policy*, Butterworths LexisNexis, 2002.

Glendinning, Victoria. *Leonard Woolf: A Biography*, Simon and Schuster, 2006.

Hynes, Samuel. *Edwardian Turn of Mind*, Pimlico, 1968.

Jouve, Nicole Ward. "Virginia Woolf and psychoanalysis." *Cambridge Companion to Virginia Woolf*, edited by Sue Roe, Cambridge UP, 2000. pp. 245-72.

Lee, Hermione. *Virginia Woolf*. Vintage, 2010.

Marcus, Jane. *Virginia Woolf and the Languages of Patriarchy*, Indiana UP, 1987.

Mansfield, Katherine. "A Ship Comes into the Harbour." *Virginia Woolf: Critical Assessments*, edited by Eleanor McNeess, vol. 3, Helm Information, 1994, pp. 108-10.

Ray. "Mens Sana." *Vanity Fair*, 1912. *National Portrait Gallery*,
<https://www.npg.org.uk/collections/search/use-this-image/?mkey=mw260094>

Mental Deficiency Act, 3 & 4 Geo. 5, ch. 28, 1913.

Pool, Roger. *Unknown Virginia Woolf*, Cambridge UP, 1995.

Rollinger, Maria. Summary of *History of Milk*, 2007.

Rychen, Betty I. "Mrs Dalloway's flowers: An attempt to define a symbol."
Dissertations, Theses, and Masters Projects, 1982.

Savage, George Henry. "The Increase of Insanity." Cassell & Company, 1907.

---. *Insanity and Allied Neuroses: a Practical and Clinical Manual*, Cassell & Company, 1907.

---. "On Insanity and Marriage." *The Journal of Mental Science* (57), 1911. pp. 97-

- Scull, Andrew. "A Victorian Alienist: John Conolly, FRCP, DCL (1794-1866)." *The Anatomy of Madness: Essays in the History of Psychiatry*, vol.1, edited by W. F. Bynum, Roy Porter, and Michael Shepherd, Routledge, 1985. pp. 103-50.
- Tian, Lei and George S. Bause. "From 'Use of Anaesthetics' to 'Mens Sana'." *Journal of Anaesthesia History*, vol. 2, Issue 2, 2016, pp. 65-66.
- Tuttle, Jennifer S. "Rewriting the West Cure: Charlotte Perkins Gilman, Owen Wister, and the Sexual Politics of Neurasthenia." *The Mixed Legacy of Charlotte Parkins Gilman*, edited by Catherine J. Golden and Joanna Schneider Zangrando, U of Delaware P, 2000, pp. 103-21.
- Woolf, Virginia. *A Writer's Diary*. Hogarth Press, 1915.
- . *Mrs Dalloway*, edited by David Bradshaw, Oxford, 2000.
- ウィットワース, マイケル『ヴァージニア・ウルフ』, 窪田憲子訳, 彩流社, 2011.
- 加藤 めぐみ「生まれながらの逸脱者 ヴァージニア・ウルフ：精神医学のダーウィニズムによる『狂気』の診断」, 『ヴァージニア・ウルフ研究』(9), 1992. Pp.14-34.
- ゴードン, リンダル『ヴァージニア・ウルフ—作家の一生—』, 平凡社, 1998.
- ショーター, エドワード『精神医学の歴史—隔離の時代から薬物治療の時代まで』, 木村定訳, 青土社, 1999.
- スカル, アンドルー『狂気 文明の中の系譜』, 三谷武司訳, 東洋書林, 2019.

ベル, クェンティン『ヴァージニア・ウルフ伝 1』, 黒沢茂訳, みすず書房,
1976.

イギリス小説における乳母の表象

市川亜矢子

Synopsis

Among fictions in the Victorian era and the early 20th century, there are the great number of novels which have nurses as important characters. Whereas nurses in Victorian novels are realistic characters, nurses in the early 20th century novels are more fantastic characters and they can even use magic. Even though they have the same occupation, their roles and images undergo significant changes with times. In Britain, nurses were originally divided into Dry nurse and Wet nurse. However, their name changed around the 1920s and they began to be called nanny. In this paper, focusing on before and after the 1920s, I would like to follow the changes of nurses' roles and analyze their portrayal in Victorian novels and 20th-century children's literature.

はじめに

イギリスの小説において、乳母が登場する作品は数多く存在する。大抵の場合、乳母は主人公である子供が唯一心をさげ出せる相手、子供たちの味方として描かれており、彼女たちと触れ合うことで子供は成長していくのだが、興味深いのは、時に母性を感じさせるような存在としても描かれている点である。イギリスでは元々、授乳をしない乳母を **Dry nurse**、授乳したりおしめをかえる乳母を **Wet nurse** と呼び分けており、**Nanny** という呼称が使われるようになったのは 1920 年頃だと言われている¹。母性溢れる乳母という描写は、もっぱら 1920 年以前の小説に多く、**Nanny** と呼ばれるようになった乳母たちには、

そういったイメージが定着していない。同じ乳母という職業なのだが、その描写やイメージは時代と共に変化しているのである。そこで、本稿では、ヴィクトリア朝時代に *Dry nurse*、*Wet nurse* と呼ばれた乳母たちと子供の関係性、彼女たちにどういった理想像が投影されたのか、乳母でありながら母親でもあった女性がどういった立場に置かれていたのか、また、*Nanny* と呼ばれるようになった乳母とそれ以前の乳母のイメージの違い、主人公としての *Nanny* の描かれ方を見ていく。

1. *Dry nurse*、*Wet nurse* から *Nanny* へ

最初に、乳母の呼び名の変化の理由を時代背景と共に考察し、1920年以前のイギリスにおける *Wet nurse* の必要性和、その後乳母の仕事から授乳の役割が無くなっていった理由を説明したい。

授乳のための選択肢として母乳哺育、人工哺育が挙げられる。一番自然なのは、母乳哺育である。実際、18世紀頃から生母による母乳育児がよいと推奨されており、医師たちは授乳をせず乳母を雇う上流階級や、上流中産階級の母親たちを厳しく非難していた²。しかし、中田元子（2019）によると、「上流階級においては、授乳は必ずしも母親としての欠くべからざる務めとはみなされていなかった」（23）という。なぜなら、彼女たちは社交界における「装飾品としての役割」が第一であったことや、夫たちが妻たちに淑女であることだけを求め、母親になることは求めなかったという「夫の関与」もあったからである（中田 23-24）。そのため、「容姿を美しく保つこと」や、「早く次の子どもを産むこと」を要求され、母乳哺育は選択肢から外されたのである（奥田・ちば 2019: 24）。

次に、人工哺育だが、これには難点が多かった。19世紀半ば、哺乳

瓶は最初期のものが作られたばかりであり、乳児用調製粉乳も実験段階であったからである（中田 33）。



図 1：1840 年製の哺乳瓶



図 2：1830~1860 年代の哺乳瓶

最初期の哺乳瓶は陶器で作られたものが多く、きちんと洗えているか、中に食べかすが残っているかを確認できなかったため、不衛生な哺乳瓶は結果的に乳児を殺す道具となってしまった³。



図 3：1865 年頃から使われた哺乳瓶

また、19 世紀末には陶器から「ガラス製哺乳瓶の開発」（中田 35）が盛んになり、図 3 のようなバンジョーのような形のゴムチューブのついた哺乳瓶が開発されたが、チューブを清潔に保つことは難しく、「Murder bottles」という名前が付くほど、乳児にとって危険なものであった⁴。また、動物の乳を母乳の代わりに与えることもあり、理想的とされたのは「ロバやヒツジ、ヤギの乳」だったという（奥田・ちば 25）が、問題はその乳が「新鮮」かつ「清潔」であるかであった（中田 37）。新鮮で清潔な乳を手に入れるのは、都市部にすむ人々には難しい選択肢だったため、あまり現実的でなかったと言える（中田 39）。

結果として、残った手段は *Wet nurse* を雇うことだった。また、使用人を雇うことが一種の「ステイタス・シンボルの一つ」（奥田・ちば 30）として流行していたこともあり、乳母雇用にもためらいがなかったと言える。

上記の理由から、乳母の需要は多かったと言え、イギリスには「フランスにあったような乳母登録制度」（中田 12）がなかったこともあり、基本的に誰でもなれる職業であった。また、ジョージ・ムーア（George Moore, 1852~1933）が 1894 年に発表した『エステル・ウォーターズ』（*Esther Waters*, 1894）の中にも出てくるように、乳母を斡旋するのは病院などであった。エステルのように未婚で子供を身ごもった女性は、すぐに働ける仕事として *Wet nurse* を選ぶことが多かった。さらに、イギリスには、住み込み乳母の需要が増加していたフランスで、1874 年に制定されたルセル法（*Loi Roussel*）のような法律がなかったことも問題であった。この法律は「乳母になるには乳母の子供が 7 か月以上になっているか、またはほかの女性による乳房からの授乳が保証されなければならない。乳母は市町村が発行する証明書を

携帯しなければならない」⁵などを規定したものであり、エスターのような、出産して間もない女性が乳母になれないようにした。乳母需要が高まり、乳母の子供の死亡率が増加したため、イギリスでも 1872 年に幼児生命保護法（Infant Life Protection Act）が成立したが、この法律は「報酬を目的として 24 時間を超えて 1 歳未満の乳児を預かる職業的里親は、地方当局への登録とその認定を必要とする」法律⁶であり、乳母になる女性を制限するものではなかった。

しかし、その乳母需要も 19 世紀半ばを過ぎてから「急速に減少していった」と中田（58）は述べる。表 1 は、『タイムズ』における、乳母求職・求人広告件数の 5 年ごとの推移を表す。挙げられた数字は、毎月の最初の週の広告件数をカウントしたものである。図 4 は、表 1 を折れ線グラフで表したものである。

年	乳母求職件数 (既婚/未婚/不明)	乳母求人件数 (既婚/未婚/不明)	乳母求職・求人件数 (既婚/未婚/不明)
1821	31 (5/0/26)	1 (0/0/1)	32 (5/0/27)
1826	28 (7/0/21)	1 (0/0/1)	29 (7/0/22)
1831	21 (8/0/13)	1 (0/0/1)	22 (8/0/14)
1836	30 (9/0/21)	1 (0/0/1)	31 (9/0/22)
1841	69 (17/0/52)	4 (0/0/4)	73 (17/0/56)
1846	66 (26/0/40)	4 (1/0/3)	70 (27/0/43)
1851	72 (31/3/38)	7 (3/0/4)	79 (34/3/42)
1856	231 (63/8/160)	3 (0/0/3)	234 (63/8/163)
1861	173 (55/15/103)	8 (0/0/8)	181 (55/15/111)
1866	76 (18/8/50)	9 (2/0/7)	85 (20/8/57)
1871	46 (7/2/37)	4 (0/2/2)	50 (7/4/39)
1876	22 (8/1/13)	1 (0/0/1)	23 (8/1/14)
1881	18 (8/1/9)	1 (0/0/1)	19 (8/1/10)
1886	10 (4/0/6)	2 (0/0/2)	12 (4/0/8)
1891	2 (0/0/2)	0	2 (0/0/2)
1896	0	0	0
総数	895 (266/38/591)	47 (6/2/39)	942 (272/40/630)

表 1：『タイムズ』における乳母求職・求人広告件数（中田作成）

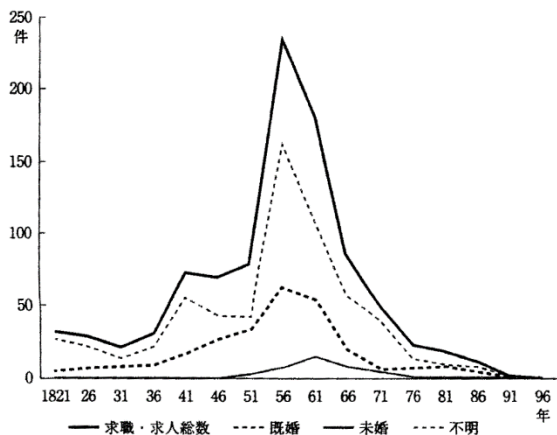


図4：『タイムズ』における乳母求職・求人広告件数の変化
(中田作成)

表1、図4を見ると、確かに1836年から増加傾向にある求職広告が1861年を境に減少していき、1896年には完全になくなっている。中田(58)はこの理由を、人工哺育の研究が進み、完全に信頼できるものではないとしても、人工哺育を採用してもいいと考える人々が増えたのではないかと述べている。岩田託子と川端有子(2011)も、ヴィクトリア朝後期から、衛生知識の広まりや、栄養状態が改善するに伴い、子どもの死亡率がどんどん低下していき、「少なく産みしっかり育てる」という傾向が強くなったという(73)。前述したように、Wet nurse を雇っていたのは、母親が母乳哺育をしたくない、あるいは夫に禁止されていたか、人工哺育が信用できないものであったからである。一方で、乳母を進んで雇用していたとはいえ、上流階級の親たちは、「乳によって授乳者の気質が伝わるという考え」(中田59)も信じていた。新井潤美(2011)によると、乳母の「ワーキング・クラ

スの発音を子供が覚えてしまう」ために、「乳母選びも慎重にしなければならない」と母親に促す本が出版された(216-217)。このように、乳母を雇っていた親たちは、下級階級の乳母が自分の子供に影響を及ぼすことや、自分の子供と乳母の子供が同じ乳母から授乳をされることにより、乳兄弟となることを毛嫌いした。そのため、代替策があればそちらに移行したいと考える人が多かったのではないだろうか。また、乳母の専門学校であるノーランド・カレッジが 1892 年に設立され、乳母が専門職となっていくことも重要である。誰でも簡単になれた乳母が、その道のプロフェッショナルが登場したことで、次第に資格の必要な職業になっていったこと、それに加えて、人工哺育の発達により、授乳のために人を雇う必要性が無くなったことで、完全に *Wet nurse* の需要は消えてしまった。そうすると、呼び分ける必要性もなくなるので、*Nanny* と呼ばれるようになっていたのである。ヴィクトリア朝小説の乳母のイメージと、*Nanny* と呼ばれるようになってからの 20 世紀小説の乳母のイメージが違うのも、こういった理由からだと考えられる。ヴィクトリア朝小説における乳母は、母親の代わりに子供たちが母性を感じる存在として描かれることが多かったが、*Nanny* と呼ばれる乳母たちには、そういったイメージはなく、ファンタジーのような存在として描かれている。これは、乳母が時代とともに、身近な存在ではなくなっていくからだと推測される。

2. ヴィクトリア朝小説における乳母

それではまず、ヴィクトリア朝小説の乳母の描き方を見ていく。ここでは、*Dry nurse* の例としてチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812~1870) の『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*,

1850) より、主人公デイヴィッドの乳母のペゴティーを、Wet nurse の例としてジョージ・ムーア (George Moore, 1852~1933) の『エスター・ウォーターズ』(*Esther Waters*, 1894) より、主人公エスターを扱う。また、厳しい乳母の例として、キャサリン・シンクレア (Catherine Sinclair, 1800~1864) の『ホリデイ・ハウス』(*Holiday House*, 1839) より、主人公のローラとハリーの乳母、クラブトリー夫人を扱う。

では、ペゴティーから言及していきたい。ペゴティーは、「頬っぺから腕までそれはカッチンコで真っ紅」(13) ⁷で「めっぼう肉付きが好かった」(17) 女性である。彼女の体系の描写から西村美保 (2018) は、「田舎者の女性労働者のたくましさと土臭さが伝わってくる」(21) と述べるが、それは「農民の母親を健康な母親のモデルとして提示することがあった」(中田 201) からである。乳母を雇っていた母親たちは、母としての役割を完全に乳母に任せていることが多かった。そのため、子供が母性を感じる対象は常にそばにいる乳母であり、子供を育てる健康な母親像の理想とされた労働者階級の女性を連想させるようなペゴティーは、まさにディケンズが描いた「乳母の理想像」(西村 53) である。しかし、ここでペゴティーが Dry nurse だということを述べておきたい。なぜ、彼女が Dry nurse であると断定できるかというと、まずペゴティーは、デイヴィッドの幼少期には独身であるため、授乳することはできない乳母である。また、当時の上流階級の母親たちは、基本的に自分で授乳をしていなかったが、デイヴィッドの母親は自分で授乳をしていたと考えられる。これは、彼女が未亡人のため、夫の関与がなかったからである。



Changes at Home

図5 “Changes at Home”: *David Copperfield*, Chapter 8 より

実際、再婚後にできたデイヴィッドの弟にも、母親自ら授乳している場面があり、デイヴィッドは母親が歌を口ずさみ弟に授乳をしているのを見て、赤ん坊の時に母親の腕の中で「そんな具合に歌ってもらっていたに違いない」と語り、聞き覚えはないその調べに対して「思わず涙がこみ上げそうになった」(109)ほど懐かしく感じている。授乳に関して、デイヴィッドの母親は当時の上流階級の母親たちとは相違しているのである。これらのことから、あくまでペゴティーは *Dry nurse* であり、デイヴィッドは乳母だけでなく、母親からも母性を感じていたと仮定できる。それが変わったのは、母親が再婚してからであろう。継父のマードストーン氏の登場によって、母親は「妻」として夫に従順でいなければならないため、完全に彼の言いなりになり、デ

イヴィッドと以前のように触れ合うのをやめ、母親は遠い存在となってしまう。そのため、再婚後、デイヴィッドにとって母性を与えてくれるのは乳母のペゴティーだけになる。実際に、彼がペゴティーから母性を感じている描写を紹介したい。

From that night there grew up in my breast a feeling for Peggotty which I cannot very well define. She did not replace my mother; no one could do that; but she came into a vacancy in my heart, which closed upon her, and I felt towards her something I have never felt for any other human being. (*David Copperfield*, p.61)

これは、マードストーン氏によって5日間監禁されていたデイヴィッドが、久しぶりにペゴティーと会話する場面なのだが、自分はデイヴィッドの味方であることや、彼に対する愛情を示したペゴティーに対して、デイヴィッドはある感情を抱いている。この時芽生えたのは「名伏し難い感情」とされているのだが、これは母性に対する反応なのではないかと考える。なぜなら、デイヴィッドがわざわざ「母の後釜に座ったわけではない」と言及しているからである。「爾来感じたためしのない」この感情は、以前のように触れ合うことはなくなった母親にはもう感じることはないものであり、この時を境にデイヴィッドにとってペゴティーがとても大きな存在となり、よりいっそう母性を感じる相手になったと考えられる。「母性」というものは、ヴィクトリア朝においては必ずしも母親から感じるものではなかった。新井は、「イギリスにおいては、母性本能は動物的本能のひとつ」であるとみなされ、「教育を受けていないロウワー・クラスの女性」たちほどた

めらいなく「母性本能を発揮することができる」という考えがあったと述べる (211)。ペゴティーの場合、授乳をしてはいないが、母性を感じる対象として描かれており、彼女のふくよかな体型もまた、より母性溢れる女性をイメージしやすい要因になっている。

次に、Wet nurse に触れていく。乳母はもともと教育を受けていない労働者階級の女性たちになることが多かったが、Wet nurse は Dry nurse よりもさらに階級が低かった。それは、「労働」が「手ではなく乳房によって行われる」ため、「女の身体を売り物にして収入を得る」という点で娼婦と同じ立場に立つと考えられたからである (中田 12-14)。このことから、授乳という子供の成長には必要不可欠な行為が、卑しいものとみなされていたという矛盾が読み取れ、子供目線で見ると、授乳は自身が栄養を得るための行為であるのに対し、大人目線になると、授乳には性的な見方が加わり、卑しい行為だとみなされ、その捉え方の違いがそのまま乳母の立場にも影響しているのだ。そんな不道德なイメージを帯びた Wet nurse を雇う時、親たちが気にしたのは未婚の乳母なのか、既婚の乳母なのかという点であり、より多くの偏見と被害を受けたのは未婚の乳母である。未婚の乳母は、夫がいない状態で身ごもっているために、既婚の乳母よりもふしだらなイメージが加えられる。罪を犯したとして彼女たちは煙たがられ、自身の子供を養うために仕事に就こうとするも、未婚であるという理由ゆえに断られるのである。Dry nurse であれば、ペゴティーがそうであったように、未婚という条件が邪魔になることはなかっただろうが、授乳をする Wet nurse になると状況は一変し、彼女たちをより困窮させるものになるのである。一方で、未婚の母親を乳母として雇うことは「人

助け」(中田 85)とも考えられていた。雇用する側の階級の親たちは、未婚のまま出産をするという罪を犯した女性が「堕ちた女性」にならないように、「救済」という名目で乳母として雇うのである。ここには、階級による差別が存在するが、娼婦にならないために女性たちはその「救済」を望んでいた。『エスター・ウォーターズ』のエスターも、そんな女性たちの一人である。

未婚で身寄りのないエスターは、出産したばかりにも関わらず、賃金を得るため病院に乳母職を斡旋してもらう。彼女は雇い主のリヴァーズ夫人に住み込みで働くように言われ、三週間おきに自分の子供を夫人の家に連れてきてもらうという約束をする。リヴァーズ夫人が住み込み乳母としてエスターを雇うのは、前述したように、自分の子供と乳母の子供が乳兄弟になるのを防ぐためであり、彼女にとってエスターの子供は重要ではないことがわかる。実際、エスターが生後一か月ほどで離れた自分の子供を心配しても、また、エスターの子供を預かるスパイヤズ夫人が、子供の具合が悪いからと訪ねてきた時でさえ、リヴァーズ夫人はエスターが子供に会いに行くことを許さない。リヴァーズ夫人にとって、エスターの子供は「足手まといになるだけ」(157)⁸なのである。また、エスターが子供を預けた「ベビー・ファーム」と呼ばれる個人の託児所も問題であった。エスターが、スパイヤズ夫人に子供を預けていたように、未婚の母親はそういった場所に子供を預けなければ仕事ができなかったのだが、中田によると、彼女たちはお金と引き換えに乳母の子供を殺すこともあり、ベビー・ファームは「まともな世話をせず、子供が衰弱死したり事故死したりするに任せる」場所であった(149)。

By what right, by what law, was she separated from her child?... yesterday the housemaid told her that that little thing in the cradle had had two wet-nurses before Esther, and that both their babies had died. It was then a life for a life. It was more. For the children of two poor girls had been sacrificed so that this rich woman's child might be saved. Even that was not enough, the life of her beautiful boy was called for.

(*Esther Waters*, p.152)

エスターは、Wet nurse として雇われたことで、自分の子供の命が、リヴァーズ夫人の子供の命と引き換えになっていることや、「裕福な方々がお金を払って、スパイヤズさんのような人たちがかわいそうな子供たちの始末をする」(157) という図式が出来上がっていることに気づく。エスターは、この後リヴァーズ夫人の元から去り、子供を取り返しにスパイヤズ夫人の家に向かう。ここでも、スパイヤズ夫人に 5 ポンドで「子供を始末する」(164) という取引を持ちかけられるが、エスターはこれに応じることはなく、自分の子供を立派な大人に育て上げるべく奮闘する。

『エスター・ウォーターズ』からわかるように、乳母職に就いた女性たちの中には、必ずしも子供が好きで選んだわけではなく、他にできる仕事がないため選んだ女性たちもいたのである。そして、未婚の女性たちにとって乳母職は、完全なる「救済」と呼べるものでは到底なかった。

最後に、子供に優しい乳母ではなく、厳しい乳母の例として、『ホリデイ・ハウス』のクラブトリー夫人に注目する。彼女は、ペゴティのような乳母ではなく、嬖と称して子供に折檻をする乳母である。

ローラとハリーは手の付けられないほどのいたずら好きな子供たちで、事あるごとに問題ごとを起こし、その都度、クラブトリー夫人に叱られ叩かれているのだが、興味深いのは、このことを彼らの家族が容認していることである。

“Not if you leave that old vixen, Mrs. Crabtree, as governor of the nursery,” answered Major Graham, laughing. “She ought to have been the drummer of a regiment, she is so fond of beating! I believe there never was such a tyrant since the time when nursery-maids were invented.” (*Holiday House*, p.11) ⁹

これは、自分の子供たちがおじと祖母に甘やかされて育つことが一番怖いと言ったエドワード卿に対し、弟のグラハム少佐が、クラブトリー夫人に任せておけば大丈夫だ、という場面である。「彼女は叩くのがとても好きだ」、「あんな暴君はいないよ」と言っていることから、彼女が体罰をすることは承知の上で雇っていることがわかる。また、父親もこれに対し、甘やかされている子供たちには、あの厳しさがちょうどいいものだから、彼女のやり方に口出ししないようお願いしている。新井は、この描写からイギリスの上流、上流中産階級における「子育てに対するひとつの考え方」がはっきり表れていると述べる（227）。立派な大人になるには、厳しく躾けられ、子供の頃から苦労を経験する方がいいと考えていた親たちは、クラブトリー夫人のような厳しい乳母を抵抗なく受け入れていたのである。現在の感覚から言えば、理解しがたいものかもしれないが、ヴィクトリア朝の人々にとって、折檻する乳母はさほど珍しいものではなかったのである。ジャ

ッキー・ホーン (Jackie Horne, 2001) は、この物語のユーモア要素が、乳母によって行われる体罰にあると語る (23)。実際、周りの人々は二人が罰を受けていても、笑い飛ばしているのである。また、ホーンは、この物語は大人たちがいたずらっ子を欲しがるゲームのようなものだとも述べる (25)。つまり、登場人物はみんなゲーム内の役割を果たしているだけであり、乳母が厳しく折檻するのも、おじや祖母が笑って子供たちのいたずらを許すのも、それが彼らの役割だからである。実際に、乳母が体罰をしているシーンが出てこないのも、そういった理由からではないだろうか。この物語は、赤の他人の方が子供たちに厳しく接し、躾けることができる、という考え方が顕著に表れているものではあるが、あくまで物語としての要素が強く、ホーンの言葉を借りれば、クラブトリー夫人は児童虐待者ではなく、「ゲームにおけるコミカルな悪役」なのである (25)。乳母は、親たちの代わりに子供と常に過ごし、母性を感じさせる対象となる一方、親の代わりに子供を叱りつけ、悪者を買って出る役割も担っていたのである。

加えて、序文より、作者のシンクレアがこの物語を描いた意図にも触れておきたい。

The minds of young people are now manufactured like webs of linen, all alike, and nothing left to nature.... they are carefully prompted what to say, and what to think, and what to look, and how to feel... In these pages the author has endeavoured to paint that species of noisy, frolicsome, mischievous children which is now almost extinct, wishing to preserve a sort of fabulous remembrance of days long past, when young people were like wild horses on the prairies, rather than like well

broken hacks on the road; and when amidst many faults and many eccentricities, there was still some individuality of character and feeling allowed to remain. (*Holiday House*, Preface p.3-5)

シンクレアは、今の子供たちがみんな機械で織られた布のように同じで、何をするにも注意深く大人によって指示されていることを嘆き、ほとんどいなくなってしまう騒がしく、陽気で、いたずら好きの子供たちをこの本で描こうとしたことを述べている。彼女が作中にクラブトリー夫人のような乳母を登場させたのも、子供を折檻して、矯正する躰け方を皮肉るためであり、子供たちを楽しませながら、自分の意図をしっかりと伝えているのである。

ヴィクトリア朝小説の乳母は、実に多種多様である。生活のために乳母職を選ぶ乳母もいれば、子供の味方であり続け、優しく寄り添う乳母も存在する。また、反対に厳しく叱りつけ、時には体罰を与える乳母もいるのである。しかし、乳母たちはいずれも小説の中心人物ではない。そして、エスターも乳母として働くのは小説の序盤のごく一部である。それでは、20 世紀に時代が変わり、呼び名も変わった乳母たちは、どのように描かれ、どのように子供たちと接するのだろうか。

3. 20 世紀児童文学と乳母

最初に説明したように、1920 年頃から乳母は呼び名が変わり、Nanny と呼ばれるようになった。そして、Nanny のイメージは、以前の Dry nurse や Wet nurse とは大きく違うものとなる。それに伴い、小説の乳母にはファンタジー要素が加わり、人間離れした乳母や、物語の主人公となる乳母が出てくる。こういった Nanny の例として、P・

L・トラバース (P. L. Travers, 1899~1996) の『メアリー・ポピンズ』 (*Mary Poppins*, 1934)、J・M・バリー (J. M. Barrie, 1860~1937) の『ピーター・パンとウェンディ』 (*Peter and Wendy*, 1911)、クリスチアナ・ブランド (Christianna Brand, 1907~1988) の『マチルダばあやといたずらきょうだい』 (*Nurse Matilda*, 1964) を取り上げたい。

まず、『メアリー・ポピンズ』の主人公メアリーに触れていく。東風に乗ってバンクス家にやってくるメアリー・ポピンズは、今までの乳母のイメージとは打って変わった人物像である。彼女の喋り方に一切訛りはなく、服装や持ち物から彼女の階級が低くないことがわかる。また、メアリーは「木のオランダ人形」(6)¹⁰のようだとジェインに描写されるように、典型的な労働者階級の女性たちとは正反対のスラっとした体型である。そして「風が変わるまではいましょう。」(14)と、自ら一緒に過ごす期間にリミットを設ける乳母の姿は確実に新しいものである。また、作中にはメアリーの休日も描かれている。これまでの小説では、乳母が子供たちから離れている間のことを描いているものはあまりなかった。これは、乳母が主人公になったからこそ、描かれた場面である。

“EVERY THIRD THURSDAY,” said Mrs. Banks. “Two till five.” Mary Poppins eyed her sternly. “The best people, ma'am,” she said, “give every second Thursday, and one till six. And those I shall take or” Mary Poppins paused, and Mrs. Banks knew what the pause meant. It meant that if she didn't get what she wanted Mary Poppins would not stay. “Very well, very well,” said Mrs. Banks hurriedly, though she wished Mary Poppins did not know so very much more about the best people

than she did herself. (*Mary Poppins*, p.16)

これは、三週間に一度の休日をバンクス夫人から言い渡されたメアリーが、「上流階級の方々なら、一週間おきの木曜日に、1時から6時まで休みをくれる」と文句を言う場面で、承諾してくれなければ、バンクス家を去るとまでほめかしている。このように、乳母が雇い主に注文をつける描写は、ヴィクトリア朝小説にはあまり出てこない。こういった場面も、メアリーの階級が労働者階級ではないことを示すものであり、労働弱者としての乳母ではないため、雇い主との間にあらゆる力の上下関係が生まれないのである。また、メアリーはファンタジー要素の強い乳母だということにも触れておきたい。絵の中に入り込んで休日を過ごしたり、犬の言葉がわかったり、磁石で世界旅行をしたり、常にメアリーの周りに魔法があふれており、現実の乳母というよりは、人間離れした乳母なのである。人間離れしている乳母と言えば、Nanny ではないのだが、『ピーターパンとウェンディ』に出てくるウェンディ、ジョン、マイケルの乳母である犬のナナも例に挙げることができる。もともとケンジントン公園にいたナナは、いつも乳母車の中を覗き込んで、他の乳母たちに煙たがられていた。その犬を、乳母を雇う余裕はないが近所の人と同じように「ステイタス・シンボル」として乳母を雇いたいダーリング夫妻が、乳母として連れて帰ったのである。犬ではあるが、ナナは「素晴らしい乳母」(7)¹¹だと称されている。

She proved to be quite a treasure of a nurse. How thorough she was at bath-time, and up at any moment of the night if one of her charges made

the slightest cry. Of course her kennel was in the nursery....It was a lesson in propriety to see her escorting the children to school, walking sedately by their side when they were well behaved, and butting them back into line if they strayed. (*Peter Pan*, p.7)

子供たちにとって、乳母は「つねにそばにいてくれる存在」であったが(新井 205)、ナナもウェンディたちのそばを離れず、いつも彼らのお世話をしている。犬が人間の面倒を見ているという関係性があるため、メアリー・ポピンズ同様、雇い主と乳母の間に上下関係は存在していない。それどころか、ウェンディたちの父親であるダーリング氏は、自分がナナに「尊敬されていないんじゃないか」(8)と感じるほどであった。

このように、20 世紀の児童文学の Nanny が人間離れした存在となり、雇用主との関係がより対等なものへと変わっていったのは、最初に述べたように人工哺育の普及と発達による乳母需要の減少、乳母が Nanny と呼ばれるようになり、次第に資格を持った専門職になっていったことが影響していると考えられる。

次に、メアリーやナナと同じく人間離れしてはいるが、子供たちに厳しい乳母の例として、『マチルダばあや』のマチルダを見ていく。ブラウン家は多産で、いたずらっ子の子供が何人もいる家である。子供たちは、いつもとんでもないいたずらで乳母や家庭教師を追い出してしまい、ブラウン夫妻は紹介所や周囲の人々に「マチルダばあやにたのむほかない」(13)¹²と言われる。すると、ある日ブラウン家に本当にマチルダばあやがやって来て、子供たちに「おけいこを7つしていただきますよ」(23)と言うのである。マチルダばあやの登場は、

メアリー・ポピンズ同様、紹介所も通さず突然乳母の方から家にやって来るといふものであり、マチルダがメアリーのような不思議な人物であることが読み取れる。また、マチルダも自分の乳母雇用期間にリミットを設けている。彼女は、子供たちが嫌がっても、自分が必要な間は居るが、その必要性が無くなったのに子供たちが「いてほしい」と思った時には「おいとましなければ」ならないと告げる (22)。加えて、彼女の容姿にも注目したい。マチルダは「くすんだ黒い服を着た、せいの低い、がっしりした女の人」(19)と描写されており、「こんなに器量の悪い人には、めったにお目にかかれない」(20)とまで書かれている。というのも、マチルダの顔はしわくちやで、ジャガイモのような鼻に、前歯が一本だけ飛び出しているからである。そして、興味深いのは、子供たちがひとつひとつお稽古を終え、いい子になる度に、周囲の人々が彼女の顔はあんなにきれいだったかと考えていることである。

Nurse Matilda... smiled and she smiled—but yet, at the same time, two big tears gathered in her eyes and rolled down her cheeks. And as they rolled—they seemed to roll away the very last of Nurse Matilda's wrinkles. And her face wasn't round and brown any more, and her nose, like two potatoes, was changing its shape altogether: and even her rusty black clothes seemed to be getting all goldeny. And when Mrs Black whispered to Mrs Brown, "But she's so ugly!" Mrs Brown whispered back in astonishment, "How can you say so? She's perfectly lovely!"

(*Nurse Matilda: The Collected Tales*, p.130-131)

これは、物語の終盤で、ブラウン夫人の友達であるブラック夫人が、自分の家の子がいたずらっ子だと話している場面である。ブラウン夫人は「それじゃマチルダばあやにたのまなきや」と言うのだが、ブラック夫人はそのマチルダばあやを見て、器量の悪い人だと口にする。しかし、ブラウン夫人は「あんなにきれいじゃありませんか!」と返すのである。子供たちに問題のある親、もしくはマチルダばあやを知らない人には、彼女はとても不器量な人に見えるのだが、一方彼女が子供たちをいい子にしてくれた素晴らしい乳母だと知っている人には、彼女は器量のいい乳母に見えるのである。こういった容姿の変化や、彼女が持っているステッキを叩けば、子供たちのいたずらが止まらなくなることから、彼女もまた人間離れした乳母なのである。

4. 結論

本論では、乳母の呼び名が変わった 1920 年代を起点として、ヴィクトリア朝小説の乳母と 20 世紀児童文学の乳母を比較してきたが、時代の変化とともに、乳母の姿やイメージが変わっていったのは明らかである。例えば、優しい乳母の例として挙げた『デイヴィッド・コパフィールド』のペゴティーと、『メアリー・ポピンズ』のメアリーは、階級も違えば容姿も違う。また、『エスター・ウォーターズ』のエスターは、メアリー同様主人公としての立ち位置ではあるが、彼女の抱えている *Wet nurse* であるが故の問題やイメージは、メアリーには一切当てはまらない。ペゴティーとエスターに比べ、メアリーは洗練されており、自己主張をはっきりとする自立した乳母のように見える。また、厳しい乳母の例として挙げた『ホリデイ・ハウス』のクラブトリー夫人と『マチルダばあや』のマチルダも、似ているようで似

ていない。クラブトリー夫人は、子供たちを鞭などで叩き躰けていたが、マチルダは、子供たちがやったいたずらを止められないようにすることで、自らお願いをさせいい子になるように躰けているだけであり、体罰などはしない乳母である。イギリスの子育てに必要な不可欠だった乳母は、技術の進歩や教育の仕方が変わったことにより、徐々に身近な存在ではなくなっていった。ヴィクトリア朝小説の乳母が担っていた、母性を感じさせる役割も必要なくなり、現実的な乳母像ではなく、非現実的で不思議な乳母像が出現し始めたのである。乳母が出てくる作品のジャンルが変化したのも、そういったイメージの変化に伴うものだと考えられ、リアリズム小説から児童文学へと、その登場の場を変えていったのではないだろうか。児童文学の主人公に躍り出た乳母たちは、ふらっとやって来て、子供たちに楽しい思い出を残し、気が付くとふらっといなくなっている、そんな乳母であり、子供の時にしか会えない彼女たちは、言うなれば、ドラえもんのような存在になるのである。

注

¹ 新井潤美『執事とメイドの裏表—イギリス文化における使用人のイメージ』白水社、2011年、210頁。

² 岩田託子・川端有子『図説 英国レディの世界』河出書房新社、2011年、77頁。

³ V&A・The World's Leading Museum Of Art And Design、“Sucking Bottle”(<https://collections.vam.ac.uk/item/O92255/sucking-bottle-davenport--co/>)
(2021年6月16日アクセス)

⁴ BB-M.co.uk、“Murder Bottles”(<https://www.babybottle-museum.co.uk/murder-bottles/>)
(2021年6月16日アクセス)

- ⁵ 松田祐子「パリにおける『住み込み乳母』(1865-1914)」『国立女性教育会館研究紀要』(8)、2004年、51-60頁。
- ⁶ 中村勝美「イギリスにおける保育制度の過去と現在—歴史的多様性をふまえた総合的保育サービスの構築—」『西九州大学・佐賀短期大学紀要』(37)、2006年、103-120頁。
- ⁷ 『デイヴィッド・コパフィールド』からの引用およびページ数は全て Charles Dickens, *David Copperfield*. Edited by Michael Slater, Random House, 1991 に基づく。
- ⁸ 『エスター・ウォーターズ』からの引用およびページ数は全て George Moore, *Esther Waters*. Rinsen Book, 1983 に基づく。
- ⁹ 『ホリデイ・ハウス』からの引用およびページ数は全て Catherine Sinclair, *Holiday House*. Robert Cater, 1839 に基づく。
- ¹⁰ 『メアリー・ポピンズ』からの引用およびページ数は全て Pamela Travers, *Mary Poppins*. Harcourt, 1997. に基づく。
- ¹¹ 『ピーターとウェンディ』からの引用およびページ数は全て James Barrie, *Peter and Wendy*, 1911. Edited by Jack Zipes, Penguin Books, 2004 に基づく。
- ¹²¹²¹² 『マチルダばあやといたずらきょうだい』からの引用およびページ数は全て Christianna Brand, *Nurse Matilda: The Collected Tales*. Bloomsbury, 2005 に基づく。

参考文献

〈一次資料〉

- Barrie, James. *Peter and Wendy*, 1911. Edited by Jack Zipes, Penguin Books, 2004.
『ピーター・パン：ヴィジュアル注釈版』上・下巻、川端有子監修、マリア・タタール編、伊藤はるみ訳、原書房、2020年。
- Brand, Christianna. *Nurse Matilda: The Collected Tales*. Bloomsbury, 2005. 『マチルダばあやといたずらきょうだい』こだまともこ訳、あすなろ書房、2007年。
- Dickens, Charles. *David Copperfield*. Edited by Michael Slater, Random House, 1991. 『デイヴィッド・コパフィールド』上巻、田辺洋子訳、あぼろん社、2006年。
- Moore, George. *Esther Waters*. Rinsen Book, 1983. 『エスター・ウォーターズ』北条文緒訳、国書刊行会、1988年。
- Sinclair, Catherine. *Holiday House*. Robert Cater, 1839.
- Travers, Pamela. *Mary Poppins*. Harcourt, 1997. 『風にのってきたメアリー・ポピンズ』林容吉訳、岩波書店、1993年。

〈二次資料〉

新井潤美『執事とメイドの裏表—イギリス文化における使用人のイメージ』白水社、2011年。

岩田託子・川端有子『図説 英国レディの世界』河出書房新社、2011年。

奥田実紀・ちばかおり『図説 ヴィクトリア朝の子どもたち』河出書房新社、2019年。

川本静子「世紀末の〈新しい女〉たち（20）ニュー・リアリズムと〈新しい女〉像—エスター・ウォーターズ」『英語青年』142巻、第8号、1996年、426-428頁。

中田元子『乳母の文化史—十九世紀イギリス社会に関する一考察—』人文書院、2019年。

中村勝美「イギリスにおける保育制度の過去と現在—歴史的多様性をふまえた総合的保育サービスの構築—」『西九州大学・佐賀短期大学要』(37)、2006年、103-120頁。

西村美保『ヴィクトリア朝小説における女性使用人の表象—階下から読む8つの物語』彩流社、2018年。

北条文緒「あとがき」『エスター・ウォーターズ』ジョージ・ムーア作、北条文緒訳、国書刊行会、1988年。

松田祐子「パリにおける『住み込み乳母』（1865-1914）」『国立女性教育会館研究紀要』第8巻（2004）、51-60頁。

Horne, Jackie. "Punishment as Performance in Catherine Sinclair's *Holiday House*". *Children's Literature Association Quarterly*, vol.26, no.1, 2001, pp. 22-32.

図

図1：“Sucking Bottle”

(<https://collections.vam.ac.uk/item/O92255/sucking-bottle-davenport-co/>) (2021年6月16日アクセス)

図2：“Victorian feeding bottle”

(<https://www.hideandseekexhibition.org.uk/objects/85>) (2021年6月16日アクセス)

図3：“Murder Bottles”

(<https://www.babybottle-museum.co.uk/murder-bottles/>) (2021年6月16日アクセス)

図4：中田元子『乳母の文化史—十九世紀イギリス社会に関する一考察—』人文書院、2019年、55頁。

図5：“Changes at Home”

(<http://www.victorianweb.org/art/illustration/phiz/dc/8.html>)
(2021 年 6 月 26 日アクセス)

表

表 1 : 中田元子『乳母の文化史—十九世紀イギリス社会に関する一考察—』
人文書院、2019 年、55 頁。

An experimental study of the role of quantificational information in resolving ambiguity in co-ordination

Izumoto Kenta

Synopsis

There has been substantial research with regard to reduced relative clause and subordinate clauses (Late closure; Frazier, 1979), but to our knowledge, comparatively little research has been concerned with with ambiguities involving co-ordinate structures (Frazier, 1987; Hoeks *et al.*, 2002, 2006; Engelhardt & Ferreira, 2010; Staub & Clifton. Jr, 2006). In this paper, we argue that a combination of *some...others* will reduce or eliminate syntactic ambiguity in coordinated structures. To examine this hypothesis, in experiment 1, we conducted an experiment to see whether there is an effect on Determiner type (*Some* vs. *The*) and Sentence type (NP-biased vs. S-biased) with self-paced reading. Yet, there is a problem in Experiment 1. To resolve this issue, we conducted Experiment 2, using the same technique. The results revealed an interaction between determiner type (*Some* vs. *The*) and Conjunction type (*And* vs. *While*). In other words, if a combination of *some...others* is present, there was less difficulty in processing, in comparison with a combination of *the...others*. This paper considers the implications of these various results.

Introduction

Ambiguity is everywhere in language processing. In the area of sentence processing, there has been a substantial amount of research, especially in respect of structural ambiguities: see, for overview and discussion, Altman (1989), McRae & Matsuki (2013), Ferreira & Qiu (2021), amongst others. Traditionally, since the introduction of phrase-structure grammar (Chomsky, 1957, 1965), most psycholinguists have assumed that processing is based on the output of phrase-structure grammars. The Garden Path model proposed by Frazier (1978) is based on this type of grammar, and attempts to account for syntactic ambiguity by selecting among grammatical outputs according to a set of preference rules (see below). The GP model is contrasted with an alternative model MacDonald *et al.* (1994), the so-called Constraint-based model, or constraint satisfaction theory, in which purely grammatical information is only one source of information for resolving syntactic ambiguity.

Frazier proposed a two-stage model, by which syntactic information is used before other sources of disambiguation become available, whereas in the interactive model, all potential sources of information are available from the outset. These two models predict different kinds of '*Garden path*' effect in indeterminate contexts. There was no consideration of gradience in processing sentences. However, in Van Gompel *et al.* (2000), they proposed the so-called *Unrestricted race model* (URM). This model, just as the garden-path model, assumes the two-stage level, but unlike the GP model, Van Gompel *et al.*'s model assumes gradience in processing: that is to say, depending on the probability of taking one reading, not the other, the

difficulty might be varied. However, unlike the Constraint-based model, URM assumes a two-stage process, meaning that if the first analysis is not correct, then reanalysis is necessary.

Both the GP model and URM assume that processing is serial, but some studies suggest that human sentence processor can entertain two or more parses in parallel (See Clifton. Jr & Staub, 2008 for a review). The theories introduced so far all assume that the syntactic processing is always carried to completion, even where the final interpretation is clear from a partial parse. The work of Ferreira *et al.* (2002) challenges those theories: instead, it is argued that language comprehension involves "*good enough*" processing, in which grammatical information is only processed as much as necessary to arrive at a clear interpretation of the utterance in a particular context; see Ferreira & Patson (2007) for a review.

This paper presents new evidence concerning the resolution of syntactic ambiguity in co-ordinate structures, using the sequence *some...others*. The experiments investigate the hypothesis that where this pair is present in a string, a dependency is created that reduces any potential GP effect.

The structure of this paper is as follows. First, we review some of the previous work concerning the resolution of syntactic ambiguity in coordinated structures, both in conjunction and disjunction structures. Following this, we introduce our hypothesis (Section 2). Next, we present our two self-paced reading experiments, detailing the method, results and discussion (Section 3 & 4). The final section offers a conclusion and indicates possible directions for future research.

2 Two-Stage Model Accounts of Co-ordinate Structure Processing

One of the traditional models of syntactic processing, the classic model, is the Garden Path model proposed by Frazier (1979, 1987). This model supposes that sentence processing is carried out in serial, autonomous mode – only one parse is constructed at a time, and parsing initially only has access to purely syntactic information – and that the parser prefers the most economical analysis. Here, economical means that the fewest nodes in phrasal structures are postulated to yield a grammatical analysis of the incoming string at any point in the parse (Frazier & Fodor, 1978). This model involves two distinct stages of processing. In the initial stage, only syntactic information is used to parse the sentence, and other information that might resolve structural ambiguity is ignored. However, this does not mean that other sources of information, such as semantic and discourse information, are not consulted in order to resolve the ambiguity. Once these become available, in the second stage, re-analysis may take place.

GP effects are observed when there is a conflict between the most economical parse created in the first stage, and new incoming information. For example, in the classic GP string *the horse raced past the barn fell*, economy considerations initially require the string *...raced past the barn...* to be analyzed as an intransitive main clause, rather than as a restricted relative clause; upon encountering the word *fell*, the initial parse has to be abandoned, and the string reanalyzed, resulting in delay or disruption in processing.

One of the most important principles of the first stage is Minimal Attachment (Frazier, 1987, p 520) :

Minimal Attachment: Attach each new item into the current phrase marker postulating only as many syntactic phrase nodes as is required by the grammar.

This principle makes sole reference to the rules of phrase structure grammar; it is an economy principle in the sense that it favors a representation involving the smallest number of syntactic nodes required to analyze the string; this has the result of minimizing memory load. To examine the validity of this principle in cases of ambiguous (NP vs. S) coordination, Frazier (1987) manipulated structures in the Dutch language, contrasting the following kinds of pairs:

(1a) NP-coordinated sentence

a. Piet kuste Marie en haar zusje ook.

“Pete kissed Marie and her sister too.”

(1b). S-coordinated sentence

Piet kuste Marie en haar zusje lachte.

“Pete kissed Marie and her sister laughed”

(Frazier, 1987)

In both sentences in (1) the string *en haar zusje* is locally ambiguous between an NP and S coordination until the next word *ook/lachte* is encountered: this resolves (1a) in favour of the NP reading, and (1b) in favor of the S-coordination. Minimal attachment principle favors NP-coordination readings over the S-readings, because fewer nodes are involved in the former case. This predicts greater difficulty in processing sentence (1b): the S-readings will only be entertained after the NP-readings have failed.

Frazier found, as expected, that participants took significantly longer to read the final segment of sentence (1b), as compared to sentence (1a), indicating that the ambiguous second NP, *her sister* was processed as the object of the verb *kissed*, and when readers encountered the second verb, *laughed*, it became necessary to reanalyze the structure of the sentence as containing a full clause (GP effect).

This can be accounted for by the principle of Minimal Attachment because this principle assumes that the fewest nodes are postulated in parsing sentences. In sentence (1a) did not violate this principle because encountering the NP, *her sister*, does not require the parser to build additional nodes. On the other hand, in the string in (1b), Minimal Attachment is violated: upon encountering the second VP, *laughed*, the parser is forced to postulate an additional S node together with its internal constituents; $S \Rightarrow NP VP$, instead of NP solely. This need for re-analysis led to increased reaction times for sentence (1b), compared to sentence (1a).

As subsequent studies, Hoeks *et al.* (2002, 2006) and some other studies also found that NP-coordination readings are favored over S-coordination readings. They examined syntactic ambiguity in the coordinated structures with respect to Topic structure (Hoeks *et al.*, 2002), the time-course of the use of thematic role (Hoeks *et al.*, 2006). However, there is no study related to discourse inference. Thus, in this paper, we will address an unresolved issue in coordinated structures.

3 The present study

In the present study, we examined an unresolved issue in syntactic ambiguity resolution. This paper aims to investigate whether the combination of a pair,

some...others helps readers to resolve syntactic ambiguity. In their study, they examined the prediction of the incoming syntactic structure, *top-down* processing. Our study is also concerned with top-down processing, but our study is concerned with discourse level, not syntactic level of representation. More concretely, what we are going to look at is prediction incurred by discourse inference. As far as we know, there have been no studies concerning this combination with regard to sentence processing in psycholinguistics.

In some theoretical works, there are some studies concerning quantifier *some*. One of the discussions concerning the quantifier is a study conducted by Milsark (2014). In his dissertation, the primary concern was a discussion in existential construction *there*, but he also argues that indefinite NP can be interpreted as having two readings, namely weak and strong interpretation. Consider the following sentences:

(2a) There are some ghosts in this house.

(2b) Some ghosts live in the pantry; others live in the kitchen.

(Milsark, 2014)

In sentence (2a), this is the so-called *Existential construction*. In this type of construction, the quantifier *some* has a weak interpretation (It is the case that there are at least some ghosts in this house.). In this context, the quantifier *some* has only one interpretation. On the other hand, in sentence (2b), *some* is ambiguous either cardinality or presuppositional reading.

(3a) Cardinality reading: there are unspecified numbers of ghosts in the pantry

(3b) Presuppositional reading: there are some ghosts in the pantry, and presumably, others, live in other places.

Thus, there is a reason to believe that the combination of *some...others* resolves syntactic ambiguity. If this is the case, our prediction is that if a combination of the pair is present, there will be no syntactic ambiguity because, if *some* has a presuppositional reading, there should be an expectation that *others* will come after at some point. On the other hand, if a pair of *some...others* combination is absent, we expect that there will be reanalysis of processing at the point of disambiguation region.

4 Experiment 1

4.1 Method

4.1.1 Participants

Thirty people participated in this study, and all of them are native speakers of English and live in the US. The recruitment was done via Amazon Mechanical Turk, and as workers requirement, MTurk workers must have a license called Master worker; HIT rate must be greater than or equal to 97%; if they participated in our experiment once, then they cannot take our task again. Based on the calculation done by Sprouse (2011), participants were paid \$1.44 for the reward.

4.1.2 Materials

We constructed 72 material sentences, and 24 as target sentences; 48 as filler sentences. Example sentences are following:

(4a) Some fashion models embraced the designer and others by their first name.

(4b) Some fashion models embraced the designer and others kissed the actress.

(5a) The fashion models embraced the designer and others by their first name.

(5b) The fashion models embraced the designer and others kissed the actress.

All target sentences were coordinated structures and these can be split into two categories of the sentence type. The one type is NP-coordinated structures like (4a) and (5a); the other is S-coordinated structures like (4b) and (5b). In both types of sentences, the sentence structures before the connective *and* is identical with each other, except for the determiners, *some* or *the*. After the connective *and*, In the former type of the sentences, PP is always followed by the word *others*; on the other hand, in the latter type of the sentences, VP is followed by the indefinite word *others*.

With regard to filler sentences, there are coordination structures with connectives such as *but*, *before*, *although*, *after*, there is not any biasing sentence toward S-readings or NP-readings in relation with connective *and* structure. (See the material sentences in the appendix)

With the experimental and filler sentences, 72 sentences were used, and 24 material experimental sentences were used. The rest of the sentences

were filler sentences. There were two factors used in this experiment 1. [1] The first factor is determiner type (*some* vs. *the*). The reason why we used this contrast is that we predict that if the combination of *some* and *others* is present (4a, 4b), S-coordination readings are preferred by the readers. According to Milsark (2014), it is argued that a quantifier, *some*, has a strong determiner, implying that this presupposes the existence of the indefinite pronoun, *others*. On the other hand, if a pair, *the...others*, is present like (5a, 5b), the definite determiner, *the*, does not presuppose the existence of the indefinite pronoun, *others*, suggesting that there is an NP-coordination preference, this is consistent with evidence gained by research (Frazier, 1984, Hoeks *et al.*, 2002, 2006). [2] The second factor is sentence type (NP vs. S). The target sentence type is the S-coordination type. As a control sentence, NP-coordination is used. With respect to a condition of the experimental items, four conditions were created employing Latin square. The order of the material sentences was randomized in order to avoid any biasing effect toward either NP-or S-coordination readings. To do that, two filler sentences will be sequentially presented after the presentation of one experimental item. The participant will see each of the items from each list, but they will not see the same list again.

4.1.3 Procedure

A self-paced reading task was conducted with Ibex Farm via Amazon Mechanical Turk. Once the task was published on Amazon Mechanical Turk, workers chose the task and click on the URL, which automatically led them to the task. When the task was open on the computer, all of the workers were asked for consent and their age, and their native language. If they agree with

the consent, then some practices began. After the practice session was done, the experiment started. This was a moving-window self-paced reading task, so there was one window displayed, and if the workers click on the space key, then the next word came out. After one sentence was read, there was a comprehension question regarding the previous sentence they read. In the comprehension question task, if the workers thought that the answer was “Yes”, then the Y button was pressed, but if “No”, the N button was pressed. After the experiment was finished, the random codes appeared on the screen, so that the workers copied and paste them on the Amazon Mechanical Turk website, and submit their works.

4.2 Results

As a cut-off, in the upper bound, reading times longer than 5000 ms were excluded from the analysis. On the other hand, in the lower bound, reading time shorter than 150 ms was excluded from the analysis. For comprehension accuracy, we excluded participants who has an accuracy under 66.6 %. The result in reading time was analyzed with a linear mixed-effect model. Since our interest resides in the interaction of determiner types (*Some* vs. *The*) and Sentence type (NP-bias vs. S-bias), the analysis was done with regions 9 and 10. Region 9 is a disambiguating region, which is either PP or VP. Region 10 is a spill-over region, which was AdjP or determiner. Determiner type and Sentence type were used as fixed effects, and items and participants were treated as random effects. The model that we used is lmer command in the package of lmer4 with R language.

At the critical region 9, which is PP vs VP (e.g by vs kissed), there was no significant main effect on determiner type (estimate: -5.656, std error:

4.130, t : -1.369, $p < 0.18253$). However, we found a significant main effect on sentence type (estimate: 11.700, std error: 4.008, t : 2.919, $p < 0.00365$), allowing us to interpret that there was difficulty in processing VP, but there was no difficulty in processing PP, indicating that there is no GP effect in the latter type. we did not find a significant interaction of determiner and sentence type (estimate: -3.319, std error: 4.007, t : -0.828, $p < 0.40781$).

At the spill over region 10, which was either determiner or adjective, there is no significant main effect on the determiner type (estimate: 3.677, std error: 3.536, t : 1.040, $p < 0.299$). However, we found the significant main effect on sentence type (estimate: 25.102, std error: 5.017, t : 5.004, $p < 3.24e-05$). This result also indicates that there was difficulty in processing NP biased sentence, but there is no difficulty in NP biasing sentences. we also did not find significant interaction of determiner and sentence type (estimate: 3.542, std error: 3.536, t : 1.002, $p < 0.317$),

Figure 1

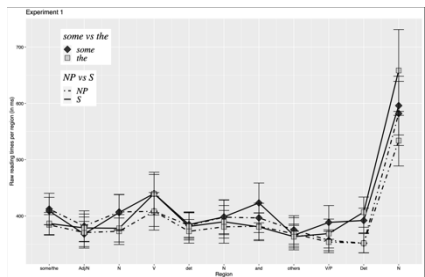


Table 1

Experiment 1					
Reading time per region(ms)					
cond ¹	8 ²	9 ³	10 ⁴	11 ⁵	
e_a	375.2387	356.8144	351.5750	582.0875	
e_b	365.8335	388.5735	391.9663	596.0315	
e_c	368.3329	353.6976	351.6571	533.7681	
e_d	363.1777	368.7687	406.7753	658.4175	

¹ e_a= some x NP-biased, e_b= some x S-biased, e_c= the x NP-biased, e_d= the x S-biased

² others

³ PPV

⁴ Determiner or Adjective

4.3 Discussion

It seems that the data is clear. Even though there is no effect on determiner type (*some* vs. *the*), the data clearly shows that sentence type (S vs. NP) has a significant effect, indicating that processing S-type sentences are difficult, compared to NP-type sentence. The data allows us to interpret that in the initial stage of reading, consisting of Minimal Attachment, syntactic information was used solely in order to parse the sentence. In the second stage, other information was used to recover from the wrong analysis of sentence structure.

It is not safe to conclude that the data is consistent with Minimal Attachment because, at the critical region, content and function words are contrasted in order to see whether there are main effects or interactions. Let us consider these sentences:

(6a) Some fashion models embraced the designer and others by their first name.

(6b) Some fashion models embraced the designer and others kissed the actress.

As to control sentences, prepositions such as *by*, are used in sentences like (6a). As for target sentences, verbs like *kissed*, are used. Compared with function words, content words need more computational load to process. If this is the case, then this statical difference cannot be explained by the principle of Minimal Attachment. Rather, this difference is just due to the amount of processing load at the critical and spill-over region. Therefore, in order to address this issue, we will conduct experiment 2.

5 Experiment 2

5.1 Method

5.1.1 Participants

Twenty-six people participated in this study, and all of them are native speakers of English and live in the US. The recruitment was done via Amazon Mechanical Turk, and as workers requirement, MTurk workers must have a license called Master worker; HIT rate must be greater than or equal to 97%; if they participated in our experiment once, then they cannot take our task again. Based on the calculation done by Sprouse (2010), participants were paid \$1.44 for the reward.

5.1.2 Materials

The experimental material consisted of 24 sets of sentences, and the example sentences are following:

(7a) Some fashion models embraced the designers and others kissed the actresses.

(7b) Some fashion models embraced the designers while others kissed the actresses.

(8a) The fashion models embraced the designers and others kissed the actresses.

(8b) The fashion models embraced the designers while others kissed the actresses.

In comparison with experiment 1, there were two changes in the structure. The first change is that in the first experiment, NP- vs S-sentence clause coordination was used in order to examine whether there is an interaction

between determiner type (some vs. the) and sentence type (S-bias vs. NP-bias). Although we did not find any effect on the interaction, it is not safe to conclude that there was no good result in the first experiment.

Notice that with respect to processing cost, there was a difference between function and content words (Gibson, 1998), and this confound might lead to the difference in latency between these two sets. Let us introduce the example sentence used from the first experiment one more time:

(9a) Some fashion models embraced the designers and others by their first name.

(9b) Some fashion models embraced the designers and others kissed the actress.

In sentence (9a), when readers encounter the PP, it is clear that there is less memory cost in the PP than one in the VP. Although I observed in the first experiment that there is a clear difference in reading time in the critical region (=V or P) and that this result is consistent with Minimal Attachment, this, in fact, can be due to the fact that the difference in cost between the functional words and content words. Thus, in order to see whether the effect was observed only due to the words, we used a different construction.

The second change was that instead of using VP vs. PP contrast, we used the conjunction *while*. Notice again that both sentences (9a) and (9b) are syntactically ambiguous at the point of *others*. In other words, even though sentences like (9a), NP-biased sentences, were not fully controlled as a baseline setting. To avoid that, the subordinate conjunction, *while* was used to set up a control sentence. By using this conjunction, there will be no grammatical ambiguity after the conjunction.

5.1.3 Procedure

The procedure is the same as experiment 1.

5.2 Results

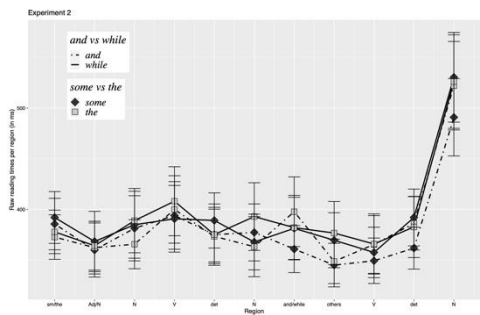
As a cut-off, in the upper bound, reading times longer than 3000ms were excluded from the analysis. On the other hand, in the lower bound, reading time shorter than 150ms was excluded from the analysis. For comprehension accuracy, we excluded participants who has an accuracy under 66.6 %. The result in reading time was analyzed with a linear mixed-effect model. Since our interest resides in the interaction of determiner types (*Some* vs. *The*) and conjunction type (*And* vs. *While*), the analysis was done with regions 9 and 10. Region 9 is a disambiguating region, which is VP. Region 10 is a spill-over region, which was AdjP or determiner. Determiner type and Sentence type were used as fixed effects, and items and participants were treated as random effects. The model that we used is lmer command in the package of lmer4 with R language.

At the critical region 9, which is VP (e.g. *kissed*), there was no significant main effect on determiner type (estimate: 7.7396, std error: 6.2299, t: 1.241, $p < 0.226$) and no significant main effect on conjunction type (estimate: 0.6513, std error: 3.9219, t: 0.166, $p < 0.868$). At the critical region, there is no indication that there was difficulty or facilitation in processing both type of sentences. we did not find significant interaction of determiner and sentence type (estimate: -2.4041, std error: 3.9307, t: -0.612, $p < 0.541$).

At the spill over region 10, which was either determiner or adjective, there was no significant main effect on the determiner type (estimate: 2.744,

std error: 5.194, t: 0.528, $p < 0.6019$) and no significant main effect on conjunction type (estimate: 6.563, std error: 5.132, t: 1.279, $p < 0.2146$). However, we found the significant interaction of determiner and conjunction type (estimate: -9.019, std error: 4.463, t: -2.021, $p < 0.0438$).

Figure 2



Note. Mean reading time (ms) per each region in a self-paced reading.

5.3 Discussion

The data we acquired in experiment 2 is somewhat unclear. Although we found that there is statistically significant interaction between *some...others* and conjunction type *and*, it is not safe to conclude that the results we acquired can be explained clearly.

Firstly, we wanted to see whether there is a statistical difference between *the...others* and *some...others*, and we found a difference in the condition of the connective *and*. In the former condition, there was a strong disruption in reading both in the critical and spill-over region. Compared with that, the latter combination significantly reduces disruption in reading,

Table 2

Experiment 2				
Reading time per region(ms)				
cond ¹	8 ²	9 ³	10 ⁴	11 ⁵
e_a	345.0299	349.3110	361.7529	490.9077
e_b	369.5647	357.5320	391.9994	530.3974
e_c	348.7239	365.3747	386.2551	522.0942
e_d	376.6574	365.8587	382.6561	526.1778

¹ e_a= some x and, e_b= some x while, e_c= the x and, e_d= the x while
² others
³ V
⁴ Determiner or Adjective
⁵ Noun

Note. Mean reading time in each region

resulting in a minor GP effect. This effect was observed both in the critical and spill-over regions. However, it is difficult to interpret these results straightforwardly (A further discussion can be seen in general discussion).

Secondly, even though there is only a numerical difference at the critical region and no interaction between determiner type (*Some* vs. *The*) and conjunction type (*While* vs. *And*), expectedly, we found that there is an interaction at the spill-over region. One possible explanation of this effect is that subordinate conjunction *while* leads readers to expect that there is a strong adversative meaning. For, the conjunction, *while*, has two meanings; the one is adversative meaning; the other was a temporal meaning. This conjunction does not always trigger the adversative meaning, but if there is a *Common Integrator*, the adversative meaning will be triggered. A *Common Integrator* refers to a superordinate category that encompasses both conjunctions (Fabricius-Hansen & Ramm, 2008). Moreover, according to Spenader and Lobanova (2009), the conjunction *while* is used in the meaning of contrast sets, compared with cause-effect. Thus, it is possible that because the verb is not well-controlled in the material sentences, this caused the *while* type of sentences to increase the reading time in the verb or spill-over region.

Finally, to sum up, there is evidence that the combination *some...others* did affect the resolution of syntactic ambiguity. Although a lack of contrastive verbs might incur reading time in the verb region, we still observed the three-one interaction between determiner type (*some* vs. *the*) and conjunction type (*and* vs. *while*).

6 General discussion

In this paper, we examined that the presence of *some...others* reduces or eliminates a GP effect. Also, these experiments were aiming to see whether there is prediction in grammatical structure, namely S-coordinated structures.

In experiment 1, we manipulated both the determiner type (*Some* vs. *The*) and the sentence type (S-biased vs. NP-biased) to see whether the *some...others* combination reduces GP effect or alternate NP-readings into S-readings. The data in experiment 1 suggests that there is difficult in reading the S-coordinated structures, not in the NP-coordinated structures, indicating that there is no effect on the combination. Although we found that there is a disruption in the S-coordinated structures, it is not safe to conclude that there is no effect on the combination at all. This is because it might be the case that, compared to verbs, prepositions do not load memory cost, resulting in a statistically significant difference between these two structures. To address this confound, we conducted experiment 2 with manipulation of the material sentences.

In experiment 2, to deal with the confound observed in the experiment 1, we changed one factor. As in the experiment 1, the determiner type is identical in this experiment. However, the second factor was altered, which is conjunction type (*And* vs. *While*). With the change into this manipulation, it enables us to examine whether the combination *some...others* can be effective to resolve syntactic ambiguity. This is simply because with the use of subordinate conjunction *while*, it becomes possible to use verbs in the clause, allowing us to compare the verbs in connective *and*

with those of *while* (assuming that the critical region is in the second verbs). We found that there is an interaction between the determiner and the conjunction type in the spill-over region. When the combination, *some...others* is present, there was no strong disruption in reading. On the other hand, when the combination is absent, there was a strong disruption in reading, suggesting that *some...others* did reduce the difficulty in processing. There is an unexpected result depending on the conjunction type.

First, let us discuss the findings of what we expected from the results. Although there is only a numerical difference at the critical region and no interaction between determiner type (*Some* vs. *The*) and conjunction type (*While* vs. *And*), expectedly, we found that there is an interaction at the spill-over region. We observed that the results were three-one interaction.

The data can be explained in two ways, but these results might be interpreted as being consistent with the Constraint-based model. Also, there was no indication of predicting a grammatical structure, a preference of S-coordination. In the following, we will explain how we interpret the findings we observed. First, we will explain the data we acquired in experiment 1 and 2 is consistent with the GP model. Next, we will explain that we did not observe any indication of predicting syntactic structures, that is, the S-coordinated structures. Subsequently, we will suggest an alternative account, *Attach anyway* (Fodor & Inoue, 1998) can account for the data. Finally, we will show the data is possibly consistent with the Constraint-based model.

Firstly, our data is consistent with the GP model. The GP model suggests that in the first stage, syntactic information is solely used in order to process the sentence, and if necessary, other pieces of information such as

thematic roles or discourse, will be used to reanalyze the sentence structure. Our data, especially experiment 2, suggests that in the case of *the...others*, this pair does not trigger S-coordination readings due to the absence of *some*, so that we observed that there was great difficulty in processing the sentences with this pair. On the other hand, when *some...others* pair is present, the GP effect was significantly reduced, indicating that the activation of *some* occurred at the point of the disambiguating region. Thus, we can claim that *some...others* triggered presuppositional reading at some point in the disambiguation region. However, it is not clear that this reading is default reading in this study.

Since we did not use definite *the others*, this led readers to being hard to identify antecedent of this pronoun. This might result in difficulty in reading both *the...others* and *some...others*. Let us consider a sentence that we used in experiment 2 in order to demonstrate why that might be the case:

(10a) The fashion models embraced the designers and others kissed the actresses.

(10b) Some fashion models embraced the designers and others kissed the actresses.

In sentence (10a), the pronoun *others* is ambiguous between the two interpretation, namely, *the fashion models* or non-identify *others*. In this sentence, there is no determined indication that *others* could refer to *fashion models*. In other words, the pair, *the...others*, does not trigger partitive reading, resulting in strong NP-coordination readings in sentence (10a). On

the contrary, in a pair *some...others*, this reading could be easier, compared to sentence (10a). As we discussed in the present study section, according to Milsark (2014), theoretically, encountering *others* possibly presupposed the existence of some other people. On the basis of result in experiment 2, this retrieval could not occur in the first reading. However, when readers reanalyze the sentence, this semantic effect was used in order to make sense the structure of the sentence. And yet, *others* can still be ambiguous between *fashion models* and non-identify *others* interpretation, and we suspect that there was no explicit marker to resolve this ambiguity, resulting in a little difficulty of processing. The difficulty observed in spill-over region might be the reflection of this ambiguity.

Secondly, there was no indication of predicting the following syntactic structure. According to Staub and Clifton, Jr (2006), it was found that because of the presence of *either*, faster reading time was observed at the NP right after disjunction *or*. In the absence of *either*, the same region was slower, compared to the former one. They concluded that the presence of *either* contributed to predicting the following syntactic structure, that is, the S-coordinated structures. However, in our study, we did not find the same indication at the ambiguity region, that is, at the NP right after the connective *and*. If there is a syntactic prediction effect depending on the determiner type (in our case, *the* vs. *some*), then we should have observed the difference in time at the region, *others*. However, we did not see any indication of that, and thus it is safe to conclude that there is no S-coordination reading prediction, depending on the determiner types.

Thirdly, our results could be accounted for by *Attach anyway* (Fodor & Inoue, 1998, p 103-105). Here is what Attach Anyway states:

“*Attach anyway*: Having established that there is no legitimate attachment site in the the current phrase marker (CPPM) for the current input word, attach the input word into CPPM whenever it least severely violates the grammar, and is subject to the usual preference principles that govern Attach.”

Perhaps, with the determiner *some*, the stealing behavior was easier to do. However, without the determiner *some*, there is difficulty in doing the same thing.

Lastly, our result might be consistent with the constraint-based model. There are some reasons to believe this interpretation is right as well. The first reason is that Hoeks *et al.* (2002) showed evidence of minimal-topic structure, arguing that the topic should be one sentence. They showed the data is consistent with their principle, and conclude that the constraint-based model is the right interpretation. Also, in the discussion of frequency, although Hoeks *et al.* (2002) did not conclude that *coarse-grained* frequency measure can be evidence of the Constraint-based model, Engelhardt and Ferreira (2010) stated in the conclusion section that their results are reliance on *coarse-grained* frequency. From these pieces of data, coordination structure is in its nature preferred to be processed in NP-coordination readings. However, in this paper, we did not conduct any frequency study, so that we cannot conclude that our results also support this model. However, if we found evidence being inconsistent with the works of literature we just discussed, that would be very interesting. In other words, if we found

evidence that the presence of *some...others* occurs frequently in S-coordinated structures, compared to NP-coordinated structures, this finding could support this model.

This study provides new evidence in the resolution of syntactic ambiguity. This is because many studies in coordinated structures provided evidence with respect to local syntactic ambiguity (Hoeks *et al.*, 2006). As we discussed above, Hoeks *et al.* manipulated thematic roles in noun phrases conjoined with *and*. This is merely addressed local syntactic ambiguity. However, in our study, we addressed a question of a long-distance activation in *some...others*. That is, when the quantifier *some* is present, this quantifier is activated at the point of *others*, resulting in preference in S-coordination readings. Our data in experiment 2 suggests that the data is consistent with the garden path model. Although a GP effect was not completely eliminated even in the combination *some...others*, the combination reduces the difficulty of the GP effect.

Also, our experiment suggests that cardinality reading is taken in the first reading, and secondly reading switched to the presuppositional reading because of the presence *some...others*. However, we cannot conclude that this is the case. This is simply because if the GP model is correct, only syntactic structure is concerned in the first reading, implying that cardinality reading should not be involved initially. If only presuppositional reading was entertained in the reanalysis, not cardinality reading, then we could interpret that presuppositional reading was initially taken. Thus, further research is needed to determine which readings are used as default.

Conclusion

In this paper, we investigate the question of the resolution of syntactic ambiguity in coordination structure in the English language. We showed new evidence, that is, the presence of the combination *some...others*, reduce the GP effect. We interpreted that the data is consistent with the GP model. As further research, we want to see whether there will be evidence of the completion of syntactic ambiguity within a certain context. Moreover, there is no evidence of the frequency of the combination, and thus with the result of the frequency with corpus study, our findings will be able to be confirmed with further, stronger evidence. We will await for a further investigation of our findings.

References

- Altmann, G. T. (1989). Parsing and interpretation: An introduction. *Language and Cognitive Processes*, 4(3-4), SI1-SI19.
- Bailey, K. G., & Ferreira, F. (2003). Disfluencies affect the parsing of garden path sentences. *Journal of Memory and Language*, 49(2), 183-200.
- Chomsky, N. (1957). *Syntactic structures*. Mouton.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. M.I.T. Press.
- Clifton Jr, C., & Staub, A. (2008). Parallelism and competition in syntactic ambiguity resolution. *Language and Linguistics Compass*, 2(2), 234-250.
- Engelhardt, P. E., & Ferreira, F. (2010). Processing coordination ambiguity. *Language and speech*, 53(4), 494-509.

- Fabricius-Hansen, C., & Ramm, W. (Eds.). (2008). *'Subordination' versus 'coordination' in sentence and text: A cross-linguistic perspective* (Vol. 98). John Benjamins Publishing.
- Ferreira, F., Bailey, K. G., & Ferraro, V. (2002). Good-enough representations in language comprehension. *Current directions in psychological science*, 11(1), 11-15.
- Ferreira, F., & Patson, N. D. (2007). The 'good enough' approach to language comprehension. *Language and Linguistics Compass*, 1(12), 71-83.
- Ferreira, F., & Qiu, Z. (2021). Predicting syntactic structure. *Brain Research*, 147632.
- Fodor, J. D., & Inoue, A. (1998). Attach anyway. *Reanalysis in sentence processing*, 101-141.
- Frazier, L., & Fodor, J. D. (1978). The sausage machine: A new two-stage parsing model. *Cognition*, 6(4), 291-325.
- Frazier, L. (1979). *On comprehending sentences: Syntactic parsing strategies*. PhD dissertation, University of Connecticut.
- Frazier, L. (1987). Syntactic processing: evidence from Dutch. *Natural Language & Linguistic Theory*, 5(4), 519-559.
- Gibson, E. (1998). Linguistic complexity: Locality of syntactic dependencies. *Cognition*, 68(1), 1-76.
- Hoeks, J. C., Vonk, W., & Schriefers, H. (2002). Processing coordinated structures in context: The effect of topic-structure on ambiguity resolution. *Journal of Memory and Language*, 46(1), 99-119.

- Hoeks, J. C., Hendriks, P., Vonk, W., Brown, C. M., & Hagoort, P. (2006). Processing the noun phrase versus sentence coordination ambiguity: Thematic information does not completely eliminate processing difficulty. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 59(9), 1581-1599.
- MacDonald, M. C., Pearlmutter, N. J., & Seidenberg, M. S. (1994). The lexical nature of syntactic ambiguity resolution. *Psychological review*, 101(4), 676.
- McRae, K., & Matsuki, K. (2013). Constraint-based models of sentence processing. *Sentence processing*, 63-89.
- Milsark, G. L. (2014). Existential Sentences in English (RLE Linguistics D: English Linguistics).
- Sprouse, J. (2011). A validation of Amazon Mechanical Turk for the collection of acceptability judgments in linguistic theory. *Behavior research methods*, 43(1), 155-167.
- Staub, A., & Clifton Jr, C. (2006). Syntactic prediction in language comprehension: evidence from either... or. *Journal of experimental psychology: Learning, memory, and cognition*, 32(2), 425.
- Spenader, J., & Lobanova, A. (2009, January). Reliable discourse markers for contrast relations. In *Proceedings of the Eight International Conference on Computational Semantics* (pp. 210-221).
- Van Gompel, R. P., Pickering, M. J., & Traxler, M. J. (2000). Unrestricted race: A new model of syntactic ambiguity resolution. *Reading as a perceptual process*, 621-648.

書評

川野靖子著

『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究』

東京：ひつじ書房, 2021, ix+283 頁

青木 奈律乃

1. 全体の概要

本書で取り上げられる壁塗り代換とは、次のような文のペアの間で起こる格体制の交替である：

- (1) a. 壁にペンキを塗る（位置変化動詞文）
 b. 壁をペンキで塗る（状態変化動詞文）

(1a, b)のペア両方に「塗る」という動詞が含まれているが、使われている名詞句（壁、ペンキ）はそれぞれ異なる格体制に現れている。(1a)は移動する対象「ペンキ」がヲ格句、塗られる場所の「壁」がニ格句として現れている。いっぽう、(1b)では塗られる場所である「壁」がヲ格句、「ペンキ」がデ格句として現れている。こういった～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の格体制で表される位置変化動詞文・状態変化動詞文の交替を「壁塗り代換¹⁾」と呼ぶ。

本書は、壁塗り代換に代表されるような位置変化動詞文と状態変化動詞文の交替現象を取り上げ、その成立条件および交替原理の解明、交替現象の体系的記述、文法体系における位置付けを明らかにすることを目的としている。

本書は9章と2つの付章から構成される。まず、付着移入型壁塗り代換（第1章）と餅くるみ交替（第2章）という、～ニ～ヲ形と～ヲ

～デ形の格交替について取り上げ、意味類型の階層モデルを用いて交替条件を論じる。第4章、第5章ではその他の日本語の格交替として離脱型壁塗り代換（「グラスから水を空ける」⇔「グラスを空ける」のような、～カラ～ヲ形・～ヲ形の交替現象）と満ち欠け代換（「彼には積極性が欠けている」⇔「彼は積極性に欠けている」のような、～ニ～ガ形・～ガ～ニ形の交替現象）の例を紹介し、付着移入型壁塗り代換や餅くるみ交替と同様、意味類型の階層モデルによって成立原理を示している。第7章は英語の *locative alternation* の枠組みとの比較から、意味類型の階層モデルの有効性を検討する。第8章は壁塗り代換とヴォイス（能動文・直接受動文や自他交替）を、事態の同一性という観点から区別し、第9章では交替動詞と多義語の違いを考察する。

本書評では、付着移入型壁塗り代換（第1章）と餅くるみ交替（第2章）を中心にまとめ、交替動詞条件および意味類型の階層モデルがどのように規定されたかを紹介する。その後、本書で提案された意味類型の階層モデルでは説明が難しいと思われる英語の例を取り上げる。

2. 「第1章：付着移入型壁塗り代換」について

付着移入型壁塗り代換とは次のような例が表す交替現象である。

- | | | |
|-----|--------------|--------------|
| (2) | a. 壁にペンキを塗る | (位置変化：～ニ～ヲ形) |
| | b. 壁をペンキで塗る | (状態変化：～ヲ～デ形) |
| (3) | a. グラスに水を満たす | (位置変化：～ニ～ヲ形) |
| | b. グラスを水で満たす | (状態変化：～ヲ～デ形) |

(2)では「塗る」、(3)では「満たす」という動詞が使われている。本書では、～ニ～ヲ形・～ヲ～デ形の交替のなかでも、こういった付着・充満を表す動詞が使われているものを「付着移入型壁塗り代換」と分類している。

2.1. 先行研究の問題点

壁塗り代換を起こすのはどのような動詞かという問題に関して、奥津(1981)や岸本(2001)等では「位置変化と状態変化の意味の両方を持つ動詞が壁塗り代換を起こす」という説明がなされてきた。つまり、交替動詞「塗る」の場合、動詞が位置変化と状態変化の両方の意味を持っているため「ペンキを壁に塗る」ではペンキの位置変化を、「壁をペンキで塗る」では壁の状態変化を表すことができるというものである。

著者はこういった「位置変化と状態変化両方の意味を持つものが交替動詞であり、位置変化動詞文と状態変化動詞文の両方に現れることができる」という説明は、交替条件の記述というよりは「意味的な観点から言い換えたもの」であると指摘した。たとえば、交替を示す例(4)と、非交替の例(5)(6)を見てみよう。

- | | | |
|-----|---------------|--------------|
| (4) | a. 壁にペンキを塗る | (位置変化：～ニ～ヲ形) |
| | b. 壁をペンキで塗る | (状態変化：～ヲ～デ形) |
| (5) | a. 壁にペンキを付ける | (位置変化：～ニ～ヲ形) |
| | b. *壁をペンキで付ける | (状態変化：～ヲ～デ形) |
| (6) | a. *壁にペンキを汚す | (位置変化：～ニ～ヲ形) |
| | b. 壁をペンキで汚す | (状態変化：～ヲ～デ形) |

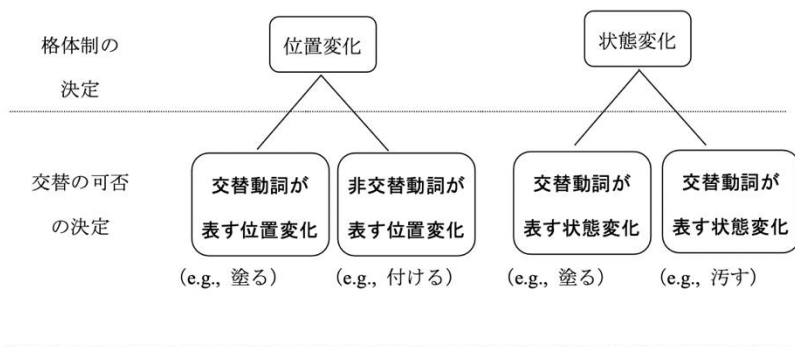
(4)「塗る」は～ニ～ヲ形・～ヲ～デ形どちらにも現れることができるのに対し、(5)「付ける」は(5b)～ヲ～デ形に現れず、(6)「汚す」は(6a)～ニ～ヲ形に現れない。位置変化と状態変化両方の意味を持つ動詞が交替動詞であるとする、(4)のように「塗る」が～ニ～ヲ形・～ヲ～デ形の両方に現れることができるのは「塗る」が位置変化と状態変化両方の意味を持つため、ということになる。いっぽう、(5)「付ける」と(6)「汚す」が交替しないのは「付ける」は位置変化の意味のみを、「汚す」は状態変化の意味のみを持つためと言える。

しかし、「塗る」が両方の意味を持ち、「付ける」が位置変化の意味しか持たないということは、(4a-b)の両方および(5a-b)の両方を観察して初めてわかる事実であり、位置変化動詞文(4a)(5a)のみの観察から導かれることではない。同様に、「汚す」が状態変化の意味しか持たない動詞であるということも、(6b)の状態変化動詞文だけではなく(6a)の位置変化動詞文も観察して初めて言えることである。このことから、「位置変化と状態変化両方の意味を持つ動詞が交替動詞である」という説明は「位置変化動詞文(～ニ～ヲ形)と状態変化動詞文(～ヲ～デ形)両方に現れることができる動詞が交替動詞である」ということの言い換えであり、条件の記述として妥当ではないと著者は指摘している。著者は、交替動詞の条件をそういった言い換えではなく、「意味タイプの階層モデル」をもとに記述しようとしている。

2.2. 意味タイプの階層モデルの提案

著者の提案する「意味タイプの階層モデル」では、動詞の意味タイプに(7)のような階層があると考ええる。

(7) 意味類型の階層モデル：交替の可否を決定する層



(p.20)

(7)では、「位置変化」「状態変化」という2つの意味類型は「格体制の決定に関わる意味類型」だとされている。さらに、その下位分類として「格体制の交替の可否の決定に関わる意味類型」というものを想定している。たとえば、「塗る」「付ける」が～ニ～ヲ形に現れることができるのは「位置変化」という共通の意味類型によって捉えられる。しかし、交替の可否の決定レベルでは、交替動詞（e.g., 「塗る」）が表す位置変化と非交替動詞（e.g., 「付ける」）が表す位置変化は別のタイプであると考えられる。また、「塗る」「汚す」が～ヲ～デ形に現れることができるのは「状態変化」の意味類型によって捉えられるが、交替動詞（e.g., 「塗る」）が表す状態変化と非交替動詞（e.g., 「汚す」）が表す状態変化は別のタイプであるとみなされる。このように、交替動詞が表す位置変化・状態変化と非交替動詞が表す位置変化・状態変化を異なるタイプとみなすことにより、交替動詞と非交替動詞の性質を区別することができるというのが本モデルの考え方である。

著者は交替動詞が表す位置変化を「依存的転位」、交替動詞が表す

状態変化を「総体変化」と呼び、格体制の交替は依存的転位と総体変化の間で起こると述べている。次節から依存的転位および総体変化の考え方を簡単にまとめる。

2.2.1. 依存的転位

著者は交替動詞が表す位置変化とは、「対象の位置変化のあり方が、ニ格句の事物に依存して決まる」ような位置変化だと述べている (p.25)。いっぽう、非交替動詞の表す位置変化は場所に依存するものではないとしている。

- (8) 交替動詞が表す位置変化動詞文 (～ニ～ヲ形)
- a. 壁にペンキを塗る (⇔壁をペンキで塗る)
 - b. グラスに水を満たす (⇔グラスを水で満たす)
 - c. 床に紙屑を散らかす (⇔床を紙屑で散らかす)
- (9) 非交替動詞が表す位置変化動詞文 (～ニ～ヲ形)
- a. 黒板に磁石を付ける (⇔*黒板を磁石で付ける)
 - b. グラスに水を入れる (⇔*グラスを水で入れる)
 - c. 机の上に鉛筆を置く (⇔*机の上を鉛筆で置く)
- (p.24)

(8a-c)は交替動詞が表す位置変化動詞文の例であり、いずれも対象(ヲ格事物)の位置変化のあり方が場所(ニ格事物)に依存している。たとえば(8a)「塗る」の場合、ペンキがどのような形状で場所(壁)に存在するかは壁の表面の形状による。(8b)「満たす」では、場所(グラス)の内部空間に占める対象(水)の割合が最大になるまで対象を移動させる必要がある。つまり、対象がどれほどの量で存在するかは

場所の形状（空間）による。(8c)「散らかす」は空間の美観を損なうような状態で対象を拡散させることを表すので、これも対象の位置変化のあり方が空間の美観によって規定されると言える。

いっぽう、(9a-c)の非交替動詞の例が示すのは、二格事物に依存しない位置変化である。(9a)「付ける」の場合、磁石の形状が黒板に合わせて変わるわけではない。(9b)「入れる」は一見(8b)「満たす」と似ているが、容器の埋まり具合が二格事物「グラス」によって規定される(8b)「満たす」とは反対に、(9b)「入れる」ではそういった変化のあり方は特に規定されない。(9c)「置く」も(9a)「付ける」と同様、鉛筆の形が机の形によって規定されるような位置変化ではない。

このように、場所（二格事物）によって対象（ヲ格事物）の位置変化のあり方が決まるような位置変化のタイプを、著者は「依存的転位」と呼んでいる。また、交替動詞が表す位置変化は依存的転位であり、非交替動詞の表す位置変化（非依存的転位）と区別している。

2.2.2. 総体変化

さらに著者は、交替動詞の表す状態変化と非交替動詞の表す状態変化も異なるタイプであると説明している。交替動詞の表す状態変化は「総体変化」と呼ばれ、対象それ自体の変化ではなく「対象が別の事物を伴うことで、総体的な様子が変化する」という状態変化を指している（p.28）。次の(10)は交替動詞の状態変化動詞文、(11)は交替動詞の状態変化動詞文を表している。

(10) 交替動詞が表す状態変化動詞文（～ヲ～デ形）

- a. 壁をペンキで塗る (⇔壁にペンキを塗る)
- b. グラスを水で満たす (⇔グラスに水を満たす)

c. 腕を包帯で巻く (⇔腕に包帯を巻く)

(11) 非交替動詞が表す状態変化動詞文 (～ヲ～デ形)

a. 風船を空気でふくらます (⇔*風船に空気をふくらます)

b. コーヒーを水で薄める (⇔*コーヒーに水を薄める)

c. 床をペンキで汚す (⇔*床にペンキを汚す)

(p.26-27)

(10a-c)に示される交替動詞の状態変化動詞文では、ヲ格事物そのものに変化は現れないと述べられている。(10a)「塗る」の場合、ペンキが塗られることによって色などの属性の変化が必ずしも現れるわけではなく、壁と同じ色のペンキが塗られたとしても「壁をペンキで塗る」は容認される。同様に、(10b)「グラス」は、水が注がれたあとでグラスの形や大きさが変化するわけではないし、(10c)の「腕」そのものにも変化はない。

いっぽう、(11)の例において状態変化はヲ格事物そのものに生じている。(11a)では風船そのものの大きさ、(11b)はコーヒーの濃度、(11c)は床そのものの美観に影響がある。このように、非交替動詞の表す状態変化は場所(ヲ格事物)そのものが変化する「自体変化」であるのに対し、交替動詞の表す状態変化は対象(デ格事物)を伴うことで場所(ヲ格事物)の総体的な様子が変化する「総体変化」ⁱⁱであると著者は主張している。

2.3. 交替動詞の条件

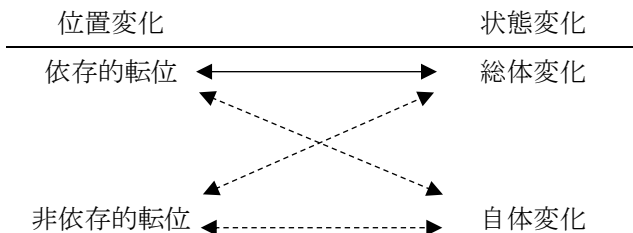
著者の提案した交替条件は、以下のように整理される。

(12) 壁塗り代換は、「塗る」なら「塗る」という動詞が、現実世界の同一事態を指示しつつ、それを依存的転位(位置変化の下位類型)と総体変化(状態変化の下位類型)の2通りに類型化して表す現象である。

(p.34)

また、(13)は依存的転位、総体変化の交替関係をまとめたものである。

(13) 格体制の交替の可否



(p.35)

実線で結ばれる依存的転位と総体変化の間では交替が起こるが、点線で結ばれる非依存的転位、自体変化との組み合わせでは交替は起こらないということを示している。

依存的転位と総体変化の間でのみ交替が起こるのはなぜかという点について、著者は視点のシフトという観点から分析を行っている。ある事物が他方に依存的なあり方で存在する場合、視点を変えれば、ある事物が他方を伴うことで総体的に変化するとも言える。よって、依存的転位が起こっていると解釈される事態は、総体変化が起こっている事態とも解釈できる。つまり、同一事態の類型化が2通り起こることで、それぞれの意味類型が位置変化動詞文や状態変化動詞文とし

て現れることになる。

これらの考えを踏まえつつ、第2章以降では他の交替現象を取り上げ、意味類型の階層モデルを用いて統一的に交替条件を記述している。

3. 「第2章：餅くるみ交替」について

付着移入型壁塗り代換とよく似た格交替現象に、次のようなものがある。

- | | | |
|------|--------------|--------------|
| (14) | a. 桜の葉に餅をくるむ | (位置変化：～ニ～ヲ形) |
| | b. 餅を桜の葉でくるむ | (状態変化：～ヲ～デ形) |
| (15) | a. 風呂敷に本を包む | (位置変化：～ニ～ヲ形) |
| | b. 本を風呂敷で包む | (状態変化：～ヲ～デ形) |

(p.49)

(14a-b)(15a-b)のような格交替現象を、著者は「餅くるみ交替」ⁱⁱⁱと呼んでいる。これらは付着移入型壁塗り代換と同じ～ニ～ヲ形・～ヲ～デ形のペアのようにも見えるが、壁塗り代換とは異なる格成分対応をとっている。たとえば、「壁にペンキを塗る⇔壁をペンキで塗る」のペアでは、場所名詞の「壁」はニ格句とヲ格句の間で、対象の「ペンキ」はヲ格句とデ格句の間で交替する。これに対し、(14a-b)の「餅」は、(14a) (14b)どちらでもヲ格句として現れ、(15a-b)「本」も同様、どちらの格体制でもヲ格句として現れている。いっぽう、(14a-b)「桜の葉」、(15a-b)「風呂敷」はニ格句とデ格句の間で交替している。

著者は、餅くるみ交替も壁塗り交替と同様、依存的転位と総体変化によって起こる交替現象であることを述べたあと、2つの交替現象がなぜ異なる格成分対応を見せるのかを論じている。具体的には、意味類型の階層モデルに動詞タイプを考慮した階層を加え、「塗る」等の

動詞（壁塗り代換動詞）と「くるむ」等の動詞（餅くるみ交替動詞）のグループでは依存的転位と総体変化のタイプが異なるという考えを示している。

3.1. 依存的転位

著者は、まず壁塗り代換と餅くるみ交替の～ニ～ヲ形の例を比較し、どちらも依存的転位であることを指摘している。

- (16) a. 壁にペンキを塗る (壁塗り代換)
 b. 桜の葉に餅をくるむ (餅くるみ交替)

(p.56)

(16a-b)どちらも一方の事物が他方の事物の形状に合わせて位置変化を起こす事象と言える。しかし、「塗る」の依存的転位はヲ格事物（ペンキ）がニ格事物（壁）の形状に合わせることで起こるのに対し、「くるむ」はニ格事物（桜の葉）がヲ格事物（餅）に形状を合わせることで位置変化が起こるという点に違いがある。

これらの依存的転位の違いは、～ヲ～デ形での格成分対応の違いをもたらすことになり、次のようにまとめられる。

(17) ～ニ～ヲ形から～ヲ～デ形への交替

<～ニ～ヲ形>

塗る : ヲ格句の事物（ペンキ）がニ格句の事物（壁）に形状を合わせる。

くるむ : ニ格句の事物（桜の葉）がヲ格句の事物（餅）に形状を合わせる。



<～ヲ～デ形> デ格句

ヲ格句

(p.58)

壁塗り代換を起こす動詞「塗る」の総体変化は、ニ格事物（壁）がヲ格事物（ペンキ）を伴うことでニ格事物（壁）の様子が変化するものだが、「くるむ」ではヲ格事物（餅）がニ格事物（桜の葉）を伴うことでヲ格事物（餅）の様子が変化するという状態変化を表すことになる。

3.2. 総体変化

壁塗り代換と同様、餅くるみ交替の～ヲ～デ形（状態変化動詞文）も総体変化を表すと述べられている。

- (18) a. 壁をペンキで塗る (壁塗り代換)
 b. グラスを水で満たす (壁塗り代換)
 b. 餅を桜の葉でくるむ (餅くるみ交替)

(p.58)

(18a)「塗る」や(18b)「満たす」では、ヲ格事物（壁、グラス）の表面や内部にデ格事物（ペンキ、水）を伴うことでヲ格事物の総体的な様子の変化が起こる。いっぽう、(18c)「くるむ」の場合、デ格事物（桜

の葉)の内側にヲ格事物(餅)が存在することになる。

これらの総体変化の違いもまた、～ニ～ヲ形での格成分対応の違いを引き起こすことになり、次のようにまとめられる。

(19) ～ヲ～デ形から～ニ～ヲ形への交替

<～ヲ～デ形>

満たす：ヲ格句の事物(グラス)が外側、デ格句の事物(水)が内側

くるむ：デ格句の事物(桜の葉)が外側、ヲ格句の事物(餅)が内側



<～ニ～ヲ形> ニ格句



ヲ格句

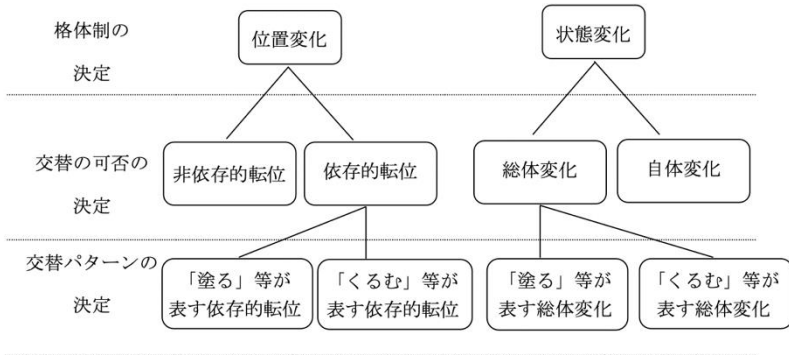
(p.59)

「塗る」「満たす」の依存的転位は、～ヲ～デ形のヲ格事物の表面や内側にデ格事物(ペンキ)が存在するようになるという位置変化を表す。いっぽう、「くるむ」等の餅くるみ交替動詞はデ格事物(桜の葉)がヲ格事物(餅)の外側に存在するような位置変化を表すことになる。

3.3. 意味類型の階層モデル

「塗る」等の動詞が表す依存的転位・総体変化と、「くるむ」等の動詞が表す依存的転位・総体変化がそれぞれ異なるタイプであることは、依存的転位および総体変化に下位分類が存在することを示している。これらを考慮し、(7)のモデルに新たな意味階層を加えたのが次の(20)である。

(20) 意味類型の階層モデル：交替パターンを決定する階層



(p.56)

上から順に見ていくと、格体制の決定のレベルでは、ある動詞が位置変化動詞文（～ニ～ヲ形）と状態変化動詞文（～ヲ～デ形）どちらの格体制に現れるかを決定する。それぞれの下位類型には依存的転位と非依存的転位、総体変化と自体変化のタイプがあり、依存的転位と総体変化の両方に類型化される場合に交替が可能である。さらに、「交替パターンの決定」レベルを設定することで、同じ～ニ～ヲ形・～ヲ～デ形の交替であっても、「塗る」等の動詞グループは壁塗り代換のパターンで交替を起こし、「くるむ」等の動詞グループは餅くるみ交替のパターンで交替を起こすということを区別できる。

4. 本書の意義と課題

本書で提案された枠組みの意義は、従来の研究で述べられていた「位置変化と状態変化」という2つの意味類型に下位分類を設けた点にある。交替現象を複数のレベルの意味類型に基づいて分析した先行

研究には Iwata (2008)があるが、Iwata (2008)で提案された verb-specific construction と verb-class-specific construction というレベルでは、交替動詞と非交替動詞の共通性は捉えられるものの、違いを区別することはできない。本書の意味類型の階層モデルは、位置変化・状態変化の下位タイプを見ることによって動詞の性質の違いを捉え、さらに交替可能性を予測できるという点で優れていると言える。また、壁塗り代換以外の交替現象の成立原理を、依存的転位・総体変化という観点から包括的に捉えたという点に独創性がある。

評者が考える本書の課題としては、まず、依存的転位・総体変化という下位分類の考え方では捉えきれないような英語の交替例があるという点である。本書評では詳しく取り扱わなかったが、第7章では英語の *locative alternation* について、Pinker(1989)、Levin(2006)、Iwata(2008)の議論における問題点をまとめた上で、意味類型の階層モデルの枠組みの有効性を述べている。英語の *locative alternation* における交替条件も日本語の場合と同様、依存的転位・総体変化という条件で説明ができそうだが、英語の餅くるみ交替に相当する *in-with alternation* の例には、日本語の餅くるみ交替に見られる依存的転位とはやや異なるタイプのものがある。

- (21) a. coat the fish {with / in} seasoned flour
b. smother a steak {with / in} mushrooms
(p.189 (20a–b), (21a–b) = Iwata 2008: 102)
c. shroud the building {with / in} scaffolding
(Iwata 2008: 102)

in-with alternation では、NP1 *with* NP2 が日本語の餅くるみ交替の～ヲ

～デ形、NP1 *in* NP2 形が～ニ～ヲ形に相当すると考えられる。著者の説明に基づく、日本語では二格事物がヲ格事物に合わせる形で依存的転位が起こることになるため、(21a)では直接目的語 *the fish* の周りに *in* の目的語 *seasoned flour* をまぶす（付着させる）という依存的転位が起こると考えられる。いっぽう(21b)の *in* の目的語 *mushrooms* は「桜の葉」や「包帯」のような柔軟性のある事物や、*seasoned flour* のような粒子とは違うタイプの物質であり、直接目的語 *a steak* の形状に合わせて形を変えるわけではない。また、本書では紹介されていないが、(21c)のような例にも同様の問題がある。*scaffolding* は直接目的語 *the building* の周囲を囲むように組まれるのであって、それ自体が建物に沿うように形を変えるものではないため、依存的転位の定義には当てはまらないように思われる。このように、「桜の葉」や「包帯」とは異なる、一方の事物に形状を適応させられないような事物であっても *in-with alternation* に現れていることに関しては、本書では特に触れられていない。

これらの例の観察から、本書で提案された意味類型の階層モデルを英語に適用させる場合、少なくとも交替パターンを決定する階層では日本語との違いが生まれると考えられる。例えば、「*coat* が表す依存的転位」「*smother* が表す依存的転位」というふうに、英語においても動詞グループ別の依存的転位や総体変化のタイプを考える必要があるかもしれない。

著者も指摘している通り、意味類型の階層モデル以外に、動詞の個別的要因や目的語名詞の性質を考慮すべき例もあるため、交替の成立条件の記述に関してはまだ検討の余地がある。また、本モデルの有効性に関して、日本語や英語以外の言語にも応用の可能性があり、今後の研究が待たれる。

注

- ⁱ 先行研究では「壁塗り代換」以外にも「壁塗り構文」「壁塗り交替」「場所格交替」（岸本 2001, 高見・久野 2014 等）という名称で呼ばれている。
- ⁱⁱ 交替動詞の表す総体変化が場所（ヲ格事物）そのものの変化ではないことの根拠の一つとして、川野はデ格句の省略可能性を挙げている。たとえば「グラスを（水で）満たす」の場合、デ格句「水で」を省略すると許容度が下がるのは、交替動詞の表す状態変化がヲ格句そのものの変化ではなく、ヲ格句とデ格句 2 つの事物から成り立つ変化であるためだと分析している。
- ⁱⁱⁱ 著者が壁塗り代換を「代換」と呼び、餅くるみ交替を「交替」と呼ぶことについては、格交替の種類の違いが理由に挙げられている。壁塗り代換では～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形のうちニ格事物とヲ格事物（「壁に（ペンキを塗る）」⇔「壁を（ペンキで塗る）」）、ヲ格事物とデ格事物（「ペンキを（壁に塗る）」⇔「ペンキで（壁を塗る）」）の 2 組の格交替が起こる。いっぽう、餅くるみ交替では～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形のニ格事物とデ格事物のみが格交替を起こす（「桜の葉に（餅をくるむ）」⇔「桜の葉で（餅をくるむ）」）。これらの特徴から、著者は 2 組の格交替を起こすものを「代換」、1 組の格交替を起こすものを「交替」と呼んでいる。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1981) 「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127, pp.21–33, 国語学会.
- 岸本秀樹 (2001) 「壁塗り構文」影山太郎（編）『日英対象 動詞の意味と構文』pp.100–126, 大修館書店.
- 高見健一・久野暲 (2014) 『日本語構文の意味と機能を探る』くろしお出版.
- Iwata, S. (2008). *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Levin, B. (2006). English object alternations: A unified account. Stanford University, unpublished ms. <https://web.stanford.edu/~bclevin/alt06.pdf>

Pinker, S. (1989). *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.

甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を図ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
 2. 機関誌『甲南英文学』の発行
 3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。
1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
 2. 名誉会員 本会の発展に著しく貢献した者
 3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、会計2名、会計監査2名、大会準備委員長1名、編集委員長1名、幹事2名。
2. 役員の任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
 3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 4. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 5. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 6. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
 7. 会計は、本会の財務を執行する。
 8. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
 9. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
 10. 編集委員長は、編集委員会を代表する。

11. 幹事は、本会の会務を執行する。
12. 役員に事故がある場合、会長、副会長はその役員の職務を代行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間3,000円、学生会員については1,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会 第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会 第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学から若干名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。

この規約は、平成11年6月26日に改訂。

この規約は、平成13年6月23日に改訂。

この規約は、平成17年7月3日に改訂。

この規約は、平成21年6月27日に改訂。

この規約は、平成22年7月3日に改訂。

この規約は、平成23年4月1日に改訂。

この規約は、平成28年9月11日に改訂。

この規約は、平成29年7月8日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は 1 部プリントアウトして郵送するか PDF 形式で保存した電子ファイルを任意の方法で送付するとともに、Word ファイル形式 (.doc または .docx) の電子データを任意の方法で編集委員長宛に提出する。和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスはおよそ 150 語程度とする。
3. 長さは下記書式に従った上で 20 枚程度とする。
4. 書式は以下の通りとする。
 - a. 「ページ設定」は A5 サイズとする。
 - b. 「文字数と行数」は「行数のみを指定する」「25 行」に設定する。
 - c. 「余白」は上 25mm, 下・左・右 20mm, ヘッダー 15mm, フッター 17.5mm とする。
 - d. フォントは、日本語フォント「MS 明朝」10pt, 英語「Times New Roman」10pt とする。
 - e. タイトル・名前フォント 12pt, 本文 10pt, 参考文献 9pt とする。
 - f. 注は原稿の末尾に付ける。
 - g. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - h. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
 - i. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合 *MLA Handbook*、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet*、それぞれの最新版に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は 11 月 30 日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を 1200 字（英文の場合は 500 語）程度にまとめて、プリントアウトしたもの 1 部または PDF ファイルを Word 形式の電子データとともに大会準備委員長宛に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割り振りは、大会準備委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、原則として一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

ISSN 1883-9924

甲 南 英 文 学

No. 36・37

令和 4 年 6 月 7 日 印刷

—非 売 品—

令和 4 年 7 月 2 日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付
